三十　後のドウミヌスの段
三十一　イテ・ミサ・エス(Ite missa est)の段
三十二　ベンサン(benção)の段
三十三　末のエワンゼリヨ
【第二章】サンチイシモ・サカラメント(santissimo sacramento)のラタニヤス(latainhas)　一九—二二
【第三章】一七日に分くる最初のメヂタサン(觀念 meditação)の七ケ條、二三—一〇二
一　セクンダ・ヘリア(secunda feria月曜)　二三オ
二　テルシヤ・ヘリア(tertia feria火曜)　三四オ
三　クワルタ・ヘリヤ(quarta feria水曜)　四四ウ
四　キンタ・ヘリヤ(quinta feria木曜)　五三ウ
五　セスタ・ヘリヤ(sexta feria金曜)　六二ウ
六　サバト(sabbato土曜)　七三オ
七　ドミンゴ(domingo日曜)　八七ウ
八　右のメヂタサン并に其德儀の事　九九オ
【第四章】一〇三—一三八
一　願念の本　一〇三オ
二　願念の條々　一〇八オ
三　コロキヨ(colloquio)　一一四ウ
四　同、サンタ・マリヤへ　一一五ウ
五　死するの願念　一一七オ
六　アベ・マリヤの時の願念　一二〇ウ
七　エサメ(exame)の事　一二四オ
八　御紙しの觀念　一三二ウ

以上諸章のうち第一章ミイサの式定に關するものは、明末艾儒略（伊太利出身の教父ヂユリオ・アレニ Giulio Aleni)の編述にかゝる『彌撒祭義』などと類を同じうす。予輩は攝津高槻在東氏所藏の吉利支丹抄物

の一章を名づけて Ritus Celebrandi Missam ともいふべく、即ち本學所藏の一六五六年巴里刊拉丁文の『彌撒錄』(1)に掲ぐる所と參考して得ること少からず。明治元年長崎版『聖教初學要理』卷四秘跡之事の一篇、亦對照すべき點多し。御彌撒之事、「御みいさのおがみやう」の章の如き特に一見すべし。此書は三百有餘年前西肥地方に於て讀誦せられし要文を幕府季世のころ錄して、司教ベルナルド・プチジャン Bernard Petitjean の刊行せるものにして、羅馬の諸文庫に藏する所の『コンヒサン』及び『ドチリナ・キリシタン』(サトー氏「日本耶蘇會刊行書志」第八號第九號第十一號)と對校すべきもの多きが如し。これら三本みな平假名交り和裝本にして、その寫眞は遠からず舶載すべければ、異日この東本吉利支丹抄物とも比較せんことを期す。本章の全文は今茲に之を印刷に附し、文中に見えたる洋語名彙をその末に附錄して考究に便にせり。此章三十三段より成れるは、基督の享年三十三歲なるに因みしなり。第十七段の次に、別に數字を以て標せざる一段を附載せるは、右の三十三數に泥みたるが爲か。

第二章の連禱(ラタニヤス)は、首めの方二頁なるキリエレイゾンを、寫眞及び活字に印行し、舊譯を添へ、併せて略註を施せり。(寫眞は報告書原本にあり、以下同じ)

第三章、七曜のメヂタサン七ケ條のうち、寫眞に附したるは、セクンダヘリヤ(月曜)の條の首(二十三丁オ)、テルシヤヘリヤ(火曜)の條の中程(三十九丁オ)、セスタヘリヤ(金曜)の條の首(六十二丁ウ)、サバト(土曜)の條部首(七十三丁オ)、ドミンゴ(日曜)の條の首(八十八丁オ)、尾(九十九丁オ)及び本章總括の一節の首同上にして、印刷に附したるは、右の諸條及び之と連接せる前後の文章等なり。洋語名彙は次章の分と共に最後に附載したれど、所揭の洋語は、抄出せる文章中に出づるものに限りたり。

第四章、願念に關する諸節は、浦川和三郎氏の『公教會の復活』附錄西肥生月嶋に傳來せし祈禱文のうち「七度の觀念」と題せる一章と對照すべし。この中にもコロキヨ(會話=祈願)を幷記しあり。太田全齋の抄せし『契利斯督記』には萬治年中の舊記に錄せる「七所の願念」のことを記載したれど、實質に及ぶ所なければ參考に資する所なし。今寫眞

に出せるは、第一節「願念の本」の首百三丁オ、第七節「エサメの事」の首百二十四丁オ尾百三十二丁ウ、第八節「御糺しの願念」の首同上尾百三十八丁ウにして、それらの部分及び之に連接せる前後の文章は活字に印行して示せり。第六節「アベ・マリヤの時の願念」は全文を印刷し、其の一頁を寫眞とせり。本章抄錄中の洋語名彙は、第三章抄錄中のものと共に末に附して參照に便にす。

この抄物の文體は、當代の吉利支丹文學の文體と同じく近古の俗文に根ざし、語氣に間間宗門の臭味あれども、筆致雅馴なる趣なきにあらず。行文、中世の物語草紙などの慣用字句のおのづから取入れられたるあり、佛教用語が多くの拉丁葡萄牙語の間に伍して散見せるあり、固より文章として勝れたる所はなけれど、一種の異色を帶びて讀者の意を惹く所大なるべし。文字は行數大小一樣ならず、前後精粗の差別あれども、筆蹟巧にして、殊に初章彌撒の部の如きは頗るみごとなる出來なり。時に吉利支丹版の書物中に見ゆる字形を連想せしむる文字も見え、變體假名亦頗る多きも、この報告書中には、すべて通用の假名に書改めて印刷せり。耶蘇基利斯督また提宇子などの拉丁名のモノグラム（合綴字）を用ゐしこと、『ぎや・ど・べかどうる』『破提宇子』等の慶長元和年間の刊本に見ゆる所の如くなれど、字形に少異あり。文中、方言訛音も交り、清濁の相違も認めらる。中には發音言語上の相違せるにあらで、符號文字の書違へもあるなるべし。往々脫字あり、文句の不通あり、誤寫せる所多きは致し方なし。

從來吉利支丹側の文獻に關しては、文書版本等の我國に發見せられしこと往々あり、又近年は古刊本の歐洲より再び本邦に回收せられ、寫眞の我國の學府文庫等に將來せられしもの相踵ぐと雖も、抄物類の普く世に知られしものに至つては、東京帝室博物館所藏の『耶蘇教寫經』と附名せる拉丁文聖歌（プサルムス）を平假名にて書きたる小本一冊あるに止まれり。この冊子は、天草亂後官沒せしものと傳へられ、片山直人獻納とあり、內容は東本抄物と異なれども、大小の差こそあれ形式相似かよひたる趣ありとす。その他東京林若吉氏が『こんてんつすむんぢ』と共に先年越前より得られし吉利支丹曆書の如きものあり。長崎浦川和三郎氏が『公教會の復活』の附錄に刊行せられし浦上外海地方及び生月嶋に傳はりし祈禱文

の類あり。その他幕末明初ベルナルド・プチジャン師が編錄印行せし『聖教初學要理』と『聖教日課』とあれど、これら西肥に發見せられし抄物の原本、今いづくに傳はれるやらん予輩未だ詳にせず。

新井白石の『西洋紀聞』及その以前については姑く說かず、紀聞以後、幕府晩季に方りて諸藩の學者が宗門に關する遺品抄物を編輯して一書を作り或は單に書留め又謄寫などせしもの、福山藩の太田全齋の『契利斯督記』水戸藩の立原翠軒の『切支丹法器』、仙臺藩の大槻磐水の『金城秘韞』あり。前二書は寛政年間、後の一書は文化九年の編なり。太田氏の書は、萬治頃の抄物を錄せしものにして東本吉利支丹抄物に對校すべき資料あり。大槻氏の書は、支倉六右衞門南蠻將來の諸道具を書上げて考究せしもの、題して「歸朝常長道具考略」とあり。これに由るに、切支丹諸道具入箱の中に書物大小十九冊ありき。こは六右衞門等の覺書や聞書にて日本紙の假名本なる由に見えたり。然るに、この書物、文化年間には存在したりしに、明治年間早く亡失して影を留めずなりしと、大槻文彥博士の同書補遺に見ゆ。惜むべきことなり。

立原甚五郎（翠軒）が寛政十二年庚申識せる『切支丹法器』[2]と題する書は、予大正九年四月水戸彰考館に於て一見せし所なるが、その書上目錄によるに、服飾類、コンタス、メダル、繪畫銅像などの遺品の外、抄物類には、曆本の如きもの二枚、寫本の横帳三冊、折本一冊、綴本二冊、平假名三冊など存したりと見ゆ。これらの寫本は辭書の類、祈禱文その他宗門の抄物なるが如く、外に蠻書と標するもの大小二冊あるが、こは洋字の印本なりとおぼし。これらの諸品は、立原氏の識語によれば、元和寛永頃邪宗徒より沒收せしものに屬するが如く、本年東京に於て水戸家の祕庫より耶蘇教遺物を發見[3]せりといふは、これらの物と關せざるや否やを詳にせざれど、若し今日それらの物が發見せられたらんには、東本抄物にも有力なる光明を與ふるものと謂ふべし。サトウ氏が往年紹介せし同侯爵家所藏の慶長五年長崎耶蘇會學林刊行本『ドチリナ・キリシタン』[4]の如きが、類本と對校上裨益を與へしことは、此方面の研究家の均しく認むる所なり。

註(1)　原題に云はく、Missale Romanum, ex Decreto Sacrosancti Concilii Tridentini Restitutum. Parisiis, MDCLVI 類本は種々あれど、今はたゞ本學所藏本のみを擧げたり。

アンリ・コルヂエーの書志によれば、利類思 Luigi Buglio の譯書にて『彌撒經典』と題する西紀一六七〇（康熙九年）北京刊行本ある由なり。

(2)　「切支丹法器」は、內題にては「切支丹法器諸品物」とあり、この記錄に名を揭ぐる所の抄物より摘錄せる文章あり。今左に抄出して參考に資す。

きりしたんとはJXO（原本合字）の御おしへを心よりひいですにうくるのみならず、ことば身もちを以てあらわす人なり。

きりしたんはきりしとよりかたとる名なり。XO（合字）と申は、油をぬられ玉ふといふこゝろなり。むかしは、ていわう、させるどうて、ほろへいた、此の三さまの人導き油をぬられ玉ひしとなり。JXOは帝王上のていわう、させるどうての上のさせるどうて、ほろへいたの上のほろへいたにてましますによつて、くだんのとき油のかわりにすひりつさんとのがらさをみちてもたせられたる故、XOと名付奉る也。

おらしよといふは、我念を天に通じ御主DS（合字）に申上るのぞみをかなへ玉ふ道はし也。

右の如き語釋の外、「ソマナの內」、「アッベントの內」「年中の祝」などと題して、宗門の名稱の解釋を揭ぐれど煩を避けて今は省きぬ。

本書彰考館本には、寬文十二年庚申六月二十九日立原甚五郎識とあれども、寬文は寬政の誤寫なるべく、多分烈公の時、水藩にて邪宗門の攷究を盡し、安政六年豐田天功の「息距篇」三十册編纂の擧もありし程なれば、それらの機に寫しゝものにはあらぬかと思はる。

(3)　「圖書館雜誌」、第五十二號（大正十二年三月）雜報「水戸家傳來の基督教書類」等を見るべし。

(4)　「日本亞細亞協會雜誌」、第二十七卷第二（一八九九年明治三十二年刊）サトウ氏の解說及びタイトルペイヂを附して全文を羅馬字の儘に揭載せり。

一　御みいさのおかみやう幷ニ觀念ノ事

一　こんびさんのだん。あだんとかにおちられたることをこうくわひいたし、あやまりのおらしよを申上へし。

二　いんどろいとのだん。これはほろへたすJ御しゆつせのしさいを(?)かねてつけ申さ

れたる(ことをくはん?)ねんいたすところなり。

三　きりゑいれいぞんのだん。此世界の善人りんぼの御人數ふかく御しゆつせをまちかね申されたるところをくわん念いたすへし。

四　ぐろふりや・いねきせりすのだん。是は御たんじやうの時あんしようたひ申されたることはなれば、御出世の御をんをくはん念いたすところなり。

五　しよばんのどうみぬんす・おびすくんは、三人のていわうに御身をあらわし玉ふ所なれば、へりくたりを以テしんもつとなるさきりひいしよをさゝけ申とのたがひにすゝめあひ奉る所也。

六　おらしよのだん。十二の御とし、天ほろにおゐてさんた・まりやを見つけられ玉ふ所なれば此あたるにおいてあにまを以テみつけたてまつるのそむことはりをこひ奉るところなり。

七　ゑびすとらのだん。是はさん・じゆあんJの御さきへまかりいでら(?)れ、ぱうちずも、へにてんしやのだうりををしへ玉ふ所なれは、こゝろをもよおし心中をとゝのへかくごのだんなり。

八　あれるうやのだん。是はさん・しゆあんの御てよりJのぱうちずもをかゝり玉ふ時、天ひらけたる御よろこびの所なれば、いさみを以テでうす・ひいりよにてまします御子をしんじつにうやまいたてまつるへき所なり。

九　御きやうを左右になおし玉ふ事。じゆてよの一もん御をしへをうつし玉ふ所なれば、かつうはおそれ、かつうは御おんの御れいを申あけ奉る也。

十　ゑわんぜりよのだん。是はJちきの御だんぎなれは、此たつとき御おしへをたもち奉るがらさをこいたてまつるところなり。

十一　けれいどのだん。是はもろ〳〵のあぼうすとろを以テ御をしへをひろめ玉ふことはりなれは、ひいてすをつよくうけ奉り、からさをねかひ申ところなり。

十二　二ばんのたうみぬんすのだん。是ぜす・きりしとかず〳〵のきどくをあらはし玉ふ

を以テ、御身をし□人にしらせ玉ふ。いよ〳〵ひいですを以て、Jをしたひ奉りねかいをもよおす也。

十三　みつをかりずに玉ふと〻のへのだん。是はばすくわのせやをと〻のへたまひ、ゑうかりすちやのさからめんとをさだめたまふだんなり。

十四　おへりとありやのだん。是はせやすきてちりのおこなひをさだめ、御をしへ御たいをさきりひいしよとしてさ〻け奉るみちをさためたまふこ〻ろなり。

十五　てをあらい玉ふだん。是はJしよひやうをなおしたまふ所なれば、我等があにまのくらいもいやしきよめ玉へと頼み奉るだん也。

十六　おらてふらてのたん。じゆでよりせめられたまひて御身をつ〻しみ玉ふ所なれば、ぜず〻の御しんろうをいたみかなしみたてまつるだん也。

十七　へれぱしよんの(だん)。是はぜず〻ぜるざれんへいたり玉ふ時、萬人よろこびをもてむかへ奉る所なれは、た〻いま是あるたるへきたり玉ふべき所をくはんねんし奉り、あにまを以テ御むかへにまかりいで、もろ〳〵のあんじよのたつとみ申さる〻さんとす〳〵のことはを以テ我もたつとみたてまつるところ也。

○　めゝんどのだん。是はあく人のてにかゝりからめとられ玉ふ御ぱしよん所なれば、なみたを以テ是をくはんし奉る。是御功力□たいせられわれ人をたすけまへと頼みたてまつり、此さきりひいしよをうけとりたまへねんし奉るだん也。爰においてこ〻ろあてある人のため也。たいもくを申あくる所也。

十八　かりすのうへに兩のてをおい玉ふ事は、石のはしらにからめつけ奉りちやうちやくいたし奉る事をくはんねんいたすへし。

十九　あふすちやを上玉ふだん。是はひらとすJを萬人にみせ□ゑきせ・おふもと申たることく、かのぎよくたいをてうす・はあてれへ御めにかけ、此きずの御しんろうをさけ奉るさきりひいしよのたん也。

二十　かありすをあけ玉ふ時、ひらとすの所にて御せんたいよりなかし玉ふ御ちを我等か

科かのたいもくとしてささけ奉る所なれは、此さきりひいしよをたしかに請取にたまへとねんし奉るだん也。

二十一　あふすちやとかりすと一ツつゝあけ玉ふ事は、くるすにかゝり玉ひてDはあてれへ御みをさゝけ玉ふ所なれは、わかあにましきたいともにさゝけ、さきりひしよになしたてまつるだん也。

二十二　はあてる、のふすてるのだん。是はくるすのうへにてあく人のためにDはあてれをたのみたみふ所なれは、彼おらしよに我等一ちし奉り、ともにとかの御ゆるしをはしめとして、あにましきたいのために無他いかほとの事をたのみたてまつるたん也。

二十三　はあせんのだん。是はくるすにおいてDも我等とのあひたに無事をさつけ玉ふだんなれは、こつかしょだいみやうの無事をねんし奉所なり。

二十四　あふすちやを三ツにわり玉ふだん。是は右のさきりひいしよこゝろさす所をあらはし玉ふ儀也。一ツにははらいぞのへあとのぐらふりやノため一ツにはげんぜのゑけれしやくみの衆のからさ御はんしやうのため、三ツにはふるかたうりよのあにまくつろきのため、是也。又Dの御體も御はしよんを以て三ところにわかり玉ふ儀をくはんし奉るへし。一ツには御しかい石くはんにおさまり玉ふ、二ツは御あにま、りんほへ下り玉ふ、三ツには御ちくるすのもとになかしおき玉ふ也。

二十五　あにうすていのだん。是はむかしひつしをさゝけ申さるゝことく、いま此さきりひいしよをさゝけ奉るとくはんねんし(たる)たんなれは。とかの御ゆるしを別てこい奉るへし。

二十六　だうみぬんすのだん。是はくるすよりおろし奉る御しかいを、さんた・まりやいたき玉ひ、おの〳〵御せうたんなされたる所なれは我かとがによつてかゝり玉ふことく、わがあにまにきたりたまふへき功力なき事をなけき奉るへきたん也。

二十七　こむによのだん。御しかい石くはんにおさめ申たる所なれは、我等かあにまにやどし奉へき事をねんし申だん也。此ころにすこしよみ玉ふきやうもくはゝる也。

二十八　だうみぬんす・おびすくんのだん。是はいきかへり玉ひて、あまたの御でしに御たいをあらはし玉ふところ也。

二十九　おらしよのだん。是は御上天なされ、我等かためにたへずDはあてれへ御おらしよなし玉ふ所なれは、右條々の御おんの御れいを申上るたん也。

三十　のちのたうみぬんすのたんは、これはじゆいぞの時ふたゝびあまくたり玉ひ萬人に御みをあらはし玉ふだん也。

三十一　いてみさへすのだん。萬事御じやうじゆのしるしとして諸人に御いとまをつかはし玉ふだん也。

三十二　へんさんのだん。是はしゆいぞの御けつぢやくとして、善人あく人におほせわたさるゝ御ことはなれは、なかにもぜん人にくわほうをさつけ玉ふ事をくはんねんいたし奉るたん也。

三十三　すへのゐわんぜりよにははらいぞのなかきみよをよろこび奉る所なれは、後くろふりやにいたり奉る事をねかい奉るたんなり。

註　Jesus Christus 並に Deus の略合字は印刷の便宜上J字とD字とにて示せり。

參照、洋語索引（第一章）

あふすちや（一九）（二一）（二四）　hóstia（拉）　餅、菓子○阿斯底亞（日課）
あだん（一）　Adam
あにうすてい（二五）　Agnus Dei（拉）　天主の羔（日課）
あにま（六）（一五）（一七）（二一）（二二）（二四）（二六）（二七）　anima（拉）　靈魂
あぽうすとろ（一一）　apostolo　宗徒
あるたる（一七）あたる？（六）　altar　（祭壇）
あれるうや（八）　allel·ia　阿列爾亞
あんじよ（四）（一七）　anjo　天神、天人
いてみさへす（三一）　Ite missa est（拉丁語祈禱文の句）「往け、ミイサ終

る」

いんどろいと(一)	intróito (入祭禱)
えうかりすちや(一三)	eucharistia 聖体(聖体)
えきせ・おふも(一九)	Ecce Homo(拉) 「見よ、人」の義
えけれしや(二四)	ecclesia(拉) 會(えけれしや)、教會(えけれしや)
えぴすとら(七)	epistola(拉) (書翰)
えわんぜりよ(一〇)(三三)	evangelho (福音)
【あふすちや】	(前出)
おくりとおりや(一四)	offertoria(拉)
おらしよ(一)(六)(二一)(二九)	oratio(拉) 祈禱(おらしよ)、經(おらしよ)
おらてふらて(一六)	orate fratres (拉丁語所藏文の句)「祈れ、兄弟等よ」
がらさ(一〇)(二四)	graça 聖寵(がらさ)
かりす(一四)(一八)(二一)かあり す(二〇)	calis, caliz 嘉利斯(日課)
きりえいれいぜん(三)	Kyrie eleison (天章を見よ)
くるす(二一)(二三)(二四)(二六)	cruz 十字架(くるす)
ぐろふりや(二四)(三三)	gloria(拉) 榮福(ぐろふ)(日課)
ぐろふりやいねきせりす(四)	gloria in excelis (所藏文の句、天上の榮福)
けれいど(一一)	credo 信(けれど)道
こむによ(二七)	communio(拉) 通功(こむによ)
こんぴさん(一)	confissao 告解(こんぴさん)
さからめんと(一三)	sacramento 秘蹟(さからめんと)、聖事秘蹟(さからめんと)
さきりひしよ(五)(一四)(一七附)(一九)(二〇)(二一)(二四)(二五)	sacrificio (犧牲、御供)
さん・じゆあん(七)(八)	San João
さんた・まりや(六)(二六)	Santa Maria 聖瑪利亞(さんたまりや)
さんとす(一七)	santos 諸聖(さんとす)
じゆいぞ(三〇)(三二)	juizo 御糾明(じゆいぞ)(神の審判)
じゆで よ(九)(一六)	Judeo (如達亞(じゆで よ))

ぜすゝ(一六)(一七)	Jesus
ぜす・きりしと(一二)	Jesus Christo
ぢるされん(一七)	Jerusalem
だうみぬんす(一二)(二六)(三〇)	Dominus(拉) 御主
たうみぬんす・おびすくん(九)(二八)	Dominus vobiscum(拉) (拉丁祈藏文の句、御主等主と共に在はせ)
てうす・はあてれ(一九)	Deus Padre 天主聖父 (日課)
てうす・ひいりよ(八)	Deus Filho 天主救略(日課)
天ほろ(六)	templo (殿堂)
はあせん(二三)ばしよん(一七附)はしよん(二四)	paixão 御苦難
はあてろ・のふすてる(二二)	Paternoster (祈藏文の名)
はあてれ(二一)(二二)(二九)	Padre 神父
【てうす・はあてれ】	(前田)
ばうちすも(七)	bautismo 洗礼、御水授り
ぱすくわ(一三)	pasqua 御巳斯卦
はらいぞ(二四)(三三)	paraiso 天堂
ひいてす(一一)(一二)	fides(拉) 信德
【ひいりよ、てうす、ひいりよ】	(前田)
ひらとす(一九)(二〇)	Pilatos 比辨多(日課)
ふるかたうりよ(二四)	purgatorio 煉獄
ゝあと(二四)	beato 聖人
ゝにてんしや(七)	penitencia (悔悛)
ゝれぱしよん(一七)	prefacio(?) (序誦)
ゝんさん(三二)	benção (降福、祝藏)
ほろゝたす(二)	prophetas (豫言者)
みいさ(題名)	missa (拉) 御彌撒
めゝんど(一七附)	memento (紀念)

りんぼ(三)(二四)　limbo（陰府）

註　語彙中に(拉)と標したるは拉丁語形にして、その他特に標せざる最多數は葡萄牙語形なり。拉葡同形なるもの、又拉葡混同とも認めらるゝもの、拉語の儘諸國に通用せるもの、神人の名稱地名等煩を避けて一々註せず。譯語譯字振假名は司教ベルナルド・プチジュアンが錄して明治元年長崎に刊行の聖教初學要理によれり。文字は多く明末清初の天主教者の漢譯字を採りたるが如し。ま丶聖教日課中に見ゆる漢字をも註しおけり。この書も亦ベルナルド司教の出版にして、原本元と故本學教授上田敏君の愛藏書なりしを、歿後附屬圖書館の有に歸せるものにして、故人は生前大正元年八月その校註本を藝文に附載し、歿後遺族大正六年之を單行せり。

（　）中の譯字はラゲー師の「佛和大辭典」等に據り現行の定譯を宛てたるものにして、必しも公教會の所用を採りしにあらず。又用語の解釋は煩はしければ故らに註記せず、且つ宗儀の故實を究めたる上ならでは詳にし難き所多し。

二　さんちいしもさからめんと Santissimo Sacramento のらたにやす Ladainhas

聖瑪利亞頌德の禱文（聖教日課）

きりゑれいそん	きりしてれいそん	御主我等を憐み給へ	
Kyrie eleison	Christe eleison	基利斯督我らを憐み給へ	
きりゑれいそん	きりしてれいそん	同	
Kyrie eleison	Christe eleison	同	
きりして　あうて　なふす	きりして　ゑさうて　なふす	基利斯督俯て我らに聽き給へ	
Christe　audi　nos	Christe　exaudi　nos	基利斯督我らを聽き屆け給へ	
はあてる　て　せり	D	天に在す天主御父	
Pater　de　ecelis	Deus		
みせれゝ　なうひす		我らを憐み給へ	
Miserere　nobis			
ひり　れてんとる　むんち	D	世界を購ひ給ふ天主御子	
Fili　redemptor　mundi	Deus		

みせれゝ　なうひす
Miserere　nobis　同

すひりっ　さんて　D　同
Spiritu　Sancte　Deus　天主斯彼利多三多（でうすすぴりとさんと）

さんた　ちりにたす　うぬす　D　同
Sancta　Trinitas　Unus　Deus　三位御一體の天主（みつのべるそうなたいったい　でうす）

註　右本文は拉丁語の平假名書きなるが、題名のみは葡萄牙語を邦語の格にてあらはせり。葡語サンチイシモ・サカラメントは直譯して「至極の尊き祕跡」の義、ラタニヤスは葡語のラダイニア又リタニアの寢數形に當る。英佛にてリタニー獨にてリタナイと音じ、邦譯して連禱といふ。初二行の原文がもと希臘語に出でしことは言を俟たず。全文左側に横字を並記し、下段にその雅訓なる舊譯文を對照せしめたるは共に編者のわざなり。下段なるは西肥の信徒間に傳誦せられし文句を錄して明治七年ベルナルド・プチジャンの印行したる「聖教日課」中に存せるに據りたるなり。

抄物原本には、以下別の連禱文三十條行を同く拉丁語のまゝ錄したれど今之を省略せり。

「公教會の復活」附錄、生月嶋傳來の祈禱文にも、ダ、イヤス（ラタニヤスの九州訛り）とて左の文句を揭ぐ。

キリエ　レンゾ　キリステ　レンゾ
キリステ　アウデノビス　キリステ　ジャウデ　ノビス
マイテル　デジラシ　デウス　ミジリ、　ノビス
ヒグラ　レントロンデ　デウス　同
スピリト　サンチ　デウス　同
サンタ　チリノト　ナナサ　デウス　同

（前後の文句略す）

傳誦の間音韻の訛りしこと、殊に九州の土音のまゝに訛りし點、興味甚深し。

三　一七日にわくる最初のめぢ(た)さんの七ケ條

○第一、せくんだへりあ

まづしよ日には我が身のぼんくわを思ひ出す事。しんしやうを見しる理をくふうすべき事也。ぢうくわをおもひ出すを以テD御一體ヨリほかによき事をもち玉はさるどうりをかん

ぺんすべし。それすなはちしよぜんのふもとかうしたるへりくだりなり。ぜんじをもとめたるくわん念也。（下略）

○てるしや・へりあ

（上略）第四、なからゆる内にもひつぢやうたる事まれに萬事へんゑきする事をくわんせよ。一ツみにとりては物ごとにうつろひ安くしてへんずる事風にしたがうなみのごとく也。昨日まで思ひし人を今日はにくみ、あしたに定めし事をいまたはかる事のみなれば、何をか頼、何をかたのしまぬ。めいよたから知ぎやう等も皆かれに同じ。昨日ばんぜうのきみとあをかれし貴人も、今日はるらうして人の下人と成事もあり。ゑひぐわゑひようなりしも、こつしきに及事もあり。命のうつり替る事かんべんするに、一時の命も存命をうるにはあらずしてくち行もの也。たとへばともし火のかゝやくほと耗り行か如也。眞にあしたに開ケ、晝にはしほみ、暮にはちりみたるゝ花のごとし。如此かわり行處をさしていざいやすの語に、こつにくは山野の草なれば其たのしみは花のごとし。是に付てさん・せらうにもの語に、人間のあたなる事を見るに、せつなもさかゑ行か、をとろへ行かを、二ツをはなれてたゝゑて有事なし。かんやうの事を云内にわれ今は次第におとり行也。眞に此内は山野の千草の如ク、たのしみは花なりと云へル事、れきぜんふんみやう也。今まてちぶさきくわへし子は、見る間にたちて行キ、今日あよみはじむると思へばはや年さかりになり、若年と見へしは老人と成り、せい人しけるよと思わんさきに、はやらうじんとなる事をおどろくもの也。きせん萬人ヨリしたわれ、しゆうがんびれひなる女もひたいにしわをたゝみ、こひしのびし人までもかへてみぐるしく思ひすさむもの也。（下略）

○せすた・へりあ

五日にはいんへるのゝくるしみをくわんすべし。此めぢたさんにはてうすの御おそれと科をにくむ心をいよ〳〵めたに思ひすへべき爲也。さん・べるなるどのいわく、いんへるのゝくるしみにはPたちおしへ玉ふ如ク、しきさう有すかたたとへのおもかけを以テくわんすへき者也と云り。（下略）

○さばと

六日にははらいそのべなへんつらんさのぐらうりやをくわんすべし。是いよ〳〵世をいとひ、かのたのしみを頼奉る心をおこすへき爲也。此くわん念のもとつきの爲□□多き中に五ツの儀をとりわきくわん念すべし。一ツには所がらのすくれたる事、二ツには□ないの人のいさましき事、三ツにはてうすをおかみ奉る事、四ツには色身のぐらうりやの事、五ツにはあらゆる吉事をきわむへき事是也。（下略）

○どみんご

とみんこにはDの御恩のくわん念し奉るべし。其御禮を申上べき爲、又は其御大切にもへたち奉るへきため也。さる程にてうすの御恩と申奉る事かきりなしと云共、いかにも大き成をゑらひ五ケでうにつもつて是をたい（切に？）しあんすへき也。一には御作の御恩、二には納め玉ふ事、三にはたすけ玉ふ事、四には蒙る御恩、五には一人ッゝにとりわけてかうむる御おん、中にもかくれて人しらずの御恩、是也。（中略）

其上此くわん（念？）を以テわきまふへきは、此等の御恩にヨリテいか斗の御かんちやうを請おい奉り、我方ヨリはうじ奉る事の分りやうヨリも、請おひ奉る方は、尙多キ事をわきまへべし。其せうごにはほうじ奉ル事は云に及す、わきまふる事にさへ及び奉るらされは也。

○右のめぢたさん并其徳儀事

右條々の儀、皆取入りの時くわんすべし。是によつて七ケ條にわけて七くわん念と名付ル也。しかりといゑとも、是ヨリほかなる理りをくわん念致すましきにはあらず。其故はさいしよに云へる如、我等か心中のおそれと大切ををこし御さづけのまだめんとをたもたするすゝめとして、理りはみなめぢたさんの理りと心得べし。（下略）

四

願念の本

きりしたんのくわん念といふは、御影の前にさしむかひこんたすをつまぐりておらしよを申事にてはなし。たゝくわん念すべき題目をとりて、願念には此事をくわんすべし。定めて其題目にさま〳〵の儀りを付て一この間我身におこなふべきでう〳〵の安心をきわめ、又は御おんのふかき事をわきまへ御禮を申上、又はてうすヨリわれ等に與へくださるる御しひをみしり御大切にもへたち、りんじうのみきり此しゆぎやうを身になすへし、とのさとりをひらくためのくわん念也。（下略）

くわんねんの條々

てうす人を作り玉ふ事は、御作(者)御主を御大切に存知奉り御奉公仕るを以テ其身のこしやうのたすかりをもとめさせたまわんため也。それによてDを見しりたてまつり御奉公致すきりしたんは人間の中のうとんげ、くわはうの中のくわはうたる者也。

てうすはなつらの德に對し奉りてもつかへ奉らん事かんようなるのみならず、我等に與へ玉ふでう〳〵、かく別の御おんに對したてまつりて、御大切に存知たてまつらすしてかなわん儀也。此御恩の中に我等を作り玉ふ事、尤第一の御恩也。（下略）

ころきよ

いかに天地の御あるし、我等か御作なされてへ申上奉る。御身はせかと命ノみなかみにてましますによて、有ほと命は御身より出し玉ひ、あるほとのもの御身ヨリつくられ奉る也。御身ましまさすんは、我命も此身も有へからす。今こゝろくわん念ヨリまこと(?)のひかりをうけ奉り、御身とわれをはしり奉るか故に、我かひかり御身を貴ミ奉る。こひねかはくは、此ひかりをしするきわまて御身を貴みとゝけ、今世ヨリこしやうに至るまて、御身を貴みとゝけ奉るやうにはからい玉へ。しんしつに賴奉る。

同、さんたまりやへ

いかにひるせんさんた・まりや、つゝしみうやまつて申上奉る。われひほのたいないよりいとけなきほとは、いは木に同ク、春秋をおくり、年たけ世あひさかんなれは、すてにいもせの津を渡り、世のうきよしに心をくたき、うき事きかぬよるべ何國そとたつねれは、て

んの御國より外になしと、露斗なるよすかをもとめて、つひにはかりなき御ひかりをかうふり、しするかけの國よりひかりのみちにいてなから、さいしやうのうみなをふかく、しやうしの山ます〳〵たかうして、御大切のさわりとなりてしつむ我等をたすけたまへと、爰にてきりへあへまりや三くわん申てくわん念をいたす也。

しするくわん念

しするありさまを目の前にくわんすへし。しからはさいこの時みたるゝ事あるへからす。此くわん念をする人は、世のうきしつみ、さかへおとろへ、いつれもゆめのたはふれそとわきまふるか故に、よしあしに心をとゝめす、此ひとへにてんのすみかにのみ心をよするもの也。御あるしせすきりしとの御ことはに、いかに人、せかひをこと〳〵くもうくるといふとも、あにまニいたみを請るにおひては、何のゑきそと、又のたまはくいかにぐにん、今や□海ヨリあにまをうはうべし。しからはなんぢか調たらん事々、たか物と成へきそ、まことなるかな此事、四かひを一人のたなこゝろにきり、百のたからをわれひとりしてもちあまるといふ共、かはねの上に露ほとも用なき事、人事に目の前に見すや。これを心のそこよりさとりたるにおいては□にこそ御はしよんおつとめにはおよひたまへ。これほとの大事にあらすんばてうす此おつとめをしたまわんや。これによてきりしたんは夜事にせんあくをたゝしきわめて、科あれはなみたをなかし、おゆるしをこひ奉り、御奉公をつとめたらは、其御禮を申上、すこしのぜんこんも御身の御血のおくりきにあわせ玉ひて、我等か大切のしるしとも御らんぜば、何の悦ひか是にすぐへきと、くわひかうほつくわんいたすへし。爰にてこゝろきよを申上、今夜此ふしとをさらすして、あにまめし上らるゝにおひてはいまの身の科をおゆるしなされ、からさのみちをはつれ奉らんやうにと、ふかく御しひをこひ奉り、あすを期むかる事なかれ。

あへまりやの時の願念、貴きさんた・まりやの御上をくわんする也。

天地はしまりてより、此たつときひるせん、まりやの御時まで、せかいにすひりつのみちは、やみとなりてにごりきわまりたる中に、此きみたゝひとりむかしもいまたためしなき

ひるせんの御くわんをおこし玉ふ事、ていの中のはちすのことし。ひるせん女人にてまし
ます也。もとよりてうすも其御ためにゑらひ出玉へは、此きみ二八の春のすゑ三月二十五
日のたそかれ時に、さん・がびりゑるあんしよをさんた(まりや?)のしんこうへ(?)てん
の御使としてさし下し玉ふもの也。しかれはさん・がびりゑる、くわうみやうかゝやき、
いきやうくんするありさまにて、此きみの御前にかしこまり、いかに貴きまりやへ申上奉
る、一切の人間の御たすけては御身の御たい内にやとり玉ふへし、とつけ申されたり。御
返事に、見玉ふことく、われはつたなきてうすの御下女なれは、仰をそむくにあたわすと
の玉ふと共に、かの御體内に御あるしせす・きりしとの御むまにたてやとり玉ふと云ふ事を
目の前にくわんすへし。爰にてあへまりや返申てくわん念致すへし。

ゑさめの事

第一、へるしんぬをとなへ、其時の御おんの中にも其日蒙りたる御おんの御禮を申上る
事。

第二、我か身のあやまりを見わけしるからさを與へ玉へと賴奉り申へき事。

第三、心ことは身もちを以テ其日おちたる科をしあんし思ひ出すへし。

第四、こしかたをかう□とし今□さん・あくすちによの□き御はしよんのみすてりよに對
し奉りて自作のおらしよの事。(中略)

さんたまりやを賴たてまつりころきよを申へし。ころきよとは我か心のうちにある事をこ
とはにつゝりて申上る事也。

御たゝしのくわん念

我か身の上を糺明して、其日とかをおかさんにおひては、御れいと申上も、又惡事あつこ
ん惡念あると思はゝ大きにくいかなしみ、二たひ此事おもわしいはせしと思ひ定めて御ゆ
るしをこひ奉るべし。科をもちなからあらためすして年月をおくる人は、とりけた物にも
おとりたるとおもへ。それをいかにといふに、てうるいちくるいむしけらのたくひは、現
世一たん命斗をもちてしすると共になくなれは、善惡しやうしの御定めにもあつからす。

しかるに、人はあにま・すひりつあるの一命也。ふたゝひの命をもつによて、けん世にて思ひとおもひし念々、いひといひし事は、しとせししわざのせんあくを御きうめい有て、せん人にははらいそのたのしみ、あく人にはいんへるのゝくるしみを與へ玉ふ事、てんの如地のことし。もし此しやうはつあるま敷とおもはゞ、てんにも地にも四季萬物にも定め玉ふ主あるへからす。（中略）ある人、一期のあひたはこしやうとて何國をさしてあるへきそとておもひのまゝにくらせしか、りんしうのきわとなりて、あるものをくありけるものをあるものをと、いひてなく〳〵しゝたる也。此一大事をてうす御しひの上よりのかしたまわんた。（以下紙葉闕）

〔參照〕洋語索引（第三章及第四章の抄錄中所出に限る）

あにま・すひりつある　anima spiritual
あへ・まりや　Ave Maria
いさいやす　Isaias
いんへるの　inferno（地獄）
ゑさめ　exame（糺明）
こんたす　contas　珠數（訛コンタツ）
ころきよ　colloquio（對談會、話新願）
さばと　Sabbado（土曜）七日メ
さん・あぐすちにょ　San Agostinho
さん・がびりゑる　San Gabriel
さん・せらうにも　San Jerónymo
さん・べるなるど　San Bernardo
すひりつ　espirito（神靈）
せくんた・へりや　Secunda feria（拉）（月曜）二日メ
せすた・へりあ　Sexta feria（拉）（金曜）六日メ
てるしや・へりあ　Tertia feria（拉）（火曜）三日メ
どみんご　Domingo　主日（日曜）初日

なつら	Natura	（造化、天然）
ひるせん	virgem	童身（童貞）
べなへんつらんさ	benaventuran,a	（福樂）
へるしんぬ	madamento	（誠）
まだめんと	mysterio	（玄義）
みすてりよ	humanidade	（人性）
むまにたて	meditação	觀念（默想）
めぢたさん		

註　第一章中の洋語索引に出でたるものはこゝに省けり。洋名の多くは葡萄牙なり。されど拉丁語と同形のものも交れり。譯語は古き典據あるものをも取りたれど、新舊兩譯の未詳なる場合あれば、こゝには大概の該當を期したるのみ。

（大正十二年三月京都帝國大學考古學研究報告第七册）

乾坤辨說の原述者澤野忠庵

往時遠西より傳來した吉利支丹が我國の文化に及ぼした影響については功過共に擧ぐべきであるが、玆には姑く問題の範圍を縮めて異教の禁壓益々峻烈を極めた寛永年度以來、官憲に捕へられて止むを得ず轉宗又は歸順した結果が主な緣となつて本邦學藝の發達に資し或は幕府當代の辨用に供せられた南蠻宣教師の事蹟に關して述べて見ようと思ふ。是等極東布教の末期に方り、健氣にも渡航した伴天連のうち、其名の聞え其事の傳ふべきものは、先づ御國振の名を冒した澤野忠庵、岡本三右衞門の兩人とヨワン・バッティスタ・シローテとに止まると云つてよからう。この最後の伊太利出の聖（サン）・フランシスコ派の伴天連、原名ヂョヴンニ・バッチスタ・シドーチ Giovanni Battista Sidoti が新井白石に調べられた始

末は、著名過ぎて茲に說く要はない。次に、此伊人と同じくシチリヤ島の出身で而も鄕里も殆ど一處なる岡本三右衞門は、白石等によつてコンパニヤ・ジョセイフ、或はジョセイフ・コウロと呼ばれ原名をヂュセツペ・キアラ Giuseppe Chiara と稱する耶蘇會派(コンパニヤジエス)の宣敎師であつて、延寶三年には宗門之書物三冊を編して奉り、同六年には官庫所藏の天地之圖の說明及修理に任じた事もある。殊に「敎法の大要」等を認めた右の書冊が後年白石に利用されて、奇緣にも同鄕の後輩の究問に資せられたことは西洋紀聞等に見える通りである。其墓石の如きも先年史蹟探究者の調査に上ぼつた所である。彼及其同僚の捕縛糺明等の顚末は內外の記錄史乘に悉くしてあり、幽囚の事情は切支丹屋敷の沿革と離るべからざる關係を有つて居る。而して尙彼等の糺問には、今茲に主として敍述せんとする澤野忠庵といふ葡萄牙生れの轉び伴天連が、本邦の譯官と共に通詞の任に當つたことを一言して置くの要がある。

澤野忠庵は、本名クリストワン・フェレイラ Christovão Ferreira といひ、其著顯僞錄の奧書には片假名で、キリストワン・ヘレイラと見えて居る、葡萄牙の北部 Torres Vedras 生れの耶蘇會派の伴天連で、西土の宗敎史籍では背敎者として名高い。シャールヂアの日本誌には、我國での通稱として江戸チューア Yedo Tzua の名を揚げてあるが、江戸忠庵の轉訛であらう。又モンターヌスの日本紀にはショーワンSyovan として和蘭海員の審問の際等の通譯に其名屢〻見えて居る、これは蘭人の發音の訛りである。彼が宗門の目明であつた所から、パジェーの敎史の細註には、西班牙語で Juan de las Llaves (鍵のホアン) の稱を傳へた、これは我邦で目明忠庵と呼んだのを譯したに違ひない。

忠庵の本邦渡來は乾坤辨說の例言に日本在住四十年とあるのと、クラッセの基敎史に日本宣敎二十四年、パジェーの史に同二十三年とあるのとに由て逆算し、略〻慶長十六七年卽ち西紀一六一〇年代の初頃であらうと推定する。尋いで元和年中彼が上國及平戶に布敎して名聲を博し效果を收めたことは、シャールヂアやパジェーの記るす所で分明である。その捕縛される迄の二十餘年間「此法ヲ萬民ニ敎ンガタメ多年ノ間、不厭飢寒勞苦(さかんらくをいとはず)、山野(さんや)ニ隱(かたちを)

形、不惜身命、不怖制法、東漂西泊シテ此法ヲ弘」めて居た事は、自ら顯僞錄の首めに述べ、又向井元升が乾坤辨說の序文に記るした如くである。逮捕の年は西史皆一六三三年（寛永十年）となし、長崎港草一卷などには、寛永五六年から稍〻下つての頃としてあるけれども、畢竟同一に歸するわけである。但し、パジェーの敎史及書目によれば一六二七年（寛永四）より一六三二年（寛永九）に至る年度に、殆ど每歲一回の報告書を認めて居り、現に捕縛の前年一六三二年三月二十二日（寛永九年二月二日）に書いた葡文の消息がパジェーの史の附錄に見える位であるから、彼の捕へられたのは西史に從つて其翌年とする方が正しい。追捕の地は、パジェーには大阪とし、護送されて西曆九月二十四日（我八月二十一日）長崎に着いて牢獄に投ぜられ、同十月十八日（我九月十六日）他の宗徒と共に酷烈なる苛責を受くるに至つた。他の伴天連等は布敎史上に殉敎者の名を遺して命を終つたのであるが、フェレイラは、是迄の信仰德望豪毅に似もやらず、生を得て遂に轉宗を肯じたのである。轉宗以後彼の閱歷は斷片的ながら通信や風說で西土に傳はつたらしく、上記の諸基敎史にも、或は受祿就職の事を記し、或は長崎在住の狀を敍し、又彼を惜むあまり、其悔悟改信を勸むる爲に、旁〻布敎師を再三我國に派遣した事情などを載せてある。中には其後彼の改心刑死を信ずる者もあつた樣で、フェレイラの轉宗は餘程重きを置かれたのであつた。それも彼は最後に敎區管長（プロビンシャル）の要職を務め、自ら稱して日本天河司罰天連と云つた程であるから、南蠻の徒も其變節を遺憾としたに違ひない。

シャールヂアによれば、彼が嚮に屬官ともなり相談役ともなつた伴天連セバスチアン・ギエイラ S. Vieyra が一六三四年（寛永十一年）江戸に護送された時、彼も同伴して東都に往つたが、間もなく長崎に歸り、其名を江戸忠庵と呼び、日本服を着して居たと云ふ。細井廣澤が享保十二年に寫した測量秘辭と題する書を見ると、長崎の廬草拙（同十一年七月二十五日附答書）は、

澤野忠庵は本南蠻人にて日本へ歸化仕候而日本形に成申候。忠次郎名キ（？）居申候。京都に在住申候を板倉樣（周防守重宗）御所司の時分御吟味之役に付公儀より三十人扶持被

下候而長崎五島町に被召置候而宗門の目付に被仰付候（中略）只今御屋敷に相納申候町々の宗旨踏繪帳面は先年は右兩人（忠庵了順）方へ相納申候（下略）

と記るし、長崎港草にも忠庵等を邪宗の目明（めあかし）と名付けて轉宗者歸正の證人に立たしめる樣にして年給を與へた事を載せてある。尙彼が踏繪の類を以て教徒檢出の具に供した事はパジェー一六四一年の條にも見える。斯くて邪宗の禁制を益〻嚴にし、且つ外國渡航の禁止を令した寛永十三年の九月には、忠庵は宗門所秘の大綱を擧げて眞僞を顯はし是非を論じて、顯僞錄といふ一書を草した。加賀の禪僧慧春の成れの果なるハビアン Fabian が歸正して元和六年に編した破提宇子に次いで最も古い破邪の書であるが、忠庵が亦轉宗後禪宗となつたのも奇遇のみとは云へまい。禪僧雪窓が正保五年頃草した邪教大意（南蠻寺興廢記附錄）は、この顯僞錄の內容を摘錄したとも考へられる程似てゐるけれども、二書直接の關係を速斷することは出來ない。然し元來右の雪窓宗崔といふ僧は、長崎の臨濟派禪刹なる東明山興福寺の開山とも云ふべき雪窓と同人ではないかと思はれるが、如何であらうか。

長崎港草卷十二によれば正保四年豐後の僧雪窓旨を承けて此寺に來り說法をしたとあるので、察するに此時代に其筋の奬勵にあづかり、或は命を奉じて破邪の說敎を勤めた僧侶の一人ではなからうかと考へる。徹定和尙の闢邪管見錄卷下には南禪寺雪窓とあり、此頃上方邊に同名の禪僧の生存は一絲語錄などを見ても知られるから、結局の斷定は附けかねるのである。次に岡本三右衞門が敎法の大要を認めた宗門之書三冊なるものも、同種の破邪書に相違ない。西洋紀聞及采覽異言や查祆餘錄にも同書の事が見えるが、契利斯督記の下半部に揭げた明曆年中の取調書も內容の眞義に於ては右の成書に變らぬと思ふ。西洋紀聞下卷の半ばも亦シローテが說いた宗法の大意に外ならぬと見做し得るのである。之を要するに、忠庵の顯僞錄は、梅庵の破提宇子及雪窓の邪敎大意の間に出來た此種の書物の隨一であつて德川時代初期の斥耶書としては、前後の二書及鈴木正三の諸著とは違つて外人の邦文著述だけに最も珍重すべきものである。徂徠の政談卷四に「吉利支丹宗門ノ書籍ヲ見ル人無キ故ニ其敎如何ナルト云ヲ知ル人無シ……御庫ニ有ルヲモ儒者ドモニ見セ置レテ邪宗ノ

吟味サセ度者也」とあるが、必要ある時には、是等の書が相當の用にたつことは、白石が糺問の場合でも能く分る。達識の白石には、教法の眞意は理解された樣で、三石衞門の著を讀んで「布教が强ち反逆の謀にて無之趣」を辨じた書だと云つた程である。

忠庵が日本語に通じ、太平記等の書を讀習つた事は、乾坤辨說の凡例及廬草拙の答書に見える通りで、現に其作の顯僞錄と右天文書の本文とが構文の能を示す。かの破邪の筆錄の奥書に「細欲記之不解文字、審欲言之、依五音別而寡義乎」と怪しげな擬漢文で自白したが、この告白の文章も本文も代筆である。草拙の答書や辨說の凡例にある樣に、筆寫は覺束なかつたのである。さて讀書構文の力が右の如き風であつたとすれば、談話說法に熟して居たことは言ふまでもない。從て譯官をも兼ね、屢〻鎖國後密航渡來の外人に對して通譯を勤めたことは、洋籍に詳記する如くで、教史には、彼を蘭人の書記兼通辭と呼んでをる。シャールヂア及パジェーに據るに、一六三七年（寛永十四）一六三九年（寛永十六）及一六四二年（寛永十九）には密航の伴天連が忠庵を法廷に見掛けて、或は痛罵し或は極諫したこともあり、或は書を送つて改信を迫つたこともあつたが、忠庵は悔悟しながらも從はなかつたと云ふ。是等の場合にも、審問の通辯には彼が當つたのである。殊に史上に名高いのは、一六四三年（寛永二十）ジョセイフ岡本三右衞門等の一行が筑前大島に來航して捕へられ、長崎から江戸に護送されて審問された時の事である。其時目明忠庵は、南蠻通事名村八左衞門、西吉兵衞と共に有司に從つて、囚はれの伴天連どもに附添ひ、江戸に來た所が、偶〻奥州南部の濱に漂着した阿蘭陀の探檢船の船員十名が捕へられた事件が起つた。蘭人が南蠻人と誤認され吉利支丹として取扱はれたのである。從て兩事件は相關連した密謀と考へられて江戸では嚴しい詮議を受くる次第となつた。事件の大體は長崎及南部の史乘、德川實紀や通航一覽等に見えるが、委細はモンターヌスの日本紀後篇に悉くしてある。忠庵が目明兼通詞として南蠻の教徒を訊問し、紅毛（おらんだ）の海員を取調べた始末は、同書中に詳かである。蘭人が江戸に護送される前、南部に派遣された僧形の譯官があつて、西班牙語を能くし、葡語にも達し稍〻蘭英二語にも涉るとあるのは、忠庵の事ではない樣で

ある。彼等は此者を西班牙人の背教者と呼んだ。彼我の記錄上月日の對照に由ると、長崎よりの一行が着府以前に此者等は派遣されたらしいのである。斯くて審問の末に岡本三右衞門等は轉宗して吉利支丹屋敷に幽囚され、海舶の諸員は嫌疑晴れて赦免される、之に先つて譯官忠庵は賞せられて、歸西すると云ふ段取りになつた。但し我國の記錄には、海員の中若干人は江戸に留置かれて火技傳授に從事したとあるけれども、モンターヌスには其事を傳へてない。兎に角、同年寛永二十五月末より約半年に亙る二大事件は一先づ落着したわけである。尙ほ數年後、正保四年六月、長崎に南蠻舶二隻入港したのに和蘭甲比丹が豫め之を注進しなかつたことがある。乃ち翌慶安元年井上筑後守重政が再び西下して、又もや目明忠庵を以て蘭人を詰つて、答書を出さした。斯樣な關係は他にもまだ存するのであらうが、傳はらない。

以上忠庵が關係した諸件の中で、最も主要なるは、岡本三右衞門等審問の時である。乾坤辨說の序文に由ると、彼等の中、天文に精しい者があつて天文書を井上筑後守に差出した、筑後守は二三年後之を忠庵に下して翻譯させた、彼は之を倭譯するに當つて、我國の文字が書けぬので洋字で、寫取つた、通辭西吉兵衞が命を奉じて洋字を讀むと、傍から向井元升が之を筆記して出來上つたのが、乾坤辨說中の本說であると云ふ。向井の序にも、忠庵が天文の學に精しい事を述べて居るのでも解るが、彼の翻譯は單純な翻譯とは見えず、餘程自分の考をも挾み、和漢の舊說をも參照して居る。譯文に日本の事を我朝と唱へた位日本的になつて居る。然し骨髓に至ては、遠西の傳襲的星學說を脫しない。元來、往古歐洲諸大學では僧俗共一般に天文學の智識を授けられた者で、其點は漢學者にも相似の所がある。極東に渡來した宣敎師の中にも、斯學の造詣深き者があつて、支那の樣な學問好きの國に到つては、利瑪竇等をして名を成さしめたのである。日本に布敎した者でも、開拓者のシャギエルを始め、天文算數の理を以て邦人の心を收めようと企てた者がないではなかつた。又法網を潛つて密航を企てる樣に成てからは、實際上斯學の運用は益〻必要になつて來たわけである。斯る因緣で忠庵の天文書は、彼處まで進んだのであるが、此頃には

西說に基いた漢譯天學書の如きも日本殊に長崎邊に入つて居たので、寛永七年の禁書以後と雖も其學說は根絕することは出來なかつた。先民傳中の談天家を見ても林以下闕、小林、小野等西學に關聯して居ることは爭はれぬ。斯う云ふ崎陽の學問界に吉利支丹から離れた天文學が、忠庵や其譯書によつて、變形して入込んで來た。西川如見の如きが、此裡から生れたのも偶然ではない。

忠庵の本說に對して南蠻學家の所論を辯駁したのが、向井の乾坤辨說四卷である。忠庵の原序が慶安三年、向井の序文が長崎で明曆己亥とある。明曆四年戊戌既に萬治元年と改元し、而も是年向井一家は長崎から京都に移住したのであるから、右序文の年月干支場所は矛盾極まる。此點は疑惑を起させるけれど、元升の子元成と同學同友の廬草拙の答書や其の案で其子千里が編した先民傳を信じれば、本文の辨說者を疑ふことは出來ぬ。然るに、忠庵の天文書には、又別の寫本が存する、卽ち向井の辨說を添へない二冊本で、天地論、南蠻運氣論等の書名を以て傳へられた。此別本の成立については測量秘辭中の廬草拙答書に、

長崎に假名天文鈔と申書二冊諸人皆寫し置申候書物御座候。又は三國運氣通要鈔とも題し申候。隨分天文の道理分明に聞へ申候。此書は先年淺野長濟樣と申醫師江戸より御下り被成候て、南蠻の目付澤野忠庵に被仰付候て、西洋の天文の學の趣を被爲書候。其の節忠庵は元より日本文字は讀申候得共、和字を綴義は成申さす候に付、光源寺住持松吟と申僧筆譯仕候。就夫此書近世に光源寺天文書所申候。松吟が本筆の書物は吉村鄕右衞門が方へ所持可仕と奉存候。此者祖父は末次平藏家來に而候付其節末次平藏方へも松吟直書納り申候。其書を相傳居申候。且つ又此二冊の書の內を段々學申候而辨破致候書物を乾坤辨說と申候而四冊御座候。是は只今の元成が親に元升と申候者御座候は京都に上り大醫の名を振申候、此人撰作致申候。然共天文の難破に於て不分明の儀も有之候。

とあるので明かである。之に由て考へると、右の書物は忠庵の翻譯書ではなくて、自著らしく見える。飜つて考へて見ると、向井元升の序文は、或は後人の所爲であつて、其文辭

の拙劣は干支の錯誤と相竢つて自作では無く、忠庵のは翻譯でなくして撰述であると云ふ考を起させる。況んや乾坤辨說中の本說が餘りに翻譯を脫して居るのを見ても、益〻斯る考を强めるのである。廬草拙の答書に、

乾坤辨說の事は定而向井氏(元成)より先年御借被成候半と奉存候。此後は懸御目候節大意可申上候。是には少々子細も有之事御座候。

とあつて、廬向井兩氏に質問した渡邊軍藏あたりからも江戸にも傳はり、前記の天文鈔と共に西學弘布の一端ともなつた。但し最早享保年中であるから、漢譯天學書の舶載は許可されて居た頃である。さて右の始末であるとすると、忠庵の蠻字和語天文鈔の筆譯者は、向井氏では無くて、僧松吟である。この僧は、柳河から長崎に入込んで寛永八年頃、光源寺(眞宗西本願寺末寺)を建て、教化に從事した者である。尙長崎の談天家たる林門の高足小林謙貞にも二儀略說、一名一輪論といふ天文書二卷があつて、矢張忠庵流の說方をしてある。是等大同小異の諸別本の對校及傳統の考究は玆には略する。忠庵には天文の弟子は無かつたけれども、其所說は學者間に珍重され、却て向井の辨說よりも優れて居ると認められた。

天文の上で南蠻の舊說が和蘭の新說に由て改進せられる樣になつたのは、所謂蘭學開始後の事に屬し、西に本木、志筑の先覺出で、東に高橋、間の俊才現はれてからの事には相違ないが、元祿前には蘭國舶載の天地圖あり、元祿中にケンペルの指導あり、元文中には、北島見信の紅毛天地二圖贊說ありて、蘭說の萌芽は見えて居たのである。然し天文は醫術ほど人生に適切でないから、革進の期は大分後れ、南蠻流の天文說は、漢譯の同系統の星學と共に後世まで持囃されたのであつた。

醫術は天文よりも早く南蠻系を脫して紅毛流に移つた。而して南蠻流外科に在ては、忠庵も亦始祖の一人となつて居る。廬氏の答書に忠庵は外科の弟子はあるが、天文の弟子はないとある通り、先民傳にも醫流のみを擧げ、西玄甫(吉兵衞)半田順庵を其門下として

乾坤辨說の原述者澤野忠庵

ある、而して兩門人とも、一家を成して從遊者は非常に多かつた。玄甫と交厚き杉本忠惠

も矢張南蠻流であつて、寛文の初め江戸に徵されて侍醫になつた。盧氏の書に、この者は澤野忠庵の婿であると云つてある。西氏も亦杉本に接踵して江府に上り、侍醫に擢でられたのであるから、忠庵流は一時蔓延したものと思はれる。當流の外科書も傳はつて今に存して居る。

前述の如く忠庵は宗門（目明と通詞）と天文と外科との三事に關係して、當代相當の寄與をしたものと云つて差支ない。無論彼等耶宗の徒の餘業たる方技に向つて、多きを又深きを求めることは出來ないのであるから、其徒相應の貢獻に止まるのは當然である。然し彼の轉宗に至つては、吉利支丹道德から見ても日本流の倫理觀から云つても、非難する價がある。シャールヂアの日本誌一六五〇年（慶安三年）の條下に、彼稀に自由を得て長崎に在住し、破廉恥で富有な唐人の寡婦たる日本婦人を娶つたが永く同棲もせず又輕浮で一定の地位に留まらず、人から擯斥されて交る者もないとあるのは、多少憎惡心からの評でもあらうが、いくらか當つて居ようと思ふ。盧氏の答書に、忠庵には忠次郎といふヒロウト（案針）の功者があると出て居る。これに前記の杉本忠惠に嫁した娘を加へて、少くとも二人の子があつたわけである。

西史には一六五二年（承應元年）フェレイラの刑死を傳へて居るが、刑死と云ふのは西土の宣教師輩が彼の終りを完うさせようとする爲の附會といふ說もある。乾坤辨說の序に由ても明曆己亥以前に「斃」るとあるから、刑死は事實かも知れぬ。承應元年が彼の歿年であるとすれば、行年は一五八〇年（天正八年）生れの七十三歲である。クラッセの史に、彼を八十餘年の命を保つとしたのは誤であらう。（大正二年九月）

註　吉利支丹版太平記拔書（平假名活字本）については山田孝雄氏の解說藝文第三年（明治四十五年）三月號にあり、其書の標本は同誌同年四月號に予の解說を附して揭げられたり。太平記が平家物語に次いで西人の間に知られ、從ひて澤野忠庵にも讀まれしことは、右の版本と密接なる關係を有すべし。忠庵の顯僞錄については三上義夫氏の「西洋歸化僧の耶蘇教論駁書」と題する一篇哲學雜誌（大正二年十一月）にあり、併せて參照せば得る所あるべし。

メキシコ舊版の日本文典

西紀一七三八年（元文三年）メキシコ都下で出版されたOyanguren の日本文典が今春我國に舶載された話を聞いたので、此の稀覯の古版本に就いて何か書いて見ようと思つて居つた矢先に、本年五月號の藝文に稻湖君が「巴奈馬（はなま）開鑿と我國運」と題する一篇の冒頭に於て碩學アレキサンダー・フォン・フンボルトが一八〇九年新西班牙に關する論文の一節を引かれたのを讀んで、更に一段かの古文典紹介の念が止み難くなつた。巴奈馬地峽は支那や日本にとつて獨立の障壁だとか云つた此の大探檢家は、メキシコでオヤングーレンの日本文典を得て、歸歐の後、其兄キルヘルムに與へた所が、兄は弟が絶域から將來した家土產を言語學上から品隲して一篇の論文を草し之を一八二六年巴里の亞細亞協會刊行の佛譯ロドリゲーズ日本小文典の補遺の首に附けて公にした。右の補遺とはランドレスがオヤングーレンの文典より抄出したものであつて、又フンボルト本に據つたものであらう、オ師の文典が歐洲の東洋學界に知られたのは恐くはこれが最初であつたらう。尤も一八一七年刊行の世界言語續集 Mithridates 第四卷には、ファーテルの追加した日本書目に、オヤングーレンの名が見えるが、アーデルングは本篇には未だ之を擧げなかつたのである。追加したのも、多分フンボルトの藏本によつて得た智識に由つたのであらう。況してマースデン（一七九六）の書目にも載らざるのみならず、西班牙本國の言語學者エルヴスの著にすら記述を缺いて居る。佛のランドレスがロ師の日本小文典の翻譯に方つても、此メキシコ版の事を一言してないことは勿論である。但しクラプロートは本書の寫本を有つて居たが、原本は恐くフンボルトの所藏であらうと推定する。然し是等獨英西佛の諸言語學者が當然未だ知るに至らなかつた文典を上述の由來よりしてキルヘルム・フォン・フンボルトが紹介し評論したからと云つて敢て特筆する程の事ではないけれども、此鴻儒の評隲は能く

背縻に當つて居る所が多く、細活字十餘頁に亙つて此オヤングーレンと彼のロドリゲーズとの兩文典を精しく對照した點は、當代にあつては流石に此人だとうなづかしめる。これら西葡の兩宣教師が小文典のうち、後者が前者よりも完備正確、優越して居ることは爭はれないが、二者共に vrai génie de la langue に適はぬ缺點を有しながら、兩々相補ふことを得て一長一短あることをも擧げて居る。又オヤングーレン師が日本語の l'esprit et la nature に徹(ペネトレー)して居ないのを責めたのは當を得た評語である。元々ランドレッスの拙譯本を執つて、ロ師の小文典を評價するのは酷であるのだから、ロ師の語典の價値は益〻能く分る次第である。要するにフンボルト自身の日本語學も枝葉の點には隨分覺束ない所が見えるけれども、概して能く國語の本質を達觀し、而して對比するに支那馬來印度等の語を以てして我國の活用言や代名詞を說明しようと試みたのは稱揚すべきである。材料を供給した西葡の兩宣教師も亦以て榮とすべきであらう。而も時勢を云へば、フンボルトの論文の現れた頃は、恰もシーボルトが未だ日本滯在中であつて、蘭人の日本語研究が進みかけた文政年中の事であると云ふ事をも念頭に置くべきである。卽ち後者の『日本語撮要』Epitome Linguae Japonicae（バタビヤ協會紀要所載、拉文）の刊行は、正に前者の『ロ師の日本文典校勘記』une Notice comparative des Grammaires japonaises des PP. Rodriguez et Oyanguren の公表と同年であつたのである。

Oyanguren de Santa Inés (Fray Melchor) 師は西班牙の人、フランシスコ派の伴天連である。ギニアーザの和漢語學書目に從へば、一六八八年ビレネーの西麓ビスケーに瀕するギプズコア州のサリナス Salinas de Guipúzcoa に生れ、一七〇六年得度の後、一七一七年（享保二年）フィリッピン島に布教師となつて來任した所、間もなく病にかかつて一七二一年歸西したが、それから又メキシコに派遣されて更に一七二四年（享保九年）フィリッピンに再渡してから專心日本語の學修を勉めたけれども、其の效もなく一七三六年（元文元年）本國に向けて歸航せねばならなくなつた。そこで再びメキシコに過ぎり滯留中、玖瑪の聖(セント)アグスチン院主 Prior de Hospicio de San Agustin de las Cuebas の職を勤めて

居た際一七三八年（元文三年）にかの文典をも出版したのである。一七四七年（延享四年）正月五十八歳を以て死んだ。要するに彼の日本語學も、宣教の爲であつて、彼が初めて呂宋に渡來したのは、新井白石に調べられた伴天連シドッチが日本へ來て後十年程の事であり、其再渡以來日本語を修めたのは、青木昆陽が蘭學を始める少し前の事である。其頃は寛永鎖國以後八九十年も經つて居るから、呂宋邊で日本人から國語を習つたとは思へないが、文祿慶長頃に日本で出版した語學書又媽港や摩尼剌や羅馬で刊行した文典や辭書などは布教根據地なる呂宋あたりには存して居た筈であるから著者オヤングーレンも是等の書に據つて文法を編んだのであらう。されば足親しく日本の地を踏んだのではないから、彼の語學には殊に轉訛が多く、又誤寫や誤植から來た間違ひも少くない。又フンボルトも指摘したやうに無理に拉丁文典の形式に當てはめようと力めた結果、日本語のエスプリー所謂スプラハガイストに適はぬ點が往々見える。一體この文典はタイトルペイヂ等にも見えるが如く、ネブリハ Nebrixa の拉丁文典に據つたと稱してあるので、言語能力の乏しい宣教師などは當時得てこの流儀で通したものだ。日本で最初に出版された天草の文典はアルヴレーズの拉丁文典の式に型どり、同じく辭典はカレビーヌスの字引に據つたので今このネブリハの文典も是等の語學者の原本と同じく十六七世紀に歐洲に流行つた教科的語學書の一である。ネブリハとは Antonius Nebriensis 即ち西語にて Antonio de Nebrixa といふ古典學の教授（一四四四—一五二二）で其手に成つた希拉兩語の文典辭書は當代のオーソリチーであつたのである。

されば、オヤングーレンの文典は、其內容の價値に於て又其時代の國語史料たる點に於て、ロドリゲーズのよりは遙に劣り、又コリャードのに比しても大に劣るわけであつて、其最も珍とすべきは鎖國の最中尙こりずまに日本渡來の壯圖に資する爲に、ビスケー灣頭バスク種族の住ふ地に生れた僧が、南洋の島から本國さして歸る途すがら、いはゆる濃毘須般に於て出版した者であると云ふ點であらう。慶長十五年京都の商人田中勝助がそこに渡航し、同十九年政宗の使臣支倉六右衞門がそこを過ぎてから百三十年程してメキシコでこ

の日本文典が刊行されたと云ふので一種の歴史的感興を惹き得るであらう。

本書は全標題は例によつて隨分長いが、其の主題だけを擧げれば Arte de la Lengua Japona(日本語典)である。蓋し西班牙語で出版された舊代の日本文典では唯一のものであらう。(辭書の方には、マニラで出版したのがある。)四卷より成る合一冊物で4°形の羊皮表裝である。本文は正に二百頁、首には著者の奉獻(デヂカトウリヤ)の辭(一七三八年正月六日)を始め、フランシスコ・ハギエル・ペレーズの解說(パルセール)の詞(一七三七年十一月十日)推讃(フラロヴァシヨン)の辭(同十四日)及檢定(センスーラ)の語(十月十六日)に次いで其筋よりの允許狀(リセンシヤ)三通(十一月)があり、最後に著者の小引(プレルウヂオ)がある。以上合せて十八頁。本書の成立に關して參考すべき點も見える。ネブリハの文典に於る拉丁語の法則を日本語に當てはめて「本國卽ち日本の書物の實例によつて臆測上の規則を實證した」Corroborando sus reglas especulativas con los textos practicos de los Escriptores vernaculos, ó Japones とはあるが、日本文が何處まで讀めたか疑はしい。著者はもと交趾(カウチ)や東甫寨(カンボヂヤ)にも居たのであつたが、是等の兩國は日本と通交貿易をして居たから、其處から日本へ宣教師を渡さうと企てたこともあつたらしく、其爲め日本語學の必要も起つた樣であることも、以上の序文の中に窺ひ得るのである。著者自身の小引の中には、當代一般に信じられた如く、バベル高塔より世界の言語が分散したことから說起して、日本語が支那帝國より由來した樣に書いたのは、彼の學識の淺いのを證するのみである。彼には、此文典の外、矢張りネブリハの拉丁語學書に從つてタガーラ(呂宋邊の馬來語)語學書抄を書いて Tagalysmo Elucidado y reducio â la Latinidad de Nebrija と題し一七四二年同くメキシコ都下で出版した。五卷一冊本である。この書には支那の官話(マンダリン)や希伯來語や希臘語も引合に出て來る。十八世紀頃には、此種の比較研究が盛に行はれたものである。丁度同じ頃、日本語や支那語が英國の學者に愛蘭土語と比較された樣なこともあつた位である。さてO師の日本文典そのものの中にても日本語と南島のタガーラ方言や支那の官話(マンダリン)とを對比した點がちらほら見えて居るのも面白い。

日本語の綴り方は葡萄牙流によつたが、無識や誤寫誤植から起つた綴違ひが頗る多い。

引例は多くは孫引らしい。太平記や平家、伊曾保などの書名、四書からの引用も見える。動詞の活用表などには、拉丁文典に盲從した結果、實際言はぬ言葉遣が非常に多い。同じく拉丁式ながら、ロドリゲーズやコリャードの文典の方には、左程の無理はない。むしろロ師の小文典をあの儘西班牙文に翻譯した方が安全であつたのだ。活用を三種に分けたり、日本の方言を區別した所などは全くロ師に出たものと見受ける。卷末の方には、動詞の表及ABC順の小語彙が添へてある。

本書の價値は右の如くであるが、兎に角斯くの如く稀代の由來の文典であるから、吉利支丹禁制時代の名殘として國語史料の一端として又比較言語學史上の遺品として一本を本邦に留め得たならば幸であらう。コリャードの文典辭典は既に本邦に少くとも二部（東西の大學）を存し、ロドリゲーズの小文典の佛譯本は、是亦所藏者があるが、是に至つて更に同樣の一稀覯本を收むることが出來たならば學界の爲め慶すべきであらう。

註　(1)　本文典中 Vocabulario（の參照を示せる所多し、こは一六三〇年マニラにて出版せる西班牙譯の日本辭書（日葡對譯　長崎版）をさすこと、文典第四頁及第三〇頁を見て知るべし。

(2)　（大正二年六月）

三藝術篇

繪畫其他染織物

支倉六右衛門の畫像

支倉六太夫肖像

平賀源內筆西洋美人油畫

平賢爲內達西洋美人畫

古渡のゴブラン織

古戦のヒロルソ類

昔の更紗のひながた

昔の更紗の仕立方

更紗図譜
音呼手
スミガキ。面ニテ赤。モヽイロ。同赤ニテ星ヲ打。羽ノ皿如此赤ニテ筋ヲカク。
色ハツギノ色トノ間ボカシニテ。甚ムツカシキ彩色ナリ。モヽイロ。アイ。紫。黄。赤
モヽイロ
赤
黄
赤
モヽイロ
赤
黄
紫
黄
赤
藍
モヽイロ
赤
アイ
黄
赤
モヽイロ
黄
赤ボカシ
モヽイロ
スヂ赤
黄
赤
モヽイロ
赤
黄
赤
黄
赤ボカシ
黄
赤
黄
赤ボカシ
黄
赤
キ
アイ
赤
黄
アイ
赤ボカシ

西洋畫傳來の起源

一

明治以前に於ける西洋畫傳來の跡を考ふるに、幕末開國期を除くと、古く伊太利葡萄牙西班牙などの南歐から耶蘇教藝術として輸入されたものと、鎖國以後和蘭人との交通の結果主として蘭學の興隆につれて發達するに至つたものと、二つの源流が存したことは、既に本邦の美術史家の說く所なるが、西洋文化の傳來史を攻究する者は直にこの二潮流の存在を認むることが出來よう。予輩は後期の和蘭系統の洋畫は之を別稿に讓り、玆には前期なる耶蘇教系統の繪畫の傳來について略述しようと思ふ。

南蠻系統の洋畫の作品が日本に傳はつた發端は、吉利支丹の傳來と全く同一時期であつた。天文十八年七月十二日（西暦一五四九年八月十五日）を以て鹿兒島港に到着したフランシスコ・シヤギエル聖人を案内して印度乃至麻剌加から歸國した薩摩出身の青年アンジロ（彌次郎）が聖母像を持來したのが始めてゞある。彌次郎は南國放浪中この聖人に邂逅して西教の要旨を知り印度臥亞の學院に入つて修業し師シヤギエルを導いて此時鄕里に歸つて、是より師弟二人の力によりて日本傳道が始まつたのであつた。彼は其際印度から携へ來た洋畫を薩摩の殿樣に示す爲に鹿兒島から五リーグ（一リーグは凡三マイルなり）を隔つる城下に出掛けて往つた。此時の薩摩の領主は島津貴久で、居城は鹿兒島より凡五里程の距離なる伊集院に居たのであつた。右の圖は聖母が幼なき耶蘇を膝の上に擁してゐる美しい繪であつたと云ふから、多分油繪であつたことと思ふ。殿樣は之を見て非常に感心し信仰を起して畫前に禮拜したのみならず、その母君も其繪に隨喜して、彌次郎が鹿兒島に歸つた後わざ〳〵使者を馳せて其繪の摸寫を求むるに至つた。然し當時鹿兒島に摸寫する畫家が居なかつたから、遂に思止まつたといふ事である。この話はシヤギエルが其年十月十一日（陰暦九月十一日）附で書いて鹿兒島から臥亞へ送つた日本發第一信中に見えてをる。

次にシヤギエルが平戸山口を經て京都まで進入し、一旦山口に引上げて滯留中豐後の大友義鎭（宗麟）から招かれて府内に下り其居城を訪ふ時の行列の模樣が當時日出の港に碇泊中の有名なる海員ビントーの紀行に詳敍されてゐる。生憎聖人の書信には其事の詳報が載つてゐない。クラツセの日本耶蘇教史に出てゐるのは、ビントーの紀行より出たものであらう。その報道に由ると、對面の際には葡萄牙の商人が聖人の供をして美々しい持物を以て大友氏の殿中に繰込んだのであるが、其中の一人は美しい聖母の繪を深紅か紫色かの綾に包んだのを捧げていつたとある。これはシヤギエルが豐後を發して印度をさして歸航する直前に起つたので天文二十年（西暦一五五一）の事柄である。

これらの聖母の圖繪が油繪であるかどうか確かに判明せぬが、兎に角日本に傳はつた洋

畫の最も古いものであること丈は間違ない。かくの如く信仰の對象として此種の繪が續々舶載されたことは、十年後なる永祿四年（西暦一五六一）豐後の教會に掲げられたる爲めに聖母像が、葡萄牙から送らるゝ途中平戸碇泊の黑船の中に安置されて其土の信者が參詣したと云ふ記事がクラツセの史にも見ゆるのでも知らるゝ通りである。殊に九州及び畿内地方の南蠻寺や歸依する諸侯の城中殿内には、隨分宗教畫が掲げられてあつたことは推定して差支ない。吉利支丹の物語にも有馬島原の軍記にも畫像のことは屢〻記載されて居る。然し畫家や畫の由來等については敍述が及んでゐない。

二

耶蘇教の布教が段々進み來るにつれて教育事業が起る樣になつたのは信長時代の天正七年（西暦一五七九）の頃からである。卽ち宗旨傳來以後三十年の事である。この教育の事業に着手し諸般の設備を創始したのは伊太利出のアレツサンドロ・ヴリニヤーニといふ宣教師である。彼は天正七年有馬晴信に勸めて有馬に學林（コレジオ）及修學院（セミナリオ）を建てさせたのを手始めとして、翌年には豐後に入り大友義鎭義統父子に說いて府内及臼杵に學校を設けさせ、更に其翌年の天正九年には京都に入り本能寺にて信長に對面し信長をして其新居城安土に於て修學院（セミナリオ）を建設せしむるに至つた。これらの學校にては宗教教育を除くと國語と葡語及拉丁語とを課した外、音樂が主な修業科目になつてゐた。西洋にては所謂七科の自由學藝を授けたと云ふが、殊に言文音樂は著しく進步の績があつたらしい。而して繪畫をも學ばせた樣であるが、有馬の學林（コレジオ）以外、府内安土等にても有馬同樣畫學を教へたかどうかは、疑はしいのである。

ヴリニヤーニは、學校設備を完成して後、翌年の天正十年卽ち西暦一五八二年に至り、九州の大友有馬大村三侯の使節として其一族中の青年四名を羅馬法王の許に派遣する事を決し、諸般の計畫を立て、自ら若き使節の一行を導いて印度（臥亞）まで同行した。是れ卽ち是等の青年をして宗教心を强めしむると同時に西洋諸國を見物させて之を教育すること

とは、やがて耶蘇教の弘布篤信に大なる效果があることを信じたからである。さて彼等使節は數年後なる一五八五年卽ち天正十三年を以て伊太利に入り法王にも謁見し諸方で非常な歡待を受けたのであるが、殊にヴェニスにては、記念の爲め名高い畫家のチントレット Tintoletto に各自の肖像を畫かせることを市で決議し、莫大な費用を投ずるに至つたと云ふことである。羅馬やヴイチエンツアにては使節の行列を壁畫に畫いたさうである。羅馬にては使節から法王に日本の繪畫を贈呈し、歸る時には羅馬の光景をかいた版畫などをも得、その外地球儀計算器時辰儀等をも持來して歸國した。歸東の際にも、印度からヴリニヤーニが同伴し、西暦一五九〇年天正十八年、九年振で九州（長崎）に歸着した。是等青年使節は遠西の事物に接し南歐の藝術をも觀て如何なる印象を受けたかは想像に餘りある所である。

ヴリニヤーニは印度總督の使節として天正十九年春秀吉に謁見するに當り、新歸朝の四使節を同伴し彼等が歐洲から舶載し來つた珍奇なる物どもを秀吉に示すことにした。一行が九州から上洛する途中、事情あつて播州室の津に滯在してゐる頃、都あたりからも盛に人が尋ねて來て珍しい物を見たがり又面白い話を聞きたがる。此地まで出かけて來た名高い人の中には蒲生氏郷なども見えた。彼も一頃耶蘇教に歸依し高山右近と親密であつて、彼の仲介で所謂ウルガン伴天連（オルガンチーノ）に就いて受洗した程である。蒲生氏に由來する洋畫の屏風が殘つてゐるのも蓋し偶然でない。現に南部伯爵家に傳はつてゐる西洋人物及風景の六曲屏風は、蒲生氏郷の妹が天正十九年嫁入の時に持參したと云ふ說である。

使節が聚樂第で秀吉に見せた種々珍奇な持來品中、クラツセの原本によれば、羅馬の都の版畫（エスタンプ）や美しく裝釘（レリエー）し彩色（アンリユミネー）した書物何冊かもあつたと云ふことである。而してこの版畫は日本に於て絕好の摸本（てほん）となつた樣で、予輩は此時の渡歐使節歸朝の結果は本邦當時の文化に貢獻する所少からずと信ずるのである。その功勞はヴリニヤーニに歸さねばならぬことは勿論であつて、彼は此際日本に到るに方り、印刷機を輸入し活字の鑄工を舶載し、之

に由つて其翌年から肥前の加津佐天草等に於ける耶蘇教學林で續々書物の出版が始まつた様なこともある。

三

ヴリニヤーニの功績としては、如上の學校建設と圖書出版との二事業と共に、尙ほ繪畫及音樂の修習に力を盡したことを特筆せねばならぬ。これは古くはバルトリの日本耶蘇會史（卷二十）にも出で、新しい所ではパジェーの教史（卷一）にも載つて居るが、共に西紀一六〇六年慶長十一年彼れが嫣港に歿する時の條下に其功業を記するに就きて右の事を述べてある。パジェーには修學院（セミネール）（複數）に於て音樂及繪畫のクラツスが設置せられ、之に由て信神に資する所あらんとする趣が記されてある。此所彼所どこの學院にても、同樣に繪畫と音樂とが置かれたのかは判明しない、即ち音樂の方は諸處にあつたが、果して繪畫の方は有馬の學校以外、府内や安土にても授けられたものかどうか疑はるゝのである。

ヴリニヤーニ歸朝の翌年即ち秀吉に謁見の天正十九年（一五九一年）から、出版事業が起つた。今日現存の最古のものは、英國オツクスフオド大學のボドレアン文庫に珍藏される加津佐（かづさ）（肥前高來郡、口之津の西北方）版の聖者御傳記とも譯すべき小形の冊子である。題して『サントスの御作業の内拔書』とあつて、上下二卷の毎卷のタイトルペイヂ（扉の紙面）に、聖者彼得（ペトロ）が他の聖人（ひじり）どもに取圍まれてゐる圖の銅版畫がある。サトウ氏はその日本耶蘇會刊行書志に於てこの版畫は日本人の手に成つたものらしいと說き、而して日本人の作とするを得べき有力な證據を擧げてをる。

銅版畫として此外には、文祿元年（一五九二年）天草の耶蘇會學校にて出版された信心錄（フィデス）とも稱すべき一書で『信心の導師として伴天連ルイス・グラナダ編まれたる書の略』と題するもののタイトルペイヂの銅版畫がある。やはり日本人の圖樣であるらしく見える。本書は和蘭ライデン大學圖書館の所藏であるが、自分はこの本の方は閲覽する機會を得なかつた。これらの外にも書物の上に、又は書物以外の一枚摺に、銅版畫があつたことと思

はれるが、後世には殆ど傳はらなかつた。尤も自分の見たものサトウ氏の複製したもの以外に歐洲に現存するものが絶無だと云ひ得ないのである。尙書物にカツト等として種々の模樣が印刷してあるが、それはこゝに故らに擧げぬことにする。

次に文祿元年天草版の平家物語拔書のタイトルペイヂの面には、(今日現存唯一の大英博物館本に就いて見るに)肉筆のペン畫らしく犬の樣な獅子が二頭ローマの勇士とでも云ふべき人の車を牽いてゐる圖がある。これはサトウ氏の日本耶蘇會刊行書志の外、雜誌『藝文』其他で紹介されて、割合に世に知れて居ると思ふ。肉筆とすれば後人の加筆と見ることも出來るが、タイトルペイヂだから矢張同時の作であらうと考へられる。出版と同時のものとすれば、現存肉筆の洋畫で、拙劣とは云ひながら、時代の判明せる最古の作品と稱すべきではあるまいか。

サトウ氏が蒐集した日本耶蘇會年報は兩三年前京都大學の藏に歸したが、その中に西曆一五九三年三月より翌年同月に至る文祿二三年に亙る一年間の報告を收めた冊子が二部存する。一は羅馬にて刊行し他はミラノにて出版す。共に一五九七年(慶長二年)刊行となつてゐる。報告者はピエトロ・ゴメーズといふ西班牙生れの宣教師(一六〇〇年日本に歿す)で、日本の語學や事情に精通し有馬の學林の學頭をも勤めた人である。この伴天連が西紀一五九四年三月十五日(文祿三年正月二十四日)長崎から羅馬に報告したものが右の書である。伊太利文で出版されてゐるが、元は西班牙語か拉丁語か乃至は葡萄牙語から翻譯したものである。この報告書の中に『ハキラヲ(或はハチラヲ)のセミナリオ(修學院)につきて』といふ一項がある。ハキラヲ或はハチラヲ Fachirao とは、有馬より一リーグ即ち凡一里ほど隔つてゐる地であるといふ。古い記錄や新しい地圖などに見當らぬ地名であるが、八郎とでも書くか波木羅尾とでも書くか知らぬ。西洋人の編纂した史籍には色々の發音を宛てゝをるが、マードツク氏の近世史には、八郎らしく讀ませてある。兎に角人里離れた小さな村落などで迫害を免れるには都合の好い場所であつたらしい。つまり天正十五年秀吉の激怒を買つて宣教師どもは一時逼促してゐたので、京都の南蠻寺は破壞され

學林の師弟は逃れて有馬に下り天正十七年有馬の修學院の學徒七十三人は教師たる伴天連四人と共に此のハキラヲに移され、他の宣教師どもは天草島原に逃れたのであつた。此年に加津佐の學院が有江の學林を合併し翌々年の天正十九年には加津佐の學林が天草に移されるといふ始末であつた。此間ヴリニヤーニは京都から有馬地方に巡察し、此一隅に於て教育及出版の事業が發達したのである。

さて有馬附近の修學院にては、前記ゴメーズの報告書に據るに、語學の外、音樂及繪畫を授け、その成績著しかつた由である。卽ち或生徒は木炭畫や油繪を習ひ或生徒は銅版彫刻術を稽古し、有馬大村大友諸氏の使節が歐洲から持つて歸つた畫帖の樣なものを摸寫摸刻し原作と違はぬ位な精巧な品が出來た程進歩の跡があつたとの事である。さすれば、上に擧げた吉利支丹版の書物のタイトルペイヂの銅版畫及肉筆畫の如きも、その手法並に圖樣より察して日本人の作であらうと考へても附會に陷ることもあるまいと思ふ。

尙玆に附記しておきたいのは、文祿二年には歐洲歸りの青年使節四人は天草の教會に入り、其後或者は學校で教鞭を執つてゐたこともあると云ふ事である。此等の士が西邊に育成されつゝあつた小藝術の進運にも資する點があつたことは、予輩の推定して差支ない所であらう。

四

此時代の繪畫として又畫家として今日に傳はつてゐるものの極めて少數であることは、耶蘇教の運命と共に免れざる所である。寛永時代に聖母や耶蘇の畫像が破毀され燒却されたことは內外の史乘に見ゆる如くである。バルトリの日本耶蘇會史（卷四）に寛永四五年頃水野河內守守信が長崎奉行として來任後、長崎にて耶宗門の撲滅を計る爲に宗旨に關する書畫什器の類を燒いた事が見えてゐる。油繪の佳品もその中に存したと云ふことが記してある。實に寛永初年度の耶宗退治は酷烈を極めたので、德川實紀や日本西教史の如き編纂物でも旣に其大要を窺ふことが出來るが、長崎邊に存した寺院書籍繪畫類はこの時大

概亡くなつてしまつたのであらう。今日殘存してゐる宗教畫の少數の外、舊江戸や會津南部邊に殘つてゐる油繪が若干あるが、その中の或ものは島原亂の時攻圍軍に降り赦されて江戸に來た山田右衞門作といふ畫家の手に成つたものだと傳へられてある。

山田右衞門作は元と有馬氏の臣で、有馬氏が日向に轉封の後には島原城主松倉氏に仕へ領内口之津村に退き繪をかくのを職としてゐたものである。松倉氏からは月俸を給し畫師として召抱へられて居たのである。原城紀事（卷十六）には、彼の口書を引き、長崎に生れ西洋畫を好くするを以て松倉氏に仕へて口津村に在りと見え、又予の見た山田右衞門作口書にも油繪の名人であつたので島原落城後一命を助けられて松平伊豆守に預けられたと出てをる。予の未だ原本と其出典とを知らざる書であるが、菅原洞齋の阮唐畫談に、山田は（惠茂作と書いてある）肥前佐賀の人で、來舶の葡萄牙人に就いて洋畫を學び、耶蘇の像を畫くを以て業とす、禁に觸れて佐賀侯に預けられ油畫法を以て達磨などを畫いたと記るしてあるが、恐くは後人の誤傳と推測とに出てをると思はれる。されば右衞門作は有馬氏の臣ではあるが、長崎で生長したものとすれば、その地の南蠻人なり日本人なりの洋畫を能くする者に就いて修業したと考へて見ることも出來るが、又別の推定をすることも出來るのである。それは尙後に考證することとする。

右衞門作は自分では耶蘇教信者ではないと辯解してゐるけれども、それは信ずることが出來ない。亂に加擔した徑路を見ると、老母妻子を囚へられ强制的に一味にさせられたことは確かであつて、予輩も聰明なるこの藝術家が自ら進んで無謀にも亂に與みしたとは考へないけれども、一度信者であつたことは、間違なからうと思ふ。原城記事の天野記を引いて右衞門作名を古庵と改め西洋畫を以て聞えしが其後天教を敷演するに坐して終身禁錮せらるとも見えて居るから、彼は元來信者であつて、助命の必要上歸正して耶宗に關係ないことを告白したが、遂に再びあらはに天主教を口演するに至つたことが推察さるるのである。天野記とは松平輝綱（信綱の子、島原に從軍す）の島原天草日記に、姉婿の嫡男とある天野長二郎長重（同役に同行す）の日記であらうと思ふが、果して然らば、右衞門作

の末路に關する事柄も信を措くに足りようと考へる。但し信綱記には山田を吉利支丹の目明し卽ち探偵の樣な者に使つたとある丈であつて、右の記事と違ふけれども、元來目明しは舊の信徒が轉宗した者を利用する例であるから右の記事は矢張り彼が嘗て信者であつた證據にもなるかと思ふ。尤もさう考へると彼の口供書の趣とは矛盾するが、轉宗者は助命さるゝわけであるから、右の點は解釋がつくと思ふ。

寛永十四年島原の亂の起る前の十月末に山田が口之津の寓居に於て主家松倉氏と家老の多賀横山二氏の爲に屏風を畫き半ば出來上つた所を、亂徒から迫られて遂に屋後の帑藏に收め、下賜された畫具は後方の岡に隱匿して置いたことを、彼自身で原城中から矢文を以て松倉家の家來に密報して寄越した。耶蘇天誅記や島原記にその矢文の全旨全文が載つてゐる。繪は多分油繪であつたと推せられる。

山田は學問諸藝に達し智謀にも長じてゐたから城中に入れられた上には更に老臣に加へられ帷幄に參した位に重んぜられたのであるが、遂に攻城軍に內應した、落城の後には一命を助かり松平伊豆守信綱に從つて江戸へ連れて來られて屋敷の中に置かれた、十年程經て明暦の大火があつた後、信綱は右衞門作に命じて失火の恐なきやうに油繪を以て失火の過失者を刑する圖を畫かせて人の見せしめにしたと云ふ事が、信綱記に見えて居る。原城記事にも信綱言行錄を引き右の趣を記してある。右の外江戸に來て彼が如何なる洋畫を畫いたか判明せぬけれども、少くとも十有餘年生存の間相當の作品があつたに違ない。但し今日存する古洋畫の何れが果して右衞門作の手に成るものであるかは知ることが出來ぬ。諸書に彼が老年に及んで死んだと記し、阮唐畫談に歲八十餘にして歿すとあるをも參考して考ふるに、右衞門作は寛永十四五年には四五十年の年輩であつたと考へられるから、文祿慶長の頃には二三十歲の間とすることが出來る。卽ち有馬附近の修學院で繪畫を敎へつあつた時代或は其後長崎の學林又は修學院でも畫學の科目があつたとすれば、そこらに洋畫を修業したこともあつたことと思ふ。無論さういふ事もあり得たといふのみであつて、必ずさうだと斷定することは出來ない。慶長時代に有馬にも長崎にも學校設備があつ

たことは確かである。

五

寛永二十年に出版された松永貞徳の俳書『油糟』に「獅子野牛さてもかいたる油繪に」といふ附句がある。必ずしも長崎で見たから油繪の題材を作つたと云ふわけではあるまいが、長崎の先民傳（下卷、流寓）に據るに貞徳は同地に遊んだこともある。又長崎で見たのではなくても寛永時代には京都あたりでも油繪は折々見られたのであらう。

また先民傳（下卷、技藝）には南蠻系統の洋畫家として生島三郎左を擧げてある。其弟藤七も其門人野澤久右も共にやはり洋畫家さては油繪師ではなかつたかと思ふ。喜多元規といふ洋畫家の名も擧げてあるが、この人は系統が違ひはしまいかと想像する。生島三郎左の年代は不明であるが、山田右衞門作よりは一時期後れた畫家であらう。薩摩に居た洋人に就いたとあるが、寛永鎖國後薩州邊の遠土に隱れて居た宣教師でも居て、それが畫を能くしたのでゝもあつたのか。先民傳の成つた享保時代までは、約數十年乃至六七十年も經過して居たらうから、其經歷も不分明になつたのであらうと思はれる。同じく享保年中長崎人の編纂した長崎夜話草（卷五附錄）にも生島が南蠻流の油繪の風を傳へ、異國人の直傳であると記るしてあるが、今此傳なしとあつて、南蠻系最後の畫家の事蹟が詳に知れないのは遺憾である。況してやその遺作と思はるゝものも今日に存せざる樣である。

攝津高槻在東氏所藏の吉利支丹遺物

緒言

大阪府三島郡清溪村大字千提寺の舊家なる東藤次郎氏所藏の吉利支丹遺品の發見せられたるは大正九年九月二十六日なりき。今其由來を尋ぬるに、同年二月頃より當時京都帝國大學に攷學中なりし今の大谷大學教授橋川正氏が、同村の近隣なる忍頂寺の小學校に奉職中の藤波大超氏と共に同地方の吉利支丹遺物に意を注がれ、二月中既に先づ墓石の發見となり、越えて九月に入り兩君外一氏が採訪の結果遂にこの稀有の史料を見出すに至りしなりといふ。やがて十月一日の大阪毎日新聞紙上に於て、遺品の大要は報道せられ江湖の弘く知る所となりしが、橋川氏は翌大正十年一月『史林』第六卷第一號に於て更に之を學界に報告し、發見の始末と共に遺物の簡單なる解說を發表せり。尋で京都帝國大學考古學教室に於ても該發見物の調査に着手し、橋川氏を介して抄物の借用を得、嶋田助手鈴木囑托を派して寫眞を撮らしむる等研究上種々の便益を受けたりしが、遂に親しく實蹟を踏査し、遺品を調査するの必要を見、四月二十四日濱田教授と予と兩人相携へて千提寺の東氏を訪問し、同家の好意によりて、現品を調査し、又多少參考となるべき來歷談をも聽取り、以てこの貴重なる吉利支丹史料の攷究に歩を進むるを得たり。その後考古學教室に於ては、梅原、鈴木兩囑托を派して再び撮影の便宜を得、漸次報告書を編して其出版を計畫せしが、同年五月予の歐米出張と、年末歸朝後予が研究興味の推移とにより、事久しく中絶したりき。採訪視察の後約二ヶ年を經過せる今日、實物を離れて、專ら寫眞に由り、而も記憶と抄錄とを辿りて、ひたすら編輯を急ぎたるが爲に他日の增訂を期せざる可らざる點愈多からんとするは、予の遺憾に堪へざる所なり。

千提寺（せんだいじ）の地たるや、山崎街道の北約一里半程の山間に僻し、徒然草にて名高き宿河原の東邊より北西に入り二三の丘陵を登りて阪路を降ればこゝに達し得べし。高槻よりするも茨木よりするも略同じ道のりにて凡三里に餘る。予等兩人は、高槻より街道を西へ進みて福井村より龜岡街道の山路を取りしが、この方やゝ遠きが如し。歸途は、茨木に出でゝ京に回れり。この北攝の二城下は淀川を挾みて北河内なる楠葉牧方などの地方と共に、京都と堺、兵庫また大阪との間の要路に當り、殊に戰國時代より群雄の據守する所となり、日本の西教史上にも、和田、高山、中川諸氏の事蹟と相俟ちて顯著なる處とす。幕初以降禁教の峻嚴なるに及びて、この地方より宗門の徒を出しゝこと記錄に明徵あり。寛政九年太田全齋の編輯せる契利斯督記に收むる所、萬治元年の調査書に「吉利支丹出申國所之覺」あり。其の攝津國の部には「永井日向守領分高槻より宗門十人許も出申候」と見ゆ。永井氏の舊封にして尙知行を有したりし山城の勝龍寺よりも、宗門七八人を出せる由同記に出づ。永井日向守直清が高槻に轉封せしは慶安二年七月にして、爾來相繼いで明治に至れり。

轉封後十年にして萬治元年幕府復禁を固うし更に制札を建てゝ遺徒の檢擧に勉めたるにつきて、高槻よりは右の如く其徒を出しゝなり。此歳や島原亂後二十年、慶長よりは半世紀を隔て、高山友祥の居城時代、城下の耶蘇教全盛期よりは七八十年を經過せり。新渡の黄蘗僧隱元が江戸城に召見せられて、高槻、茨木間なる富田の普門寺に留錫せしは恰も是年なりしが、天正年代を回顧するに時勢の變亦大なりと謂ふべし。永井氏の移封以前、元和寛永年間には、松平紀伊守家信、岡部美濃守宣勝、松平若狹守康信等高槻に在りしが、皆教徒の査問には意を用ゐたりしに相違なし。天草亂前後數年に亙りては岡部氏在城し、同氏は寛永十七年九月こゝより泉州岸和田に移りしなり。

是より先き攝河兩州の北部に於て基督教を保護せし豪族には、永祿年間、北河内の飯森城に三好長慶義賢（實休）兄弟あり、永祿元龜の交、芥川高槻に和田惟政（伊賀守）あり、天正年間に高山友祥父子あり。而して和田伊賀守は、高山右近の父飛彈守と兄弟たりといふ。茨木城は元と三好黨の據りし所にして天正六年其與黨荒木村重が信長と爭ふに至つて、村

重の臣中川清秀は本城を以て信長に降り、後秀吉に仕へ高槻の高山友祥と共に佐久間盛政を伐ちしが如きことあり。是等の群雄は堺又は兵庫と京都との間に據りて能く勢力を收めしが、大阪未だ興らず兵庫既に振はざりし此時代に方りては、堺を根據地とし、時には避難所としたる吉利支丹の宣教師どもは堺との關係深く而も京堺間に威力ある三好、和田二氏の保護を受け、巧に貿易と布教との中間に介して是等の小雄を操縱せしものの如し。信長に至つては能く這間の消息を理解し天正六年荒木村重を攻むるに當つて、宣教師オルガンチーノ（所謂ウルガン伴天連）を利用して高山右近を控制せしめしが如き策を弄せり。事は信長公記に見え、又西土の布教史に詳かにせり。之より先き十年右近の伯（叔）父なりと云へる和田惟政が、永祿十二年堺に避難四年に亙りし宣教師ルイス・フロイス（所謂ヤリイス伴天連）を京に招きしが如き、又此のフロイスが東西の吉利支丹史に名高き邦人ロレンソを京より高槻に滯在中の惟政の許に派遣して、京都南蠻寺建設の地を乞ひしが如き、元龜二年カブラルが巡察使として西國より上京し義昭に來謁せし際にも亦此高槻に至りしが如き、皆西教傳播史上この地の重要なりし事を語るものなり。天正十年本能寺の變後、安土のセミナリオ（修學院）瓦解せしや、高山右近は、之を一時高槻に置きしことあり。事變の前年には、ワリニヤーニが巡察使として豐後より上京して本能寺に信長に謁せんとせし途にも、高槻城に右近殿の訪ひしことあり。當時この地には、伴天連グレゴーリヨ・デ・セスペデス（所謂ケリコリ）在住したりき。天正十一年秀吉大阪に築くに及びては、宣教師も力を此新興の都會に注ぎ、この城下に南蠻寺の建設を見るに至りしが、やはり右近殿の斡旋努力多かりき。右近が、日本布教僧ロレンソをして大に高槻及び大阪に弘法せしめしも、天正十二年にして、小西行長、小寺孝高（黑田如水）等の受洗も是歲にあり、この後三年、秀吉の九州征伐後、宣教師追放令の發布となり、近畿南蠻寺の破壞となり、高山右近の加州左遷となりし以後は、高槻の地方、復曩日の盛況を見ず、慶長以後家康の時代に入りて宣教再び好運に向ひしも、この地方特に教勢の振張せしを聞かず。されば北攝地方の布教全盛期は天正年中にありしとするも、一旦播かれたる種子は、生長して

根ざし甚強く、山間の寒村亦その餘風を存せしも偶然にあらざるなり。本大學圖書館に藏する所の西曆一五八五年、天正十三年伊太利ェネチア刊行の『日本布教年報』(E)は西曆一五八二年、天正十年の本邦宣教の近狀を錄せるものなるが、此の冊子中特に高槻に於ける復活祭行列の莊麗を敍し、同地の天主堂の盛況を記せる、亦以て當代の模樣を察するに足る『日本西教史』(再版本四〇八頁、クラッセ原本四三六頁)にも、天正九年度の景況を述べて近畿地方を京都と安土と高槻との三教區に分ち、高槻には伴天連一人、伊留滿一人在住し、美はしき天主堂建立の事を記載せり。

三百有餘年の後、此の舊蹟附近に於て當年の名殘を留めにし吉利支丹遺物の發見せられたるは、史的興味最も大なる所なるが、東氏がいかにして祖先より之を傳紹せしかにつきての記錄若くは口碑は全く闕けたり、唯予等が訪問の際當主東藤次郎氏より聞きし所に由れば、傳來の大切なる箱三櫃ありて、その中の一箇に、かの吉利支丹遺物ども存したるなりとか。この筐棟木にくゝりつけてありしが、柴など堆積して所在わからざりしとも云へり。明治時代一たび火災に罹りし事ありしと云へば、建物も古からず同家にては、紋には梅鉢を用ゐて天神を信仰し、宗易は曹洞宗に循へりと云ふのみにて、吉利支丹傳統の如何を揣摩するに足るべき資料なきに似たり。尙東氏に就きて聞く所によれば近隣の見山、音羽等の村々にも教徒の後裔ありといふ。他日更に調査の進めらるゝ機あるべし。

今既に予輩の知りし限りに於て、東氏所藏遺品を擧ぐれば左の如し。

一、繪畫及び版畫　繪畫はシヤギエル聖人畫像及び瑪利亞十五玄義圖の二點にして、版畫は天使讃仰の銅版畫一點なり。外に吉利支丹に關する抄物に挾みたる一葉の小銅版畫あり。其解說は抄物の部の首めに附記せり。

二、彫刻及び其他　彫刻は磔刑聖像の木彫一體と聖母像の象牙彫一體となり。木彫聖像は青銅製の筒に押込みありしと云ふ。此外、天目茶碗の蓋の如きもの一箇印籠の形せる金屬製の小器一箇蓋の如きものには蒔繪あり。印籠の如きものにはメダル五箇を納れありしと云ふ。

三、メダル類　初め大小種々合せて七箇ありしを見、寫眞に附せしが、後更に一箇加はり、拓本には八箇あり。

四、抄物　吉利支丹に關する日本文平假名の寫本一冊にして洋裝をなせるは珍らし。

右四種十數點、概して慶長時代のものにして耶蘇會に屬せし信徒の家の物品とすべし。以下主として繪畫類に就きて順を追うて簡單なる解說を試みんとす。他日幸に新材料の同家內外より追加せらるゝの機會あらば、彼是相參照して更に攷究に資するを得べきなり。

註　(1)「史林」第六卷第一號（大正十年一月刊）、橋本正君「北攝より發見したる切支丹遺物」
(2) Lettera Annale portata di novo dal Giapone da i Signori Ambasciatori delle cosi iui successe l'anno MDLXXXII. In Venetia, MDLXXXV（八四頁至九一頁）

繪畫及版畫[1]

（一）シヤギエル聖人畫像

本圖は耶蘇會開基者の一人にして天文末年日本に渡來し我國布敎の礎を置きたるフランシスコ・シヤギエル聖人の畫像紙本を粗末なる掛物に仕立てたるものにして、竪二尺六寸八分横二尺八寸五分、主として泥繪具を用ゐて彩色したるものなり。本邦の吉利支丹畫家が西洋の粉本によりて畫きしものに相違なく、手法稍々無味なる譏あるを免れざれども、技巧は次に示すべき十五玄義圖よりも大に勝れたり。聖人がマンテルの下より出したる兩手を十字に交錯せしめて右手の三指にて輕く押へたる赤き心像には敎主を磔にしたる細長き十字架さゝりたり。十字架の上端にはINRIの略號四字を記せり。こは代官ピラトが揭示せしめし Iesus Nazarenus Rex Iudaeorum の頭字を取りたるものにして、「ユデヤ人の王ナザレのゼスス」の義なり。この語約翰傳第十九章第十九節に出で、元と希伯來、希臘、拉丁の三體文にて揭示せしを、普通拉丁語の略號をのみ取れるなり。基督を周りて雲間に翔翱せる天童（ケルビム）の姿も頗る巧緻に畫かれたり。十字架の下方に IHS とあるは、耶蘇會

の紋章に用ゐらるゝ Iesus Hominum Salvator の頭字を取りたるものにして「耶蘇、人類の、救濟者」の義なり。シヤギエルが口にせる拉丁の文句は、感激讃嘆を表現せるものにしてSATIS EST DNE SATIS EST とあるは、「十分なり、主よ十分なり」の義なり。DNEは、DOMINUSの呼格(ウオカチーフ) DOMINE の略とす。此文句聖人の傳記或は書簡集に出づるなるべきも未だ詳にせず。或は上川島にて熱病に罹り臨終のをりなどに發せられしにや後考を俟つ。

肖像畫面の下には幅三寸五分の一紙面あり、其上部には青地に S. P. FRCISCUS XA VERIUS SOCIETATISV の文字を黄色にて横書せり。SPは SANCTUS PATER の頭字にしてFRは FRAN を略したるもの唯末尾の一語の最後の二字の順序が相顚倒せるが如き綴り違へあり。全句は「聖父耶蘇會士フランシスクス・シヤベリウス」の義、畫像に題せるなり。この横文の下には更に萬葉假名を以て聖人禮讃の文句を唐様めきたる草書にて黄色の地の上に美はしく書けり。林若吉氏は昨年中この圖の寫眞を一見して早くも之を左の如く讀み試みて、その由を予輩に報ぜられたり。(三)

瑳夫、羅怒、青周、呼山、別論、麼、搓、可羅、綿都。

即ち「瑳夫羅怒青周呼」は、サンフランシスコの音譯字にして、「山別論」はサベリオに當り「搓可羅綿都」はサカラメントと讀むべしとなり。唯「麼」の一字は、葡語の語尾としては相應せず日本の亙爾波のモと讀みても通じ難し。或は「サンフランシスコ、サベリヨもサカラメント」とにても讀みて讃文を和様に書きたるものと解するも一案ならんが、ともかくも全文句の大要は覩はるゝが如し。落欵には「漁夫、環」とあり。「漁夫」とは路加傳第五章ゲネサレ湖の漁父を連想せしむ。「環」の名號は未考とす。その下の壺印は「耶省」の二字ならんと亦林氏の說なり。「耶省」とは蓋し耶蘇會士の意なるべし。これ關防の印の文字が耶蘇會の符牒IHSを十字に結びつけたる印形なると照應せり。されど此讃語の筆者の何人なるかは、今遽に推測することを得ず。唯文祿慶長時代の本邦耶蘇會士が會祖聖人の畫像に銘を書せしものとする外、何等の考案を述べ難しとす。山田右衞門作

の如き吉利支丹畫家が、第十六世紀歐洲文藝復興期繪畫の流風を傳へて九州のみならず近畿地方に於ても、天主堂禮拜堂などの爲に、又家々の信者の爲に、筆を揮ひけんことは固より推定し得るも、今かくの如き作品を得て現實にその徵證を見るに至りしは悅ぶべきことなり。但しその彩色に主として泥繪具を用ゐ、稀に綠青などを使ひし形蹟あるも、金泥の如きは、聖者の光背にも使用せず、横書の文字にも黃色の繪具を施して金粉を塗らざるが如き粗末なる畫き振りなるは、桃山時代の藝術に比して、あまりに見劣りせらるゝの感なきにあらざれども、この畫像製作の依賴者の位置よりも制限せられしなるべく、又新興藝術發達の程度よりするも之を免れざりしものとすべきなり。

他面より觀るに、此畫はその藝術的價値如何に拘はらず、聖シヤギエルの肖像畫として、聖人の滅後半世紀内に於て、蓋し聖人を見たるべき人の手に成りし點に於て大に價値あるべし。聖人の傳記中最も古きものの一と稱せらるゝトウルセリノ Tursellino の撰著（一五九六年アムスデルダム刊行）に掲げたる肖像等と對照せらるべきものとす。

（二）　瑪利亞十五玄義圖

この紙本瑪利亞十五玄義圖は、横二尺二寸竪二尺七寸、龜甲形の紙に貼付せるものにして、表裝を施さざる掛物として信徒の家の禮拜の間などに掛けられしものなるべし。圖樣粗雜なれども古拙愛すべく、彩色は幼稚にして、顏料は在來の泥畫具を用ゐたり。人物遠近陰影など手法に西畫の影響をとゞめたれど、幼稚なる本邦吉利支丹畫家の作品として亦一史料となすに足らん。中央聖母の頭上にしぼられたる幔幕の有樣も日本風に見ゆ。原本に據りて畫かれしものなることは言ふまでもなし。

此圖の中部は、元來ドレスデン畫堂なるラフワエルのシスチナ・マドンナの如く幔幕下に立てるマリヤ及聖子なりしを後その下半を除き去りて二聖を描き、以て一圖に接合して、耶蘇會信徒が尊崇に便なる圖を作りしものなり。二聖の肖像畫として價値あるのみならず、前圖に比して却て精神あるを見る。

この一幅三部より成る。中央は二段に分れ、それを周らして左右兩側と上段とに十五玄

攝津高槻在東氏所藏の吉利支丹遺物

義を配したり。(一)中央の上段は聖母幼き耶蘇を懷ける圖なるも、マリヤの胸部以上は顏面と共に剝落したり、聖子の像は極めて拙劣に畫かれたり。(二)其下段は聖體秘跡を示し、カリス(聖拯)の左右には、年老いたる耶蘇會の開祖ロヨラと稍若きシヤギエルと之を拜仰せるを見る。カリスの形は影薄くして朦朧たれど、その上なるオスチヤの象徵は白き圓形に現はれをりて明瞭なり。オスチアにはIHSの記號あり。上方にはLOVVADO SEIA O SANCTISS〔IMM〕O SACRAMENTIO の文字を稍約めて記入せり。全文葡萄牙語にして、今その意味を試みに直譯するときは「いとも尊き秘跡、讃仰せられよ」となり。louvado は louvar(讃むる)の過去分詞にして seja は ser(在る)の接續法なり。Oは定冠詞にして他二語は形容詞と名詞となること勿論なり。この秘跡讃仰圖はこの文句と共にメダル其他の記號に屢用ゐらる。東氏所藏遺品のメダルにも見え、又嶋原賊徒の用ゐし旗印しにも書かれたり。(4) さて此の聖體秘跡圖の下段には各二列に割りてロヨラとシヤギエルとの名を記入せり。左方ロヨラの像下には S. P. IGNATIVS SOCIETATIVS IESVS とあり。「耶蘇會士聖父イグナチウス」の意なり。右方シヤギエルの像下には、S. P. FRANCISCVS XAVERIVS とあり。SP は共に SANCTVS PATER の略語にして、兩教祖の名は上段の葡語に對して一に拉丁語を以てせるなり。横字の字配りは頗る拙なるを免れず。兩聖肖像下二列の横字中、上列は黄色、下列は青色に塗れり。聖者の上衣の青色なるその他彩色に關する點は一々指摘せざるべし。

(三)周圍の十五玄義圖は三部に分れ、左側の下より始まりて順次五圖づゝを算へて右側下に終る。或は稱して「ロザリオの十五箇條」とも、單に玖瑰珠ともいへり。九州訛りにて、このロザリオをヅザイロとも呼ぶ地方あり。尙「十五の觀念」とも、「十五くだり」とも、さまざまの稱呼ありて生月島及び浦上、外海地方に傳誦せられし其祈禱文は、外海の信者間に傳來したる十五玄義圖と共に『公教會の復活』に見えたり。今プチジヤン師が安政三年の頃、慶長時代の和解を發見して、その後明治七年『聖教日課』に編入刊行したるものを見るに左の如し。

玖瑰珠十五條

○朝五箇條　歡びのみすてりよとも云。

第一　童貞聖瑪利亞は聖額伯理厄爾大天神を以て御告ありければ、其御胎内に於て天主の御子費略は人となり給ふと云事。

第二　童貞聖瑪利亞は御親類なる聖依撒伯の御宿所へ御見舞として赴き給ふ事。

第三　童貞聖瑪亞御子費略を誕生し給ふ事。

第四　童貞聖瑪利亞御子費略の御誕生より四十日目に天父へ捧げ給ふ事。

第五　童貞聖瑪利亞御子耶蘇基利斯督の十二歳の御時見失ひ給ふて御堂に於て學匠等の中にて御法談し給ふ三日目に見出し給ふ御悦びの事。

○晝五箇條　悲のみすてりよとも云。

第一　御主耶蘇基利斯督は日色瑪尼の森の中にて膝の觀念し給ひ御血の汗を流し給ふ時の御悲み。

第二　御主耶蘇基利斯督は石の柱に搦め付られ五千に餘る打擲を受け給ふ御悲み。

第三　御主耶蘇基利斯督御頭に荊の冠を押込れ給ふ時の御悲み。

第四　御主耶蘇基利斯督は自ら十字架を擄げ給ふて加羅瓦略が嶽に赴き給ふ御悲み。

第五　御主耶蘇基利斯督加羅瓦略が嶽に於て十字架に掛り死し給ふ時の御悲み。

○夜五箇條　ごろりやのみすてりよとも云。

第一　御母聖瑪利亞の御子耶蘇三日目に元の御肉身に復活せ給ふ御悦。

第二　御母聖瑪利亞の御子耶蘇阿里瓦の山より御昇天の御悦。

第三　御母聖瑪利亞の御子耶蘇の御昇天より十日目に聖神は御弟子達の上に天降らせ給ふ御悦。

第四　御母聖瑪利亞は靈魂と肉身と共に昇天し給ふ御悦。

第五　御母聖瑪利亞は天主父子聖神の御前に於て榮福の冠を得せ給ふ御悦。

右の外、西紀一六〇〇慶長五年長崎の後藤登明印刷所刊行の平假名交文『ドチリナ・キリシタン』にも、「尊ときびるぜんまりやのろざりよ申して百五十返のおらしよの事」と題して「おん喜びの觀念五ケ條の事」と、「おん悲みの觀念五ケ條の事」と、「ごろうりよの觀念五ケ條の事」との三に分けて擧げあり。又『契利斯督記』にも、萬治元年の書上げによりて「コンタツと申珠數の事」と題して、サンタマリヤの十五の觀念として「至極のよろこび」、「至極のかなしみ」「至極のたのしみ」各五ケ條あることを擧げ、此十五をサン

タマリヤの御一代記とて、一つ毎に十遍づゝのオラショを申すと記せり。

今この十五玄義圖（ミステリヨ）を見るに、（第一）喜びのミステリヨは左側五圖にして最下の御告に始まり順次上へ數へ、（第二）悲みのミステリヨは、上段左方より右へと進み、（第三）榮福（たのしみ）のミステリヨは右側、上部より漸次下へと向ひ、マリヤの昇天を經てマリヤの戴冠に終る。圖版第四に示す所は、該十五玄義圖の左右各二圖を摘出して大きく見せたるものなり。左方二圖は下が聖子降誕、上が聖子奉上をあらはし、右方二圖は上が基督復活、下が基督昇天を示す。神人天使の姿の和臭を帶びて洋式に則れるを注意すべく、日本吉利支丹藝術の幼稚なる一標本として興味深しとす。『公教會の復活』（第二五六頁の左圖）に載する所の十五玄義圖は、撮影鮮明を闕き比較の用に供し難けれども、構圖及布置共に東氏所藏圖に相違せる所多きは之を知るを得るなり。其圖にては上中下三段に分れ、下段右より左へと始まり、基督一代記聖母のロザリヨが五個條づゝ段々上へと進みて上段の左端がマリヤの昇天にて終れり。元來十五玄義の如きは聖母緣起とも題して繪卷物にでも畫きたらば藝術的興味更に深かりしなるべしと思へど、吉利支丹藝術はそこまでは伸び得ざりしが如し。但し伊曾保物語の繪卷物も存在したる程なれば、かゝる宗門に關する繪卷の發達なかりしとは速斷し難きも、信仰の對象としての宗教畫の形式としては、單に掛軸に仕立てゝ禮拜したるに留まりしにはあらずやと推察せらるゝなり。とにかく此の圖は手法としてナイーヴなる所、却つてシンセリチーを見るべく、畫題の多樣なると多少日本的の筆致ある點と却つて興味ありとなす。

（三）銅版天使讃仰圖

この圖、下端に PRIMA PETITIO（第一の祈願）と題し上端に「主の祈（ノリ）」（Lord's Prayer）の句を揭げ、中央に大天使合掌禮讃の形を表現したれば、姑く題して天使讃仰圖といふ。周緣上部その他處々缺損多けれども、主要なる部分はよく保存せられたり。畫面は竪一尺九分、横八寸三分、全紙面は竪一尺五寸三分、横一尺一寸四分なり。西洋紙摺りにして、製版印刷は日本にあらず、蓋し舶載品なるべし。

攝津高槻在東氏所藏の吉利支丹遺物

天使の頭上に弧狀をなして一列の拉丁文の見ゆるは、「主の祈」中の名句なるが、こゝには末尾の文字闕けたり。今全文を綴れば左の如し。

SANCTIFICETVR NOMEN TVVM

これ新約全書馬太傳第六章第九節以下及び路加傳第十一章第二節以下中に見ゆる所謂パーテルノーステルの祈禱文の句にして、今更にその前後句を示さんに、

Pater Noster, qui es in caelis: SANCTIFICETVR NOMEN TVVM. Adveniat regnum tuum.

『聖教日課』には、この舊譯文を以て（天に在ます我等の御親、御名は尊ばれ給ひ、御國は來らせ給へ」と見え、名けて「御主の經」といへり。尙舊時傳誦の文句諸書に少異あり、別に註するが如し。[3]

『聖教初學要理』には、「天に在ますのおらしよ」と稱し、「第一番勝れたるおらしよ」となせり。この銅版畫中、天使の左側下石柱の如きものの欄內に記する拉丁文の末より三行目にも、標題と同じPrima Petito等の句見ゆるは、亦この第一祈願に當るものなるべし。但し、この欄內の全文は、予輩未だ出典を詳にせず、他日の考究に讓らん。天使の右側下なる欄內には、聖書より四ケ所の引用文を記せり。第一は馬可傳第十六章第十六節聖主復活、その語に「信じ且洗ぜらるゝ人は救はれ、云々」とある文句の抄出なり。文に云へらく、

Qui credideritet baptizatus fuerit saluus erit.

但し本圖には出典を馬太傳二一 Matt. 21 とせるが如く見ゆるは誤なり。第二の文は、加拉太書（使徒保羅書簡）第三章第二十五節に見ゆる「キリストに由りて洗ぜられたる汝等は悉くキリストを着せるなり」とある語にして、原文は左の如し。

Quicum enim im Christo baptizati estis.

第三の引句は、印刷鮮明ならず、出所未考とす。第四の文は、馬太傳第二十一章第二十五節に出で、最後の週間ジェルサレムに於ける基督の語にして、「ヨハネの洗禮は、何處よ

りなりしぞ、天よりか將人よりか」とあり。原文は左の如し。

Baptismus Joaunis vnde erat e Coelo an ex hominibus.

天使の背景は、ガリレアの湖を象りしなるべく、左邊に見ゆるはヨルダン川にて基督がヨハネに受洗せる所ならん。右邊には圓き四阿屋めきたる建物の下に一人の女背光ある基督の前に跪き、その傍に數人群りたり。蓋し馬太傳第十五章二一節以下馬可傳第七章二四節以下に見ゆる所の、惡鬼憑きたる幼女の母が主の御前に伏したる圖ならん。

下段の圖は洗禮の儀式を示したるなるべく、左隅に見ゆる十字架の圖の下には In Fide（信德）と標し、右隅に畫ける聖坏（カリス）と聖餅（オスチア）との圖の下には、Ad Baptisismi Sacr(amentu)m（洗禮の秘蹟）と標せり。

構圖の部分的說明の大要は右の如し。詳細は之を他日に期し、玆には本邦に於ける銅版畫につきて一言を加へて止まんとす。抑も銅版術の我國に傳はりしは天正の末年にあり。天正文祿の交、西邊の耶蘇會學林に於ては、この技術をも生徒に授けしかば、其技工進みて作品の優秀なるものも現はれしこと史に見ゆ。現存最古の作と目すべきは、牛津大學のボドレアン文庫所藏本なる肥前高來郡加津佐の學林にて印行せられし諸聖傳（サントス）の扉繪（とびらゑ）なる彼得の像にして西紀一五九一年（天正十九年）の製なり。長崎大浦の天主堂亦、同じく島原半島なる有家にて成りし古銅版畫二葉を藏せり。二畫共に聖母の圖にして、西紀一五九六年（慶長元年）及翌年の印行なり。その他本邦西土各少數銅版畫の遺品ありと雖も、之を東氏所藏の此天使讚仰圖に比ぶれば甚しき逕庭あるを知る。當時我國のうち若き吉利支丹藝術は未だかゝる程度の版畫をすら製作すること能はざりしなり。

註(1)　本邦當時の西洋畫につきては、拙著「西洋畫傳來の起源」一篇、「太陽」第二十三卷第一號大正六年一月號に出せり。尙拙考「日本最古の銅版畫」（「詩と版畫」第二輯、大正十二年二月號）參考。

(2)　破邪禪僧雪窓宗崔の邪教大意に「さんふらんしすこしやひゑる」と假名書にせるを、同書の漢文本對治邪執論には萬葉假名にて三附亂志須古袋毘惠婁とせり。文字の宛方の參照に比すべし。この書は正保五年の著なり。

(3)　「公教會の復活」の附錄に所載なる浦上外海地方に傳はりし祈禱文には、傳誦間にこの拉丁文

を訛りて

バーテル、ノーテル、キンソ、イーセ、サーツーシツー、ノメー、ツ、……

とせり。和譯にて傳はりしものは、

「天に在ます我等が御親、御名も尊まれ給へ、御代來り給へ」とあり。契利斯督記に載する萬治元年の所錄には、「御名を尊まれたまへ、御代きたりたまへ」と見ゆ。聖教初學要理には、御主のおらしよ又は天に在ますのおらしよと名づけて、「御名は尊ばれ……御國を來らせ……」とありその他煩瑣なれば略す。

(4) 對外史料美術大觀、第二一圖の旗。

（大正十二年三月京都帝國大學文學部考古學研究報告第七册）

南蠻畫屏風解說

前月新年號の口繪に掲げし南蠻畫の原本は屏風に仕立てあるものにして、今工學博士田邊朔郎氏の所藏なり、未だその傳來を知る能はざるを惜むと雖も、慶長より寛永に亙る德川初期本邦人が洋畫の粉本に依りて寫しゝ作品と認めらる。十六七世紀の交に於ける南歐市井の風俗情致を描けるにやと思はるゝも、服飾家構へなどの故實いかゞあらむ、博雅の人に聞かまほしきことなり。輕薄げに高ぶりたるさましたる男と、恥ぢらひて身じろきせる女と、人物の表情など、當代日本人の筆としては好く描けりと稱すべし。男女の服裝緋の色鮮かにいと派手なれど、寫眞にては如何にともせむかたなし。人物に比して背景の拙く見劣せらるゝは、殆ど別人の手に成りしかと怪まるゝ程なるが、透視法の稍違ひたる、

階段欄干等の線様の東洋式描風なる、共に史的興味よりすれば却て面白味なきにあらず。顔料は泥畫具めきたものを用ひたる背景の部と專ら油畫具を使ひたる人物の部とあれど、この種の技術的方面に至りては、素人の詳說し難きものありとす。

抑も洋畫が天主教と共に我國に入りてより以來宗門の學林に於て教課に上ぼされ信徒間往々技術の勝れたる者を出だすに至り、又歐南名工の油畫の時に輸入せられたる跡あること同好の人の知る所なり。宗教畫の獨り南蠻寺を飾り啻に信徒の持佛堂に掲げられし事どもありしに止まらず、延いては往々宗旨を離れて風俗畫人物畫をも產出し、その遺品の今日に傳はれるもの若干あること亦今更述べざるべし。南部伯爵家に存する所謂最上屏風、會津の松平子爵家に殘れる傳山田右衞門作の各國帝王圖屏風の如き、一は天正時代の古作、他は德川初期の作品にして、共に本邦油畫の名品として人口に膾炙す。この他數點の油畫準油畫ありといへど、總じて天正寛永間の洋畫遺品の殘れるもの甚少きを憾みとせしに、今こゝに一幀を加へしこと最も喜ぶべし。本邦に於ける南蠻系洋畫の源流につきては予別に發表あり、又近年斯界の發見にかゝる當代同流の藝術品につきては、吾ひと共に紹介を怠らざりし所なるが、幸にして田邊博士がこの貴重なる南蠻畫屏風を提供せられて予輩の研究に資せられ、且つ本誌に掲載して普く同好の人々に公表することを快諾せられしに對しては予輩深く感謝の意を表せざる可らず。

（大正八年二月藝文）

和蘭傳來の洋畫

一

徳川時代の洋畫家として從來南蠻系の畫家山田右衞門作の事蹟が少し知れてゐる外に、長崎の先民傳下卷技藝に出た生島三郎左、野澤久右、喜多元規の三家の名が聞こえてゐるが、その閲歴は一層不明である。生島は少時薩摩に往いて同地に住する蕃人に就いて蕃畫を學びその妙を得たといふことで、その弟藤七なるものも傳によれば、恐くは兄と共に蕃畫に指を染めたらしい。野澤は生島の門人としては又畫を善くし長崎で名を得た。最後に喜多は華蕃の畫法に工にして肖像を能くせるが、今その傳を失ふとある。先民傳は崎陽の學者の盧千里が享保十六年の著で、故老に得家乘に採つて編纂したものであるが、元來記述が甚簡單である上に、右三四家の事は當時にあつて最早湮滅に近かつたと見えてこれ丈しか記してない。生島の名は、享保四年の著たる西川如見の長崎夜話草卷五附錄、長崎土産物と題する一節の首に、唐樣畫師と標して「第一唐樣彩色也、又南蠻紅毛油繪の風を傳へたる者あり、世界の圖などは長崎畫師を根本とす、周碩生島殊に異國人直傳にて、周碩は唐風、生島は蠻流なりし、又生島は彫物名人也、今此傳なし」と見えてをるが、生島が南蠻流の畫法を傳へたことは、右二書略一致してゐるのである。喜多に至つては、時代も稍〻下り、其洋畫の所傳も寛永鎖國以後とおぼしく、明暦頃の人といふことである。和蘭流の油繪はこの人あたりが嚆矢ではなからうかと思はれる。遲くとも享保の初に於ては、右の如く崎陽に於て「南蠻紅毛油畫の風を傳へたる者」あることは事實である。されば同じく享保時代の人なる細井廣澤の書いたものに阿蘭陀油方といふ自筆寫本が傳はつてゐるのを見ても、其頃既に油畫が長崎には行はれてゐたことが推察される。廣澤が書畫及儒學の外に

天文地理にも通じてゐたことは知れてゐるが、長崎から傳はる支那の學藝の外に、西洋の學藝にも興味を有つてゐたことは、彼れの抄した測量秘辭と題する寫本によつても知られる。この本のうちには和蘭の天文學説なども見えてをつて、廣澤の一面を知るには有益な資料であるが、その傳來は享保十二年の自序によると長崎からである。從つて彼の抄した阿蘭陀繪油方も、外科や油藥の方と同じく長崎から傳はつたもので、油繪方が江戸に傳はつたのでは一番古いと思はれる。

一體享保時代は日本洋學史上で重要なる時期であるばかりでなく洋畫傳來史上でも最も注目すべき時代である。洋畫の祖先といはるゝ平賀鳩溪の明和時代よりは三十年以前、銅版及油畫の發達に功あつた司馬江漢の天明寛政時代よりは五十年以前にあたる享保頃の事は、洋畫發達の前期として準備期として攻究されねばならぬ。今一二の史料を開展して見よう。吉宗の寄附といふ阿蘭陀油繪花鳥圖（懸幅兩軸）といふものが、江戸本所羅漢寺の所藏で寛政八年までは傳はつてゐて、それを寛政文化頃の洋畫家石川太浪兄弟が其一幅を其年に摸寫した。それに大槻玄澤が題した文が、磐水漫草（磐水存響坤卷）に見えてをる。之に由ると、吉宗寄附といふ油畫は、西暦一七二五年（享保十年）微兒列摸（キルレム）・方（フワン）・魯伊（ロイエン）（Willem van Ruyven）の畫く所で、「草花之形、菓蔬之狀、以至禽鳥蟲蛾之文、色澤逼眞、位置極精、粲爛陸離、宛然若坐名園之中、而馥郁芬芳、襲人衣袖也、嗟寫生之巧、實可謂奪造化之工夫矣」と其摸本に贊してあるが如く、其頃精妙な油畫として珍重すべきものであつたことがわかる。この摸本は明治三十九年東京帝室博物館特別展覽會列品目錄甲部に據ると、其第一六四號に標せる草花圖（縱七尺七寸五分横三尺五寸四分）に當り正に現存してゐる。さて原畫の作が享保十年であり、寄附者が吉宗であるとすれば、日本に傳はつた時期も大體推定出來るわけである。享保より稍〻上る正德三年に成つた新井白石の采覽異言（卷一）に、著者が見た「大西所畫冬景圖」のことが載つてゐるが、記文によると、その圖は露國あたりの人物も見ゆる冬景色らしく、果して肉筆であるか、版畫であるかは明かでないが、亦當代の洋畫傳來史料の一に數へておくことが出來ようと思ふ。遠近法卽ち透視法

と連關すべき「のぞきめがね」の事も既に此頃の編輯にかゝる本朝文鑑（支考、享保三年編）に見えてゐるし、奥村政信（明和五年歿七十九）の創めた浮繪の流行したのも享保年中であるといふ。

享保時代に於て特筆されたる沈南蘋の渡來（享保十六年十二月來、同十八年九月歸）は我が洋畫傳來史上からも重要な一事件である。何となれば三十年後寶暦末期より明和時期にかけて南蘋の動植寫生の畫風が江戸に傳はつて以來、其頃勃興した本草學と觸れ、和蘭銅版畫の本草圖譜と接し、以て間接に洋畫の發達に資したからである。その事は後に至つて細説しようと思ふ。

二

銅版畫の傳來は南蠻系統のものは暫く措き、和蘭系統のものにしても、その起源は頗る古いのである。モンターヌス A. Montanus の遣日本使節記 Gesantschappen……aan de Kaisern van Japan（一六六九年寛文九年和蘭原版○翌年の英譯刊本あり）に由るに、西暦一六五九年四月二十九日（萬治二年三月八日）甲比丹ワーヘナール Zacharias Wagenaer が幕府に暇乞に登つた時、老中稲葉美濃守正則（蘭人は Minosamma と稱せり、當時小田原城主たり）より、曩に獻上せるレムベルト・ドドネウス Rembert Dodoneus の本草書（植物書）版本が、挿畫の草木花卉甚だ美なるにも拘はらず、印刷小に過ぎ構圖未だ巧ならずとして、之を返却し、更に大なる本にして尚美はしく畫いた本を寄越してくれと要求されたといふ記事が出てをる。數年後寛文三年春（西暦一六六三）には蘭使參府謁見の時、阿蘭陀繪大小二十一枚、阿蘭陀本草一冊等を四代將軍家綱に獻じたことが德川實紀に見えるが、其時の甲比丹はインダイク Henrik Indyk であつた。現に東京大學の圖書館に所藏さるゝヨンストン I. Johnston の本草書（動物書）には西暦一六六三年インダイク獻納の旨の蘭文が蘭人らしき手で書かれてゐるから、右のをりの獻本は此書（西暦一六六〇萬治三年刊）であるに違ない。このヨンストンの本草書は吉宗の洋學開始にも鳩溪の洋畫振興に

も大關係を有する書であるが、其次第は後に敍するつもりである。尙通航一覽卷二百二十四には、右等の獻上物の品目中に「びいどろ繪板五十枚」をも擧げてある。

更に二十年程下つて天和二年（一六八二）には、一昨延寶八年に賀州侯より蘭人に注文したドドネウスの本草書（一六六四年刊本）が前田綱紀侯のもとに着したといふ事が松雲公傳に載つてゐて、編者は侯の意書物の本文を讀む爲にはあらで、寧ろ草木圖の參考の爲であらうと推定したが、予輩も上記モンターヌスの記事でも察し得るが如く、此時代の本草書はドドネウスにせよヨンストンにせよ一に插畫の爲に參考及賞翫されたものであると信ずるのである。插繪の美麗、銅版の精巧に引きつけられて本文を讀む路を開いたのが、將軍吉宗で、公の蘭學開始の直接の動機は本草書の插繪を解說することに外ならなかつたのである。

吉宗以前に於て西洋銅版畫を挾んだ圖書の舶載は前記數件の外幾何あつたか知らない。今現存の遺品及記錄から探つて見ると、文化十年に京都の蘭學者辻蘭室が解說を試み、近くは大正三年京都大學に於て原博士が卒業式に台臨の御名代宮殿下に說明申上げた和蘭古銅版畫海陸兩戰圖二幅の如きも、萬治寬文時代卽ち十七世紀の半頃に渡來したものと考へ得られぬことはない。元祿時代に至ると、同八年刊行の西川如見の華夷通商考卷下阿蘭陀土產の中に、世界圖色々丸平星ノ圖丸平の次に「繪」を擧げてある。同書の增補本（寶永五年刊）にも「繪色々」と擧げてある。地圖類の舶載は、他書にも往々見かけるが、これは今は論ぜず、予輩はこゝに擧げてある和蘭土產の繪とは、版畫を指すものと推定するのである。

平戶藩樂歲堂藏書目錄（天明の序文あり、寬政頃の追加も見ゆ）の卷五に外國書の部があり、其中に阿蘭陀の畫圖若干の名目が擧げてある。歐亞の風景風俗戰陣肖像等の畫圖であつて、いづれも渡來の時代も不明であり、予輩も亦現品を見たことがないから、靜山公以前の古渡り品であるか、ましてそれが元祿以前の舶載であるか否かは言ふことが出來ない。但し書目中にデサルギュス一卷とあるのに就いては一言を禁じ得ない。この書は去る明治三十九年の博物館の特別展覽會にも出陳され、從て其目錄にも出て居るが、予は大正

二年春松浦伯爵家の好意により之を見ることを得た。即ち同書は佛蘭西で相當の名ある幾何學者のガスパール・ド・デザルグ Gaspard de Desargues の透視畫法を祖述したもので、編者の名は Abraham Bosse (?) 及 Johan Bara とあり、書名は Algemme ene Manier van de Hr. Desargues, tot de Practijck der Perspectiven gelijck tot die de Meet-kunde, met de kleyne Voet-maät とあつて、一六六四年アムステルダム版である。タイトルペイヂに二婦人の銅版畫ある外、本文中に透視畫圖及銅版の插入甚多いのに注意したのであつた。享保十九年の著述及刊行にかゝる江戸の人島田道桓の規矩元法町見辨疑（西川正休序）などに見ゆるカスパル流は、蓋しこのガスパール・デザルグの法を傳へたものと疑ふから、右の透視畫法書の如きは、或はずつと古い舶來書であらうかと考へる。天明編纂の書目には此書を解題して「助術、見通見臨ムコトノ學、元木（今按ずるに長崎譯官本木榮之進なるべし）曰デサルギュスト云フ人ノ敎、物ヲ見通シ見臨ム學術、町間尺積リノ術、影日向（カゲヒナタ）ノ見積リ、平均算等、アブラハム・ホツセト云フ人編集シテ、ヨアン・バラト云フ人佛蘭察國語ヲ以テ翻譯シタル書」とある。予輩は本書が、舶來年代の不明なるを惜むと共に、町見術に於てはともかくも、其透視畫法に關して如何程の影響を與へたかを知ること能はざるを遺憾とするが、本書の傳來は、本邦の洋畫史の攻究上一應注意に價すると思ふ。この書に因みて擧げておくのは、內藤博士所藏の視學精蘊と題する刊本二帖である。內題には視學辨言とあり、己酉二月の序があつて、泰西郎學士の所說を引くのに據つて、その透視畫法が西說に出づるものなることを知ることが出來る。郎學士とは清朝に洋畫を傳へ又自ら支那畫を能くした伊太利出身の宣敎師郎世寧 Giuseppe Castiglione（康熙年間より在留し乾隆二十九年七十餘歲にして歿す、時に西曆一七六四）であるとすれば、右序文の己酉は世宗の雍正七年卽ち西曆一七二九年、我享保十四年とすべきであらう。されば此書の如き清朝の編著と本邦の洋畫法との間に何等かの連絡ありや否やはまだ疑問に屬すべきことである。

三

蘭畫の插畫が殊に公侯の注意を惹いたことは前節に述べた如くであるが、將軍吉宗が蘭學創業の由來を尋ぬるに、蘭學事始に由ると、「和蘭書と申もの是まで御覽遊されし事なき者なり、何なりとも一本差し出し候樣上意ありしにより何の書なりしにや圖入の本指出せしに御覽遊され之は圖ばかりも至て精密の者なり、此内の所說を讀得るならば亦必ず委しき要用の事あるべし、江戸にても誰ぞ學び覺へなば然るべしとの事にて初て御醫師野呂玄丈老御儒者青木文藏殿との兩人へ蒙仰候よしなり」とあるから、蘭書翻譯の發端は畫圖に出でたることが知られる。青木昆陽が御書物御用達に登用されたのが元文四年三月八日で野呂元丈が御目見醫師に任用されたのが、同十月一日であるから、蘭學の用命が將軍から二人に下つたのは、元文四年十月から同五年を經て翌寛保元年の春に至る頃で、先づ元文五年頃と約言しておいて差支なからう。寛保元年三月（西曆一七四一）野呂元丈が、當時參府の阿蘭陀加比丹、書記及外科醫と大通事吉雄藤三郎とに就きて對談の結果解說して幕府に差出した所謂ヨンストンスの阿蘭陀禽獸蟲魚圖和解一卷を、右の蘭學事始に見えた吉宗下命の際の成果とすれば、蘭學開始の年を寛保元年とせねばならぬ。同年三月には青木の方は十五日に古文書採訪に出張を命ぜられてゐたから、其年には蘭學に關係せず從つて青木の最初の著述なる和蘭貨幣考といふ一小譯著は翌寛保二年三月に成つてゐる。然し元丈は元本草學者だからヨンストンの本草書の解說を管し、昆陽は經濟學者でもあつたから、先づ貨幣に注目したと云へるが、前著は單に蘭人と通詞とが和解をする業を管して編述に當つた丈であるに對して、後者は自ら進んで語學を修めて根底を作つたといふ差別は認められる。但し元丈とても語を學んだ形跡のないことはない。それは茲では問題外とするが、元丈が寛保元年以降寛延三年に至る十年間（西曆一七四一より一七五〇迄）毎年三月一度參府の蘭人等に就いて聞いた結果は、阿蘭陀本草和解十二卷合綴一冊となつて現に内閣文庫に保存されてある。本書の首卷たる卷の例言によれば、原書は「七十七年前二月二十八

日ヘンデレイキ・インデイキトイフ「カビタン」江戸へ上ル」とあつて、而も西暦一六六〇年板行のヨンストンの本草書であるといふからには、前掲の東京大學本は正に此時使用の本に當るわけである。「畫ノ所ハ銅版ナリ文字ノ所ハ鉛ナリ云々」と注意してあり、右御本と他の一本と圖は同様で文字異なると見えてをるから、此際二部の異本を使用してゐたことがわかる。和蘭印本の精工なことは、昆陽漫錄にも「西洋印書」と題して「阿蘭陀本草等を見るに甚だ精妙にして萬國に勝れたり」と稱へてある通りで、寛保延享度に於て蘭學創業の二大家も之を認めて居たのである。

四

寶暦以後殊に明和安永時代に至つては、和蘭熱の隆盛につれて本邦に於ける洋畫界に新時期を畫する様になつた。その中心人物は平賀源内である。而してこの時運に育成されて天明以後に現はれたのが司馬江漢である。源内は一面飄逸なる戲作者たり他面眞摯なる本草家たるが、寶暦三年長崎に遊び西洋の諸技藝を學び、江戸に出でゝ（洋學年表に據る、西遊及東移の年代諸書異同あり）主として本草の研鑽に從事し、同九年及十二年には湯島に藥物會を主催し、同十年以後には屢諸方に採藥の擧あり、それらの結果として、同十三年物類品隲六卷の編輯及刊行があつた。その間毎春江戸へ參府する蘭人に本草の事を質問し、時に彼等を驚嘆させたことがあつた事は蘭學事始にも見えて居る。さて物類品隲を通讀するに卷一及卷二鑛石類の條々に於て繪具のことを說くあたりは最も注意すべきである。殊に「ベレインブラーウ」の條項に云く「紅毛人持來ル、色深ク甚鮮ナリ、予ガ家紅毛花譜一帖ヲ藏ム、品類凡數千種、形狀設色皆奪眞、其青碧色ハ此ベレインブラーウニテ彩ルト見エタリ、其色至テ妙ナリ、疑ラクハ回々青ナラン」とある。この顏料のことは、秋田支藩の佐竹曙山侯も彩品二十六種（安永七年著の畫圖理解に出づ）の丹青の部にブラアウインデク(Blauwindigo)と共に擧げ、又牧穆中（箕作阮甫門）もベルリンスブラウ製法と題する譯述（弘化二年頃）もあつた位で、重要な繪具であつたのである。これは蘭語

のBerlijnsch blauw（伯林青）で、今所謂 Prussian blue（普魯西青）を指すのである。又鳩溪は同書に於て「綠鹽」を說き、これは「蠻產スパンスグロウン（Spaansch groen 西班牙綠の意）ト云モノ是ナリ、紅毛繪ノ設色ニ用ウルモノ是ナリ」とある。更に進んで「コヲルド」を說き、「和名シヤムデイ、研テ畫色ニ用テ赭黃色ヲナス、秋景中山腰ノ平坡草間ノ細路、深秋草木又ハ松幹ノ類此物ヲ用テ甚妙ナリ、本邦ノ畫家銀朱墨藤黃三物ヲ合テ此色ヲナス、コヲルドノ自然色ニシカズ」として舶來繪具を賞揚して居る。この外空青（これは既に華夷通商考阿蘭陀土產の品目にも出づ）等のことも說いてあるが、これらの顏料悉くが西洋畫に關係してをるとは云はれない。然しベレインブラーウ及スパンスグロウンの二條を見れば、鳩溪が油畫乃至洋畫の彩色法を心得て居たことが判り、彼の作品として現存する唯一の油畫西洋婦人像（大阪鹿田靜雲堂藏）並に秋田派の畫家に及ぼした關係などとも對照して、彼が洋畫の造詣を知る上に一證を增した事になるのである。鳩溪と佐竹曙山侯小田野羽陽等の一派との關係については、平福（百穗）安藤（和風）二氏の所說に讓つて玆には述べぬことにする。

物類品隲卷六には附錄として人參培養と砂糖製造との說中にある插畫三圖の中に一圖には自畫なる由落欵に見えてゐるが、本邦洋畫史上故らに擧げるほどのことはない。之に反して卷五は全卷產物圖繪のみであつて、末に楠本雪溪圖と銘してある。雪溪とは沈南蘋に學んだ崎陽の畫家熊斐の畫風に則り、後寶曆八年長崎に遊んで淸客宋紫岩に就き、南蘋の畫風を江戸に傳播したのを以て名高い宋紫石の舊名である。紫石と鳩溪との接觸は本草書に於ける動植物の寫生畫に於て漢蘭兩畫の接觸を見た。「以紅毛本草臨」とある泊夫藍（サフラン）の一圖を除けば、他は主として植物の圖の臨摹で、末に僅數種の動物の寫生圖を附してあるが、外形上本書が和蘭の本草書の體裁から刺戟されて成つたと見得べきが如く、構圖上にも紅毛本草書の圖樣から啓發されて居る樣に思はれるのである。繪畫叢誌第八十四號明治二十七年三月揭載の松阪小津氏所藏の宋紫石畫の獅子圖は、其識語に「此獅子圖、平賀先生秘藏蠻獸譜中所載、與世之所畫者異、蓋蠻人之寫生云」とあつて「明和五年戊子仲夏宋紫石

描」とあり、曾て藤岡東圃博士の紹介もあつて、これは明かに洋畫（銅版插畫）より受けた構圖上の影響と認むることが出來るが、物類品隲に載する紫石の圖繪も同じ點に關して恰好なる參考資料となるものと思ふ。

本邦の本草學史上から見た物類品隲と醫學史上から見た解體新書とを對照して興味少からざると共に、前者の動植圖を宋紫石が畫き、後者の解體圖を小田野羽陽が畫いたのを比較するは又頗る面白く覺ゆるのである。二者共に鳩溪の感化が多少及んでをるが、羽陽が「夫紅毛之畫也至矣哉、如余不佞者非敢及企及云々」と嘆じたのは、蘭畫の刺戟と見るを得べく、之を紫石が紅毛本草を臨摹したのと照應させて見ると妙味を感ずるのである。

さて鳩溪は雪溪（紫石）に就いて畫を學んだことがあるのではないかと思ふが、司馬江漢も中頃紫石に就いたことが自著春波樓筆記に見えて居る。而して江漢は同じ書及和蘭通舶版畫卷一銅に於て自ら壯年の時、銅版の話を平賀氏から聞いたと自白してをるから、鳩溪紫石江漢三人の關係は本邦の洋畫及銅版畫史上に非常に重要なものとなつて來る。

寶曆末年の物類品隲と安永初年の解體新書とに次ぎて、予輩は天明七年刊行の森島中良の紅毛雜話を一瞥したい。編者中良は戲作家として風來散人の門人であつたが、本草學又は洋畫法に於て同じ鳩溪から感化を受けたことを認めることは出來ない。雜話卷四に「和蘭の畫法、附銅版の法」を說く一章の見ゆるのは、江漢の畫談、通舶並に筆記の三書中の所說と共に、普く其道の人に知らるゝ所であるから、縷述しないが、雜話中の插畫に就いては一言しておきたい。卷一所載のダラーカ之圖は、卷四所揭の裸體圖及骨節手足人物活動之式を示せる圖と共に中良の自畫にかゝるが、予輩はその外、文晁の舊師と傳ふる北山寒巖（馬孟熙、號文奎）の鰐之圖及獅子之圖が、卷四に見え、共に泰西動物畫摸寫のであることゝ、司馬江漢の昆蟲の顯微鏡下擴大寫生圖が卷三に揭げてあることに注意する。殊に寒巖の圖は、紫石の獅子圖を想起さしむる。すべて是等の動物畫は、或意味に於ける洋畫の影響と見做し得るのである。江漢の靈鷲山絕頂之圖、中良の鐵砲弶之圖（共に卷二）、

北尾政美（鍬形蕙齋）のエレキテル之圖（卷五）の如きは、洋畫に關することなければ一應列擧するに止めるが、中良が洋畫法を得たといふ原本のシキルデルブツクなるものに就きては、少しく考證して見たいと思ふ。然しこれは江漢や華山の事歴と共に說く必要があるので、他日の發表に讓つて本稿には略することにした。

五

江漢田善等の洋畫家銅版師のことは有名なれば復玆に贅せざることにする。文晁華山等の文人畫家、北齋廣重等の浮世繪師に及ぼした洋畫の感化も亦更めて本稿には說かない。文晁とも交り、文化時代の洋學者とも關係深き洋風畫家石川太浪の事蹟は、埋沒して居るから是非これを表彰したく思ふのであるが、これも他日一文を草して精敍する機まで保留する。本稿を結ぶに當つて一瞥しようと思ふのは、京阪及長崎に於ける蘭畫界の大勢であつて、江戸に於ける洋畫の進境は之を說くには稍紙面を要するにつき、別稿を期する次第である。

江戸以外に於て、東北の秋田と西南の長崎を除き、京阪地方にも亦洋畫の發達があつたらしく、夙に、明和三年四月に於て、攝江芳井春常の畫ける洋館圖の今嚴島神社に保存されて居る樣なこともあり、木村蒹葭堂の蘭音類聚を見ても「畫具」の部には、油畫方についての記載をはじめ色の名目などを擧げてもあり、予輩に、大阪にも油畫を學んだ一派のあることを暗示する事實が存するのである。寛政二年の著なる桑嗣燦の玉洲畫趣にも、大岡春卜のいはゆる嶋繪なるものは、「定而阿蘭陀より來候生寫之繪に而可有之候、南蘋の畫體は浚骨の法にて寫生を專らに致候故、彼紅毛畫に似たりと春卜が嘲りたるにても可有之候歟」と解釋を與へた所を見るに、天明寛政間、京阪にも蘭畫の行はれてゐたことが判ると思ふ。予輩は同時に南蘋の畫風と紅毛の畫法との交渉をこの南畫家の所說中に於ても認むることが出來ると思ふ。更に當時の文人畫家中林竹洞の畫道金剛杵（享和元年）を見るに、洋畫を罵倒して云ふに、「紅毛の畫は、畫中の惡俗魔界なり、まことに下國の風也、し

かるを當時の畫者ども往々此風の畫を好めるは已が卑劣心にひかるゝ故なり、(註云)近來月仙が輩又邪魔の甚しきものなり」とあるのは、寛政時代關西の風尙を想像せしむるに足る。竹洞又畫道手引草に於て、畫家の氣格を論じて「後世の人凡下の心を以て隨意に製する所の聖賢仙佛羅漢高僧等の圖其面貌俗態を帶び特に威容なし、其紅毛流を雜ふるに至りては鄙陋極る、畫者尤も愼むべし」と云つたのも、當代新傾向の弊を戒めたものであるが、そのいかに洋畫風流行の兆があつたかを察せしめる。之より先き安永四年土佐(江戸住)の仲山高陽の著はした畫譚鷄肋に、「生うつしはおらんだに過ぐるはなし」とて、本所五百羅漢寺所藏の花鳥圖二幀を推賞してゐたのに徵して、其頃江戸の畫界の流行を窺ふことが出來るが、江戸のみならず、名古屋から京阪にかけても同樣に蘭畫の風が持てはやされたものと見える。かの竹洞が罵倒した伊勢の月僊の如きも、その風に染まつた一人ではなかつたか。さすれば亞歐堂田善が天明年中伊勢に至り月僊に就いたのも因緣がないでもない。續諸家人物誌によれば、月僊の作に耕織圖の名が見えるのを注意する。若し予輩の推測を逞しうすれば、文化四年に南部の永根鉉が題言を書いてをる翻刻本の康熙耕織圖は、もと兼葭堂所藏の原本に據つたものであるが、或は月僊(文化六年歿)の仕業ではないかと思ふのである。耕織圖は、支那に於ける洋畫遠近法の影響のあらはれてゐるものと考へられ、予輩もその精巧な翻刻本を內藤博士の藏本に就いて見たことがあるが、本邦に於ても古くから其點に着目した畫家もあつた。文晁畫談の中に、文化八年石川太浪が記した「泰西の畫法に因る事」の一節によつて之を知ることが出來る。

六

長崎に於ける蘭畫の傳統は明瞭ではないが、當初より縷々絕えなかつたのでないかと思はれる。唐畫家の中に傍ら之を學ぶものがあつた樣に思はれる。鳩溪なり江漢なり田善なりの長崎に於ける斯道傳受の樣子は分明でないが、本草學者佐藤中陵の著はした中陵漫錄卷三中の記事を見るに、其頃の崎陽の油畫師の模樣が察知されるのである。此隨筆(文政九

年序）の其記事は多分中陵が寛政四年或は九年に同地に遊んだ時の事柄を敍したものと思ふ。「蘭畫」と題する頗る長文の記事であるから、玆に精しく引用することを省いておくが、其要點を摘むと、著者は先づ長崎に於て洋畫の影響を受けたといへる明淸畫を得、又「長崎の畫工に西洋の法を得て畫したるを見るに眞に善と其の巧を相爭ふ、蘭人も亦此畫工に命じて各持歸る」由を云ひ、自身の在留中にも、蘭人が其狎妓の肖像を土地の蘭畫師に寫生させたこともあると記るしてをる。彼は又崎陽の內外人が舶載の蘭畫を有つてゐることをも述べてをる。中陵は進んで、油畫の作法、畫具の製法をも細說した。遠近法濃淡法より彩色法にも及んで、蘭畫家の祕法をも紹介した。「近來は江戸にても大に流行して畫すれども其畫法を知らずして只奇として見るのみ、猶又市家に鬻ぐものは蛤粉にて地をし、靑花にて「ペル」の色なり、是れかの油畫にあらず、畫景は相似て蘭畫に擬すのみ」と似而非和蘭畫をそしつた。この記事は紅毛雜話や西洋畫談等の所說にもまして、日本の洋畫史料としては重要なものである。殊に著者が本草學者であるだけ、畫具などの說明は精且つ確であるやうに思ふ。

江戸にも前述の通り和蘭舶來の原畫が古くから輸入されてあつたのであるが、長崎では商館及譯家には肉筆及版畫の種々なものがある上に又早く蘭人より技術を傳へて修業する便があつたから、寶曆安永の交江戸に斯道が行はるゝに至る前から相當に發達して居たらしいのである。從つて此地に遊歷した人々の紀行を見れば、筆屢々蘭館所揭の洋畫、譯家所藏の蘭畫に及んでをるのを認める。一二の例を擧げて餘は類推に委する事とするが、先づ安永七年の三浦梅園の歸山錄に見よ。譯官吉雄耕牛幸作の家に西書の銅版の精巧言ふべからざるを激賞し（卷上）、譯官松村翠崖安之亟に就きて西洋畫の說明を聽き（卷下）、之を記るしてある。梅園詩集にも「謝吉雄耕牛惠西洋管窺鏡畫」（安永八年）の詩中にも「畫能飛動勢逼眞」の句あり、又「遠奇西圖一幅至、輕裝深目鞭鐵驄、郭門望覺恍入空、非君天風假羽翼、焉使人在西洋山水中」の贊あり、註して「畫不主筆意、唯以寫眞爲務」とて洋畫の法に及んでをる。江漢の西遊旅談にも、記事こそなけれ、蘭使館を畫き洋畫の額を出して

ある。かういふ具合に、其時代の歴遊者は崎陽で種々の刺戟を與へられたことゝ思ふ。

長崎には文化年中及前後に於て唐繪目利の職を勤めた石崎融思及同役にして義弟たる荒木如元をはじめ南蘋軒などの油畫師があり、各々一二の洋畫又は洋風畫を遺して居る。三家の名は古畫備考（卷二十五、卷四十九）に見え、融思の事は扶桑名畫傳（卷三、十八）（瓊浦畫工傳をも引く）と竹田の竹田莊師友畫錄（卷下）とにも見ゆるが、いづれも簡單な記載しかない。義弟荒木如元の作品として傳はる油畫には、現に京都文科大學に保存さるゝ風景圖一幀（文化二年八月下旬の作と符記さる）がある。將來長崎派の洋畫を攷究するに當りては重要なる作品とさるであらう。

（大正六年一月史林）

洋畫史談

司馬江漢に洋畫に關する書物を與へたといふチチングと呼ぶ和蘭商館長（日本で甲比丹といふ）の事は、江漢自身その著和蘭通舶（卷上、西洋畫法の章）と西洋畫談とに書いてゐる。前者は文化二年の刊行、後者はそれより六年前の寛政十一年の刊行である。畫談の成るよりも十年前の天明八年に彼は長崎に旅行し、蘭館にも入り且つ蘭人にも接した樣であるが、それより二年後の寛政二年に刊行した西遊旅譚（卷三）には、チチングの事も洋畫の本の話も一向見えない。この蘭人が天明時代の江戸の蘭學者や長崎の通譯官に與へた影響、并に自身日本の事情と歴史との研究に熱中し、歸歐後著述をして日本を西洋に紹介

した功績は、こゝには述べないが、江漢に洋畫の參考書を授けたといふ一點は、吾人の等閑に附するを得ざる所である。チチングは安永八年から天明四年に至るまで、其間中途不在の時を除き前後通じて三年半日本に在勤し、安永九年と天明元年との二回、江戸に參府したことがあるから、司馬江漢も彼と相識であつたことゝは思はれるけれども、江漢が長崎西遊の天明八年は、チチングが最早日本を去つた後數年であるから、直接にチチングから畫の本を貰ふわけはない。印度に在職の間、人傳てに書物を日本の蘭學者連に贈つて寄越した例はないではないが、前記江漢著述の二書に長崎でチチングから得たと書いてあるのは、ちと割引を要する話である。

所が他方には、このチチングは、日本から浮世繪を西洋に持つて歸つたと云ふので名高い。洋人の著はした日本美術史にも見えてゐるが、チチングの蒐集圖書目錄で稍委しく知られる。彼の蒐集した圖書類は、死後間もなく散逸したから、其時彼が舶載して歸つた版畫の何であるかは、固より判りさうもないが、其著述の日本風俗圖會に附錄する蒐集圖書目錄は明かに彼が日本研究の範圍が頗る廣汎に渉ることを示す、即ち歴史地理より本草錢貨に及び、而して當代の風俗資料として彩色版畫を蒐集したものと見受けられるのである。チチングが殊に日本風俗研究に熱心であつたことは太田南畝の瓊浦雜綴（文化二年卷中）に詳かである。橘南谿も天明三年西遊のをり矢張り通詞から聞いたと見えて、チチングの事を北窓瑣談（後編二）に書いてゐる。

斯樣に東西美術の仲介者となつたチチングには面白い翻譯物が殘つてゐる。それは太宰春臺が刻した古文孝經の序文を通譯者の補助を假りて翻譯した事である。春臺が翻刻した孝經が清國に渡つて、それが知不足齋叢書に收められて、安永年中に長崎に渡つた事は書史上に有名な話になつてゐる。丁度この時代は孝經で名高い山本北山などもゐた頃で、長崎でも通詞の吉雄耕牛などは孝經の愛讀者であつた。そこでチチングもこれにかぶれて京

都から色々の異本を取寄せたりしたものである。その中から、先づ春臺の序文だけを譯したのであるが、彼は歸西の後一八〇三（享和三年）に之を巴里の王立圖書館に獻納したさうであるが、予は之を探して見もしなかつた。但し予輩は其著なる日本圖會の附錄に於て之を見ることが出來る。

文化以後に於ては和蘭人が日本圖書を蒐集したのは、シーボルド始め澤山あり、繪畫を西洋に持つて歸つたのには、北齋の繪を愛した文政天保年度の甲比丹某がある。（年代及姓名未詳）然し寛政以前では蒐集者として先づチチングを推さゞるを得ない。その外彼の渡來よりも數年以前の安永四年には瑞典の博物學者で後には、かのリンネウスの後繼者となり大學教授となつたトウンベルグと云ふ人が、和蘭の外科醫の資格で日本に渡來し翌春安永五年に江戸へ甲比丹の隨行をして往つたことがある。この學者も日本紀行を著はし、我國の人種言語などの論にも及び、日本本草に關する名著も出來たが、（伊藤圭介が文政十二年に抄譯して刊行せる泰西本草名疏の原本）彼にはチチングのやうな集書や譯書はなかつた。

元祿時代に來朝した最も有名なケンペルは獨逸の學者で、十八世紀中に歐洲に日本の智識を媒介した功績は顯著である。その日本史は安永時代には長崎に傳はつてゐた。（刊行後四十餘年經つてゐる）。日本では享和年間に通詞が其一部を譯して鎖國論と題し、それが隨分廣く讀まれた樣である。その全書の日本史の卷首にある刊行者の緒言の末には、ケンペルが元祿四五年の際日本で集めて西洋に持つて歸つた圖書の名が凡三十五部程揭げてあり、簡短な解題が施してある。訓蒙圖彙などの名も見えてをる。但しこれは中村惕齋の著はした寛文版の方で、增補した元祿八年の方でないことは明かである。三都の地圖は云ふ迄もないが、長崎から大阪までのと、大阪から江戸までのと、二卷の道中繪卷が存在してをるのは注目すべきである。各二十吋の長さで十一吋の幅であるといふ。その他城郭神社

佛閣其他の建築物の彩色圖が五十枚ほどあるさうである。これらは今でも倫敦の大英博物館の東洋圖畫部に藏されてゐることと思ふ。美人の色摺畫が輸出されたチチングの天明時代とは違ひ、元祿頃には風景の肉筆畫が渡つたに過ぎないのは當り前である。ケンペルの覺書の中に西鶴の本朝櫻陰比事の名が見えてゐるのは最も面白い。

天正十三年には九州の大友有馬大村三侯の使節が羅馬法王に謁見して土產を獻じた時、日本の繪がその獻上品中にあつたといふことである。これらが、日本畫といふものが西洋に渡つたので、記錄を存してゐる中では一番古くはあるまいかと思ふ。司馬江漢の春波樓筆記に、慶長年間平戸に碇泊中の英吉利船に、妄りがはしき畫の額が揭げてあつたといふ記事が載つてゐるが、それは誤解らしい。實はその畫の一はビーナスとアモール、卽ち美の女神と愛の小童との裸體畫であつたのを、船中に來た日本人のキリシタン宗の婦人が、聖母マリヤと幼兒耶蘇とだと思つて竊かに拜んだといふ可憐な話が西洋の方には傳へられてゐる位で、裸體畫を見つけぬ日本の武士の眼で卑陋と思つたのも當然ではあるが、極端な類の畫と江漢が書いたのは傳へたものの誤信に出でたものに違ひない。それはさておき、その英吉利船が日本から歸航する際に、隨分極端な畫を持つて往き、それが露顯して罰に會つたといふやうな話が多分その船の船長日記か、時の英人の日誌あたりに載つてゐたと記憶する。繪の品質はとにかく、これらも日本から輸出された邦畫の古い方であらう。

樂翁公が文晁と亞歐堂を愛してゐたことは、知らぬものはあるまいが、司馬江漢は公には持てなかつた樣である。公の退閑雜記の卷二（寛政六年頃）に江漢が銅板の拙なことを毀り、且つ其爲人の孤負狷介な點を貶してをるのは、江漢が春波樓筆記（文化八年）に於て樂翁公の對露政策に論及して鎖國主義を非難したのと對照して見ると、かれこれ論點こそ違へ、二者の合はざることを暴露して餘程面白いと思ふ。江漢は諸侯には隨分多く執入り、紀州侯仙臺侯にも出入し、平戸の松浦靜山（清）、福知山の朽木龍橋（昌綱）、福山の

阿部棕軒（正精）等の諸公との關係は相當に深かつたやうである。殊に阿部侯が寺社奉行を勤めて居た頃にはその臣と名乘り、寺社奉行を笠に着て、西洋の天文學說を以て、佛國曆象編の著者圓通の梵曆論を駁した事もあつて其時の記錄も殘つて居る。阿部侯（正精）の油繪（文化年中なるべし）も恐くは江漢からの傳受ではないかと推察される。阿部侯との關係を知れば、藩儒太田全齋が江漢の西遊旅談（寛政二年）及び和蘭天說（寛政七年）に序文を書いてゐるのなども、よくわかると思ふ。これは又話が違ふが、全齋が柄に似合はず契利斯督記を編した（自撰序文を添ふ）のも、藩主が寺社奉行たる關係からであらうと考へられるのである。

文晁が公餘探勝などの風景畫のスケツチに於て洋畫の影響を受けてゐるといふことは美術史家の說く所であるが、文獻の傳ふる所からは殆ど洋畫の感化につきて何事もわからぬやうである。文晁が長崎に遊んだといふ事を何かで見たと思ふが、今はつきり記憶して居らぬ。文晁畫談には洋畫の話は石川太浪及他一人の說として載つてゐる丈で文晁の書いたものではない。之に反して華山には作品の上からはつきり判るばかりでなく、文獻上からも洋畫の感化の存在は明かに證據立てられてゐる。華山の主君になる三宅友信は、文晁の仕へた松平定信よりも遙かに蘭學好きの殿樣であつた。友信が後年書いた華山の略傳にも華山に與へた洋畫の感化のことは明に認めて、大體の年代をも指摘して居る。然し予輩は別に彼れの全樂堂日錄（天保二年の條）と客座掌記（天保八九年）とを讀んで彼れが蘭書の銅板の插畫類に注意してゐたことを知り、又西洋畫學の書物を讀み、又洋畫略說と名づくる書一卷を藩侯に獻上したことなどをも知ることが出來る。無論華山は語學力は不十分であつても、蘭學者として一家を成す者であつて、その點は文晁とは全く違ひ、寧ろ江漢以上であつた。但し華山が長崎に遊んだといふ說は誤である。

餘談に亙るが、右の華山略傳を書いた三宅友信は諸侯の家中では非常な蘭學者であつて、

佐久間象山も屋蘭書を借覽したといふことである。予も近頃漸く之を知つたことを自白するが、この事は既に知られては居つたのであらうが、近頃催された象山表彰の際などには漏らされて仕舞つたかと思ふ。自分も「蘭學者としての象山先生」には無論述べて置かなかつた。

初めには高松侯に仕へ末には秋田の佐竹侯に知られた平賀源内の眞面目な方での名著である物類品隲（寶曆十三年）の第五卷は一卷全く本草の繪圖であるが、それは楠本雪溪卽ち宋紫石の畫く所である。紫石は長崎に遊び、沈南蘋の高足たる熊斐に畫を學び、後寶曆八年淸客宋紫岩に就き、南蘋の畫風を江戸に傳へた畫家であつて、司馬江漢も中頃これに畫を習つたと例の後悔記に自白して居る。源内が近世油畫の祖とも見做すに足るべきは藤岡東圃の既に唱道する所で、作品では大阪の松雲堂主人珍藏の西洋婦人の油畫像があることは人の知る通りである。其他鳩溪の秋田に及ぼしたる洋畫上の感化なども段々知れて來たが、鳩溪及び江漢と關係深き宋紫石の事はもう少しく注意せねばなるまいと思ふ。紫石が鳩溪の所藏本の和蘭禽獸譜に據りて獅子を畫いたことは既に先進の士の指摘した所であるが、物類品隲の圖繪は頗る貴重な材料になる。この書のことは、近日別に述べるつもりであるから、玆には詳說せぬ。要するに西洋の精巧なる銅版插畫殊に動植圖と、沈南蘋の畫風から出でた一派との間には、接觸すべき點が大であつたと信ずるのである。

源内の戲作上の門人といふ森島中良（桂川甫周の弟）の紅毛雜話（天明七年）には、洋畫や銅板の史料として價値ある記事があるのみならず、插圖には注意すべきものが頗る多い。著者自身の圖も澤山あるが、江漢の靈鷲山絕頂之圖及昆蟲寫生圖をはじめ、馬孟熙（北山寒巖）の鰐の圖や獅子の圖もある。この二圖及中良自畫のダラーカの圖の如きは明かに和蘭本草の圖譜に出でたものと認められる。人或はこのダラーカ之圖と秋田の佐竹曙山公（天明五年卒）の寫生帖中のそれとを對照するも、寧ろ二者共に宋紫石所畫のもの（物類

品隲）に關係せしむべきものではないかと思ふ。尙ほ紅毛雜話には北尾政美（鍬形蕙齋）のエレキテルの圖が載つてゐる。因みにいふ、馬孟熙は蘭學にも達せりといふことである。

（大正五年十月ほんや、埋草）

古銅版畫と辻蘭室

古く京都に傳はつた西洋鏤刻の銅版戰畫について原博士の說明（藝文大正三年九月）があつたのに因んで、今より百年前同じ兩圖の解說を試みた當地の一洋學家辻蘭室のことを紹介しようと思ふ。

現に右の二大幅に添うて二通の書付が存するのを見ると、包紙の表面には各譯文と題して下に蘭學辻信濃守筆又書トアリとあり、但一通には肩に久我殿御內と書添へてある。陸戰圖の「譯文」は文化十年癸酉夏日に成り包紙の裏には同年八月山脇樣[1]ヨリ來と記してある。其全文を多少讀易くして玆に揭げる。

上邊ニ金字大書スルモノ

古銅版畫と辻蘭室

Expugnatio sylva-ducis a° 1629

義文　年紀一千六百二十九年【文化癸酉ヨリ百八十四年前ニ當ル】

シルハドシス〔地名イヅレノ地ナルヤ未詳〕ノ會戰

下邊ニ書スルモノ

Cum privilegio ordinum foederatarium provinciarum

義文　同盟ノ義ニヨツテ國君ヲ入ル

皆羅甸語ヲ以テ記ヨツテ大意ヲ義譯ス

癸酉夏日

蘭室

羅甸句の誤譯は一々指摘するまでもない。次に海戰圖の「譯文」は同年冬日に成り、包紙の裏には同十二月日山脇道作(1)樣ヨリ來とある。文章は稍長いが、當時此地に於る洋學の程度を知る材料にもなるから、併せて全文を擧げることにする。

上邊ニ金字大書スルモノ

Obsidio arcissammatrinianee

義文「アルシッサムマルティニャーネ」地名ノ陣營

右地名ハ北亞墨利加大洲ノ小島「マルティニカ」ノ事乎又ハ亞細亞大州ノ大國帝爵都兒格ノ屬「小アルメニーン」ノ「アルシツサ」湖ヲ云フ乎所藏ニ地理書ナシ考索ヲ得ズ按ルニ全文羅甸語及拂郎私語ヲ以テ書シ且上邊ノ左角缺アリテ全譯スルニ難シ陋見推度ニテハ都兒格ハ亞細亞州ノ一大强國ナリタトヒ拂郎私ト云ヘドモミダリニ侵スベキニアラズ今玆文化十年癸酉ヨリ百八十八年前スナハチ拂郎私國紀千六百二十五日本寛永三年比の彼國王ヲ第十三世ノ「ローデウエーキ」ト云其世ニアタリテ北亞墨利加州中ノ地ヲ奪ヒ新拂郎私ヲ開シ事アリ今此ニ畫スルモノハコノ時近邊二三ノ小島ヲ攻取リシヲ圖セシモノナラン畫ノ左右ニ題號ヲ略書スル中ニ年紀一千六百二十五ヨリ一千六百二十七ニ至リ三年ゴシノ對陣ノオモムキヲモ記セリソノ第十四世ノ王「ローデウエーキ」モ父ニマサレル大豪傑ニテ彼年紀一千六百六十九ノ比國中一變シテソノ勢マス〳〵强大ニテ歐魯巴州中ニオイテ富强ノ大國トナレリト云フ鏤版ハスナハチ拂郎私ノ製ナルベシ

上邊中央圓圍ノ緣邊ニ細書スルモノ

古銅版畫と辻蘭室

Lovis XIII dv nom roij de France et navorre.

義文　拂郎私及「ナホルレ」國名ノ總王「ノム」名ヨリ第十三世の「ローデウエーキ」名

下邊中央圓圍の緣邊に細書するもの

Gaston de—ance frere vnkûe dv roji.

義文　拂郎私國ノ元帥拂郎私總王ノ連枝「ウニクエ」名

右等の外左右緣邊ニ題號ヲ書シ各條ノ下ニ細書スルモノナド皆羅甸語ヲ以テ記ススミヤカニ譯スベキニアラズヨツテ今ソノ大段ノ分バカリヲ譯略シ後考ヲ俟ツ

文化癸酉冬日　蘭室

兩圖の說明書には誤讀誤譯誤解が滿ちてゐるけれども、京都に於て蘭學草創の際に而も羅甸句や佛蘭西語に出會つたのだから、例へば其頃本邦に用ゐられたハンノツト Hannot の羅甸辭書やハルマ Halma の佛語蘭語對譯辭書の如きものを以て努力苦心した擧句に讀めた所がやうやう其位に止つたのも無理はない。殊に海戰圖の「譯文」にてサン・マルタンを亞米利加まで持つていつたり、uniqueを人名と間違へたりしたのは愛嬌極まる話である。

然し譯者辻蘭室は、當年文化十年十月再刻の平安人物誌によると、譯鍵の編者藤林普山と共に京都に於る蘭學者の双絕らしく見えて居るのである。文政十三年十月改刻の人物誌には物產の研究家の中に、藤林・小森・山本・新宮等の諸名家に伍して居るが、又無論醫方にもわたつた樣で、畑維龍文政十年歿京都儒の皇國醫林傳文政五年にも略歷が出て居る。

近世喝蘭之學行也、白石昆陽二先生之賚也、都下唱喝蘭之學者多、然無有能通之者、余舊識辻蘭室、往歲有故被禁錮、杜門不出仕八年、專志於蘭學、覃思于玆、頗有所會焉、居恒歎其無識蘭書者、期知己于後世、而今而後、有識者出、則實不昇代一大盛擧邪、

次に高井泰亮大阪人の藝苑叢記天保元年には次の如き略傳が載つて居るが、其著書は今存否を知られない。

辻出羽守名章從、一名瑛、字玉英、本姓中原氏、號蘭室、仕久我殿、任諸大夫、著蘭語八牋四十卷、凡十二萬言、京師西洋學以是人爲鼻祖、其後普山凉庭出、而後大行、

とあるので、彼れの京師に於ける位置はわかる。西洋學家譯述目錄嘉永五年に見える蘭室及其著書の事は全く右の略譜に據つたものであらう。

文化七年の京羽二重には、辻信濃守とあつて同姓左兵衛尉や、春日筑前守などと久我家の諸大夫に列してゐるが、禁錮不出仕八年とあるは、何時の事かわからない。それを記してある醫林傳の成つた文政五年から逆算して、銅版戰圖譯文の出來た文化十年迄及ぶと、杜門八年は文化十一年頃から文政四年頃までの間で、其期に前信濃守と稱へ後再出仕して出羽守と召ばれたと考へられぬでもない、これも一の推定である。但し文化十年の人物誌には前信濃守とあるのに譯文の包紙には單に信濃守とあるのは聊か疑問となる。まあ斯樣な事は孰れにしてもよい。彼れの子安藝守章達は人物誌文政十三年によれば、儒者にて詩を能し、文政十五年天保改元三月二十一日に洛東で催された以文社尙齒會の詩歌集には、父子の漢詩及序文が載つて居る。同書には又一族辻和泉守七十一歳の和歌や俳句（落柿舍吾同と號す）がある。又蘭室の女婿なる御醫法眼百々俊德の詩もある。因みに云ふ、其時の尙齒會には賀茂季鷹七十八や山田以文七十等も交り、山脇法眼七十四も列したのであつた。又辻氏一族の墓が今大德寺碧玉菴の墓地にあることは山本氏の平安名家墓所一覽續正に見える通りである。

蘭室は天保六年十二月十三日八十一歳の壽を以て終つたのである。

蘭室の洋學の來歷を一言したいと思ふが、それには勢寬政以降文化年度の京畿の蘭學界の模樣に及ぶ要がある。平安京に西學の曙光が東方よりさして來たのは、天明五年杉田玄白が藩侯若州小濱酒井家に陪して歸國の還路京に立寄つたをり、大阪在住の小石元俊小濱藩士の子が上京して屢蘭方を尋ねたのが機となり、元俊が東下して主として玄白や大槻玄澤に就て西洋醫學を學んで同七年西歸した頃であつた。元俊が歸阪後、資を投じて浪華の一職工橋本宗吉を江戸に留學させ、宗吉が間重富等を介して玄澤に入門するに至つたのは其の翌年の事である。先づ大阪に於て小石の蘭方、橋本の蘭學が麻田・高橋・間等の新曆學と相待つて寬政年中の異彩であつた事は言ふまでもない。京都の新學は如何であつたか。寬政の中期には、未だ西學の中心人物は現はれなかつた。藤林普山天明元年生小森桃塢天明二年生はまだ十餘歳

の少年である、元俊の子で後京都に名を立てた小石元瑞（天明四年生）は更に幼い、文政以來に業を成した新宮涼庭は此頃恰度生れた所である。强ひて人を擧げれば、華頂宮の侍醫たる廣川獬（大内介字子典號龍淵）が寛政中前後二回も長崎に遊び各在留三年歸つて後長崎聞見錄（寛政九年序同十三年刊）五卷を撰し、更に下つては享和の末年に蘭療方（淇園序）を刊し、文化の終には蘭例節用集を著はすが如き素養を積んだことなどが注目すべきに違ない。然し語學及醫術の造詣に於て京都の新人を指導する丈の力を缺いて居た樣に見える。當時の新人物にして幕府に擧用された者を、大阪の高橋東岡（寛政七年東下三十二歳）に對して京都に求めたなら、小野蘭山（寛政十一年東下七十一歳）を推さざるを得ないが、改曆の擧をはじめ、延いて譯局創立の端緒をも作つた高橋の成績の方が顯著であることは疑ない。寛政の末より享和に及んでは阪地に人材輩出し西學興隆の兆の著しきに對して洛陽の洋學は尙萌芽の域を出でなかつた。殊に智識の根本ともなるべき語學の點に於て立後れた氣味がある。海上隨鷗（稲村三伯）が江戸で修業を積んで京都に移住したのは文化の二年であるから、寛政頃には一人として語學を授ける者は京都には居なかつたのである。

寛政五年九月一日附、大槻玄澤から洛醫村田元朔に復した書狀（磐水存響）に由ると、京師にて辻蘭室はじめ同社中で蘭學の會讀をもなし、毎に江戸の杉田玄白へ文通で質問をしたりして、斯學に執心中であつたことが窺はれる。蘭學研究の方法殊に辭書について蘭室が間接に尋越したのに對して玄澤から懇切に答へたのが右の書狀の主旨である。從つて京地に於る蘭學の起りは先づ此頃と認めて差支なからうし、卽ち蘭室が其魁をなして居る。當時彼は三十九歳（寶曆五年生）であつた。推察するに七八年前杉田玄白が上京の感化もあつたに違ひない。稻村三伯が因州より江戸に遊學して玄澤に入門したのは、其前年の寛政四年で、爾來四年にして東都二三の先輩と在府舊崎陽の一譯官の力を借りて、漸くハルマの蘭佛辭書の和解を編して同八年波兒麻和解（はるまわげ）十三卷（江戸ハルマ）を刊すること僅に三十部、之を同學の士に頒つたのであるが、其餘澤が直に京阪にまで及んだかどうか疑はしい。然し編者が名を海上隨鷗と改め西上して斯地に居を占めたのは、江戸ハルマ出版後十年に當る文化二年のこと

であつて、間もなく藤林普山（山城綴喜郡水取村）小森桃塢（伏見）等を始め洛の內外の學徒が從遊し、其成果は僅か二年を經て高弟普山が編纂して刊行した譯鍵となつてあらはれた。それは嘗て杉田玄伯を京に迎へて學を聞いた小石元俊の歿した文化五年であつて、隨鷗（文化七年五十三歳）の歿する前二年の事である。此時分既に學界の奇傑野呂天然は江戸より京地に上つて居たか否か不明であるが、文化十年――卽ち蘭室の銅版畫解說の年――には生象約言の刊行もあり、或は京に隱退して居たかも知れぬ。然し恐くは時の學界とは沒交涉であつたらうと思ふ。

京都の蘭學が進步の階段に於て蘭室が戰圖說明を試みた文化十年は、注意すべき歲である。藤林普山が和蘭語法解を著はした二年後刊のも、新宮凉庭が長崎に遊學したのも同じく此歲である。不完全ながらも多くの學徒を益した大辭書を纂譯して刊行したのも、讀書の指針となるべき文法書を編述して出版したのも、共にまづ京都の人が權輿である。而して右の文法書に序した醫廣川子典が、同じ文化十二年に蘭例節用集と名けて刊行し舊來の節用集の語詞配列の順序を新式に改修したのは、時代に先だち過ぎて或は衆人の利益とはならなかつたかも知れぬが、特筆すべき書と認めねばならぬ。斯くの如き蘭學界の新著述が京都にあらはれたのは頗る奇である。而るに尙一を加へることが出來る。卽ち玆に蘭室の蘭語八牋四十卷寫本と名のみ傳はつて居る著書は、やはり辭書であらうが、十二萬言といへば三萬言とある譯鍵よりも遙に大きいものである。予輩は學界の爲にこの書のいつか世に出で來ることを切望して止まない。

蘭室の洋學は久我內府公信通の遺志を繼いだものだと大槪磐水の書狀に見えるが、公のこの方面の事蹟は未だ分らない。西洋の事物を愛玩し傍ら學問の一端に觸れた所謂蘭癖家には諸侯で江戸に薩摩の島津重豪、其子なる中津の奧平昌高、福知山の朽木昌綱等があつたが、その風潮は京都の公卿にも及んで久我公も亦其一人であつたと見える。

蘭室はまた露西亞字を習つた。時代が割合に古いのは妙である。享和二年春稿した「魯細亞（しあに）字」と題する僅か四枚に足らぬ程の紙葉が、仙臺の大槪平泉の手によつて傳へて遺されてある。平泉清準（民治）は同族の玄幹（茂禎）と共に長崎に遊學の歸途文化二年京都に立寄り蘭室

に會ひ、閏八月八日その旅舍に彼れの稿本を謄寫したのである。この小寫本は後年彼れより民治に宛てた書狀[3]等と共に大槻家に現存する。さて蘭室が如何なる筋から魯西亞字などを習つたか又何の爲に學んだか其邊は不明であるが、文化初年の露船渡來以前の事であるから頗る面白い、而も京都の公卿の諸大夫などの仕事としては甚だ意外に思はれるのである。尤も單に文字と其發音とを說いたものに過ぎない。

・辻蘭室の其他の事蹟はまだ知られない。文政以後に於る京都の洋學家の話もこゝには省いて置く。終に臨んで筆者は本稿を草するに當つて大槻如電翁東京と山本臨乘翁京都とが貴重な文書を示され有益な資料を供されたのを深謝する。

（大正三年八月七日記）

註(1)　銅版戰畫の譯文を取次いだ山脇道作とは東洋の孫に當る東海〔橘約字子斑〕で同じ文化十年の平安人物誌にも出て居る當代の名醫である。圖の所藏者と解說者蘭室との間に立つ中介者であるらしく、恐くは前者から頼まれて後者に譯を託した者であらう。他日調査の手掛りにもならうと思ふから一言添へて置く。

(2)　畑維龍の四方の硯（享和三年）雪の卷に「廣川某といへる人長崎にしば〳〵遊で云々」とある。

(3)　この書狀の中に見える三國祝章については當代藝苑の一佳話として傳ふるものがあるが、餘白がないから他日の發表にゆづる。

（大正三年九月）

更紗の名義

一

昨今見かける爪哇更紗は、われらが家に先代あたりから傳はつた古渡りの更紗にくらべて模樣や地色がずつとエキゾチックな感じをわれらに與へてをる。例へば、江戸時代の言ばつかひを移して云へば人形手ともいはうか、奇怪な鬼のやうなものの模樣を見ることがある。それを見入ると荒海にゐる手長足長といつたのはこんなものではなかつたかと思はれるばかりの、まあ蠻繪とでも名づけたいやうな氣がして異國情趣に打たれるのである。稻葉通龍が天明五年に著はした更紗圖譜に出てゐるコンロンザラサといふ模樣などが、色はよくわからぬが今の爪哇更紗に似てゐる樣だ。却つて同じ書に見えるジヤガタラザラサの如きとは、趣が違つてゐると思ふ。尤もすべてこれらの言草は、われら素人の見方から出て來るだけであるから、專門家や好事家の方にいはせると、こんな表つ面の詮議では通らないに違ひない。圖譜の解說によると、

コンロンザラサ。是は紅毛船のクロバウと云ふものの頭に蒙りたる手ぬぐひの如きものなり。故にカブリザラサとも又ハナフキとも云ふ。京にて贋造するものを南京ザラサと稱す。然れども南京ザラサと云ふもの、舶貢のものにあることを知らず。

とあつて、年々爪哇から來航する阿蘭陀船に使役される黑奴が頭をつつむのに、かういふ花布を用ゐてゐたといふのである。この種類の更紗の舶載は、まだ天明頃には稀であつた樣であるが、それから五六十年程經た天保弘化時代には、輸入が多くなつて來たと見えて、守貞漫稿にその由が見えてゐる。「近來多く持來る也、長崎にてかぶりと稱し夷人下司是を以て頭を裹む也、故にかぶりと云ふ也」と同書（第十六篇織染）にあるのは、全く更紗

圖譜のいはゆるコンロンザラサに當るのである。圖譜につゞいて天明七年に出來た森島中良の紅毛雜話卷一を見ると、黑坊手拭と題して、この更紗のことが稍々細かく記るしてある。

黑坊の頭を裹む風呂敷の如きものを黑坊口にてサブターガンといふ、サブとは掃ふ事、ターガンとは手の事なり、日本に云ふ手拭なり、蠟形にて模樣を置き、藍にて染拔きたる物なり、其染方をバテッキといふ、今世に黑坊更紗、南京更紗と唱ふる物なりと玄澤子語られき。

これは前々年長崎に遊學して江戸に歸つた大槻玄澤の話を聞いて書いたのだから確かだ。なほ森島の雜話卷三には爪哇の風俗を敍して、「男は蓬頭にして女は堆髻にす、男子は布を以て頭を纏ふ、此布の事をサブターガンといふ」といひ、右の話を更に裏書きして居る。卽ちバティック battik といふ用語も旣にあの頃の蘭學者には知られて居たわけであるが、今の馬來語でサーブターガンは手拭ハンケチの意である。いかにもサーブ sapu は拂ふ又拭ふの義、ターンガン tangan は手の義で、これを同語族一流の造語法でわれらとは逆に結びつけて手拭といふ熟語が成立つのである。これらの土俗は那翁時代の英領のころに同島の總督をしてゐたラッフルスの書いた爪哇史の如き舊著（卷一第二及第四章）によつても知られるが、近年公刊された蘭人の好著一二につきて委細學ぶことが出來るけれど、そこまで深入りせずに、江戸時代の異國情調をそつくりそのまゝ回顧して味はうとするなら、却つて紅毛雜話などの書振りに妙味を感ずる所があるわけだ。もう一つ南海紀聞といふ漂流記に南國の花布のことが出てをるのを引用しよう。天明の中程から十五年乃至二十年も前に遡る話であるが、筑前の舟夫が明和二年春一人いきながらへて比律賓の一島に漂着してそれから更にボルネオに漂泊すること數年間で、遂に爪哇にたどりつき、阿蘭陀船に載せられて明和八年に日本に送りかへされた奇聞を、後年筑前藤の儒者青木興勝が聞取つて編述したものが、卽ち南海紀聞であつて、それが更に程經て木活字で出版され、又漂流奇談全集等にも收められて世に知られゐる。この書の中には、紅毛雜話よりは精細に、その

漂民の目擊談でサブタガンのことが見える。主に渤泥の風俗である。

男子は剪髮を被り眉上に至る、サブタガンと云へる手布の如きものにて頭顱を包む○サブタガンは花布條布の類を用ゆ、○女子は平生は皆上衣を脫し廣幅の花布長さ五尺許りなるを纏うて乳を掩ひ隱せり○花布を纏ふには背より兩胸の下に引廻し胸脇まで引違へて留む總て男女貴賤共に跣足なり、貴人の衣裳は多く印花布或は唐山の綵帛の類を用れども下賤の者は皆國產の蕉紗を用るとぞ。（卷五、風俗、服象）

なほサブタガンといふ頭を包む花布のことは卷一通紀上の終に比群島のミンダナオ島に流寓中の話にもみえ、卷五ボルネオの酋長が川船に乘つて蘭人に接する條等にも出てゐる。

まづかういふ南島の服飾は、漂流人からも聞知されたが、長崎に渡つてくる黑坊の風俗を目睹して知られ、又段々幕末近くなると其種の花布も輸入されたこと、前記のとほりであつた。「蠟形にて模樣を置き藍にて染拔」く所のバティック法卽ち上古唐から傳へた蠟纈の法に當る其方法も日本に知られてゐて、和製の摸造製品が出來たことも亦上述の如くであるが、技工に亙る事柄はわれらの知らざる所である。

享保五年に成つた西川如見の長崎夜話草卷五附錄に長崎土產物を擧げて解說した中に、「花手拭。南蠻傳、花鳥の形をしぼによせたるものなり、長崎に一人の外は造る者なし」とあるのは、更紗染のことではないかも知れぬが、和蘭人系統でなくして葡萄牙人傳來の技術による更紗染が長崎あたりに傳はつてゐたかとも思はれる。江戸の本草學者たる後藤梨春の紅毛談（明和二年）といふ小冊子の下卷に同じくこの花手拭のことが出てゐるが、絹布に染めるやうに記るしてあるから、印花布たる更紗とは違ふこと、長崎の分の如くであるかも知れない。

花布の名は、まづ村瀨栲亭の藝苑日涉卷十一棉布の條に出てゐる所で漢土の書物を索引してみると、暹羅や眞臘（カンボヂヤ）の土產として見えてもをるが、尙一層廣く又古く遡つて攻究していかねばならぬが、それは今われらが當面の業ではない。またさしあたり、外蕃通書や通航一覽の暹羅國部で同國より獻上品目の中に花布かと見えるものがないでも

ないことを知り、更に華夷通商考で暹羅を始め交趾東埔寨等の土產品に花布のあることを注意すると、古くから暹羅染と名づくる更紗染の技術が傳はつてゐたことも相當の來歷の存することだと思はれる。然し如何にしてその技が暹國から傳はつたか、或は又如何にしてさういふ名稱を得たかといふことは知れて居ない樣である。川島元次郎氏の朱印船貿易史に見える江州の暹羅屋勘兵衞の家傳のたぐひも一つの手がかりであらう。

暹羅染の名は、正保二年刊行の松江重頼の毛吹草卷四の山城國の名產品目中に初めて見えて居る。この書は寛永十五年に成るといふ說があるから、この染物は慶長元和の交、或は遲くも寛永初年代には京都に傳へられてゐたに違ひない。下つて貞享三年刊行の黑川道祐の雍州府志七土產門の服器部には、唐染、暹羅染、佐羅佐染などと並記されてゐる。毛吹草には紗羅染と書いて、それにしやむろといふ傍訓がしてある。畢竟サラサ染とシャムロ染とは同一であらうが、暹羅染の名稱は、京都を始めとし、それから江戸等へ傳はつていつたものであらうか。正德の和漢三才圖會（卷二十七絹布類）以下、安永の倭訓栞、その他風俗服飾を誌した書物には普く標出してある所である。

二

サラサの語原は從來ほゞ定說らしいものが日本の學者に行はれてをるので、何等かの確かな新說がそれ以上に出されるかと云ふと、さういふわけではないけれども、然らば、もはや疑ふ餘地はないか、研究の見込みはないかと云ふと、決してさう斷ずることは出來ぬのである。先づサラサの語の出典を日本の文獻に就いて調べ併せて其漢字を一應探つて見る。われらの知つた限りでは、慶長二十年九月七日附で、唐津の寺澤氏の家來からエゲレスカピタン卽ち英國の商人頭なるリチャード・コックスに宛てた請取書に、「かなきん」と「さらさ」と「しまもめん」との品目が見えてゐるのが一番古い。この文書の原本は大英博物館の所藏で、村上氏の公刊された『ロンドンの日本古文書』（史學雜誌第十四編）に收めてある。それ以後には、德川實紀の寛永十八年十二月以後の蘭使貢獻の品目や通航一覽阿蘭

陀國部に於ける同年度の進上物目錄に見えたのを初めとし、爾來殆ど年々と云つてもよい位に、右兩書中にあらはれてをる。殊に寛文以後になると益々多い樣である。又通航一覽の諳厄利亞國部に、延寶元年英國商船が貿易の再開を試みる爲に來航した時、花大紋さらさ二千五百端を船載して來たことが見えてをる。右二書とも同一の日記を材料に使ひながら、寛永十八年の獻上に、通航一覽では、さらさと平假名になつてゐるのが、德川實紀には更紗の文字が宛てゝある樣に、兩方の編纂物に往々文字づかひが相違することがある。材料になつた原本の記錄なり文書なりを、根源近く遡ることは、煩雜な業で時に殆ど不可能かも知れぬから、姑く編史の上にあらはれた字形をとるとすると、更紗といふ宛字は、德川實紀では寛永十八年を首めとし、慶安三年四年承應二年三年の古きに遡るが、通航一覽の方では寛文元年度のに見えるのが最も古く、それ以前の分はみなさらさと平假名に書いてある。或は、この本の方の書き樣がむしろ古いのではないかと思ふ。ずつと後世になると皿紗の宛字もみえて來る。とにかく更紗といふ宛字は、あまり古くないらしい。毛吹草には、前記の如く紗羅染と書いてシヤムロ染と訓であるが、別の織物の名のサラタ（スラタ）織を紗羅陀また紗羅詑と書いてあるのが正保三年承應二年の進上品目にみえ、慶安四年のには更多縞とも出てゐる。されば、之によつて類推すると漢字を宛てたのでは、紗羅紗の字が一番古いかも知れぬ。後年の著ながら倭訓栞にも常に紗羅紗と書けりとある。貞享三年刊行の雍州府志には佐羅佐の字があてゝある。元祿三年刊行の人倫訓蒙圖彙（卷六）には沙羅沙とある。

漢語の花布または稀に印花布の文字を、サラサと訓むのも元祿時代から見えてゐる。もつと古くからあるであらう。長崎方面の著では大抵この漢字を使つた。藝苑日涉（文化四年刊）には勿論この漢語の例證豐富であるが、伊藤東涯の名物六帖（服御箋）には、期待に反いて全く見えぬ樣である。節用集の如き通俗辭書に登錄されたのでは、元祿十一年の合類大節用集すなはち江戸の槇島氏の和漢音釋書言字考が最初ではなからうか。それにはサラサゾメとして印華布（第六卷服食門）の字が出てゐる。正德二年の大阪の寺島氏の和

漢三才圖會には、同じく華布と標出して、註して印華布の字を出し佐良左の音を附けてある。二書共に暹羅染とも出てあるのは、上節に引いた如くである。三才圖會には、「華布は卽ち西洋布を茜を用て花文を染む、初め天竺暹羅より出づ、今中華より出づる者を唐華布と爲す、今本朝多く染出す者は、洗へば華文消え易き耳」と説明してあるが、生産の國土を擧げた書では、元祿八年の刊本、長崎の西川如見の華夷通商考、および寶永五年同書の增補刊本があるから、之に據るより外ない。卽ち花布の産地としては、印度支那では交趾と東埔寨と暹羅とを擧げ、印度本土では、莫臥兒（モーウル）と、コストカルモンディルと、サラアタとの三部を擧げてをる。モーウルは所謂モゴル帝國であり、コストカルモンディルは印度東岸の中部以南一帶をいひ、その中には更紗で名高いムスリパタムをも含みマドラス或はサントメなども込められる。サラアタは尙後に詳說する如く、ボンベイよりも北に當る印度西岸の北部の河港で蘭英二國の商業地として聞こえてゐた處である。通商考の寶永增補本には阿蘭陀の土産に金ザラサを擧げてあるが、元祿初刊本にはない。咬嚕吧すなはち爪哇のバタビヤの土産には花布を兩版本とも記載してない。正德三年の新井白石の采覽異言（卷三）には莫臥兒の産物に紅印花布を擧げ、暹羅の番貨に雜色花布を出してある。

安永天明時代になると、更紗便覽（佐羅紗便覽）或は華布便覽を首とし、更紗圖譜などもあらはれ、種々の名稱や模樣の呼方なども附けられてゐるが、玆には煩を避けて言はない。古く知れて居る所では、霜降更紗といふ名が慶安四年承應三年明歷元年あたりの幕府への獻上品目に見え、又華夷通商考のサラアタ土産や長崎蟲眼鏡（寶永元年刊）の異國渡端物字盡の中に出てをる。その他花ざらさとか花大紋さらさとか金ザラサとか紬ザラサとかいつた名目が、以上の諸書に散見してゐる。金さらさの名のみは、特に倭訓栞の中に書添へてある。薩州侯島津重豪が家臣に命じて編纂させた南山俗語考（明和二年跋、文化九年序）といふ支那語の辭書（卷五衣飾部）を見ると、印花布にカタツキと訓し花布にハナヌノと訓してあるのは、直譯した新造語らしいから取りかねるが、辭書の上では倭訓栞の紗羅紗の漢字に對して、俚言集覽が更紗の俗字を登錄した。文化十一年の刻本、京都の廣

川氏の蘭例節用集（また蘭例語典）には沙羅紗印華布と出てをる。その外、和蘭字彙（桂川甫周刊、安政二年）に皿紗とあるを除くと、大抵の蘭語又は英語の舊辭書には花布または印花布で出てをるのである。漢字のあてかたは先づこれで打切る。

三

サラサは外國語であつて日本語ではないと云ふことだけは、古くから人の知つて居た所であるが、中には江戸の津村正恭（文化三年歿）の譚海卷十四にサラサを「とうゐん」（唐音すなはち近世支那音）と見たやうな異說があるのを除くと、皆これを產地の名から出た名稱だとする點に於て一致する。最も古くは寶永正德か享保初年のころ、名古屋の學者天野信景の編した鹽尻に、サラサは國の名から出たので、永樂年中、明國に來朝した二十六國の中の捨剌齊國がそれだと說いて小窓別記卷一の四夷考を引いた。その引用原書は未だ見ないが、瀛涯勝覽や星槎勝覽には見かけぬ國名である。とにかく語原說としてはよい見當をねらつたと云ふべきである。下つて天明七年に出版した森島中良の紅毛雜話卷二に至つて始めて、まづ完全な語原考が紹介されてゐる。本書の所說は多くは、蘭學界の俊才たる桂川甫周等の話に由るので、この條も亦長崎の譯官から聞いたものである。卽ち左の如く出てゐる。

皿紗は南應帝亞の地スラタといふ國より出すとなり、紅毛にてはセッツといふ、さらさといふはサラタの轉語なるべしと譯家の說に聞り。

同じ說は、大槻磐水の口授した所を門人有馬元晁の筆記して天明八年に編した蘭說辨惑（寬政十一年刊）卷上にもある。

問て曰く、さらさといふは是れもおらんだ語なりや。

答て曰く、これは本名せっつといふ、さらたと云ふ地より出すものを上品とす、夫故さらたと云ひたるを聞あやまれるなるべしと小川悅之進かたりき。

小川悅之進といふのは、多分長崎の譯官などではないかと思ふが、確かには知らぬ。さ

すれば磐水が長崎留學のをりなどに聞いたのだらう。出所は他日の攷究に讓るが、とにかく江戸の蘭學者間には、右の如き說が傳はつて居たのだ。さて右二書にセッツとあるは、蘭語の saiz をさしたので、森島の類聚紅毛語譯、すなはち蠻語箋の原本（寬政十年）にも華布（サラ）をセッツとし、箕作阮甫の同書の改正增補本（嘉永元年）には之に chits と原字を宛てた。ハルマの蘭佛辭典にも SITS, chits と見え、それを譯した長崎の所謂道譯法爾麻を出版した和蘭字彙にも、それを皿紗と譯し、それより舊い江戸ハルマの流を汲んだ京都の藤林氏の譯鍵にも、中津侯の奧平昌高の辭書（文化七年）にも、それを印花布と譯してある。畢竟このセッツ（シッツ）の語は、英語のチンツ chintz にあたる語で、蘭語の形は葡語から入つたものとも見られるし或は直接に印度の土語から傳へたとも考へられるが、それは少し岐路に入るから考證せぬが、要するに元來は印度の土語で、遡れば梵語のチトラまでにも達する。幕末の英語辭書、たとへば萬延の福澤諭吉の增訂華英通語なり文久の石橋政方の英語箋なり慶應の堀達之助の英和對譯袖珍辭書なりにも皆このチンツを花布（サラサ）と譯した。

明治以後の學者の語原說を窺ふに、先づ學藝志林第十四卷（明治十七年）に出た大槻文彥氏の外來語原考には、サラサは「蘭語なるべけれど詳ならず、英語に唐棧の事を Taffaseras（タッファセラス）といふ是等の語の上略にもあらんか」と出てゐたが、其後この說を撤回して言海には、語原說を揭げず、たゞ「南印度のすらだ（或はさらあだ）の地の產を絕品とし」と暗に磐水翁等の古說に呼應されたかの樣にも見えた。これと同じ態度とも見え聊か異るのは、村上直次郎氏が日本外來語辭典に揭げられた說で卽ち、「往時印度の Surat 地方より我邦に輸入したる織物にして名稱ももと印度語ならん」と言はれたのも、やはり上記の古記に合槌を打たれたかの樣に見える。氏は以前に發表された西洋語彙すなはち『往時の西洋交通が國語に及ぼしたる影響』（史學雜誌第十四編明治三十六年）の中に於ては、サラサを葡萄牙語 Saraça とされたのであつたが、後には此の考から更に深く語原に遡らんとする態度をとられたかの樣に見える。故前田太郎氏の論文『國語になつた西洋

語』（史學雜誌第二十二編第七號明治四十四年）にはサラサの語原としてでなく、サルゼ（葡）セルジ（英）語原を印度 Surat にもつて行かれようとしたのは失當であつた。齋藤阿具氏に至つては『サラサ（更紗）の語原に就いて』（歴史地理第二十五卷第二號大正四年）といふ論文を特に起稿して、サラサは葡語より出で、其葡語は印度の地名 Surat より出たことを考定せんとされた。氏は日本在來の諸說を擧げ更に同氏が自ら調べられた海牙（ハーグ）文書にも、十八世紀頃蘭船が長崎に持渡りたる商品中にはいつも多量の Chitsen Snalle Soutaty があつたことが出てゐると、研究を進め、尙ほ葡語の語原辭書がないため正確な語原はミケーリスの葡英辭典の所說だけを參考に擧げられた。最後に昨年京都の明石國助氏が出された更紗小話（日本上代染織史附錄）に見えた「更紗の字義」に關する考は、要するに從來のスラート說に出でず、「スラートをサラーサと聽き終にサラサと轉換」したものだと註釋された。これまでに出て居る諸說はまづ以上擧げた所で盡きてゐると思ふ。日本百科大辭典（明治四十三年）にても大日本國語辭典（大正五年）にしても、同じ考を取つたに過ぎぬ。

我國に於て始めてサラアタといふ地名を擧げたのは華夷通商考である。元祿八年の初版二冊本にも寶永五年の增補五冊本にも出てをる。阿蘭陀人商賣往來の國三十五個國の一として增補本卷四によるに、サラアタは「モウル國の手下にて守護を置て仕置す、南天竺の內と云、此國並ベンガラ國共に富豐なる國とぞ」（抄）とある。土產にはサラタ島、サラタ金入などを筆頭に金巾、セイラス、サラサ類等が半分を占めてゐる。新井白石の采覽異言卷三（正德三年）のモゴル、莫臥兒の地誌の註にサラアタといふ名のみ出てゐるが、風土や產物を特記してない。本書を後年增補した山村昌永の增譯采覽異言（享和二年）卷七には沙刺太またの名修刺的となつてゐるが、產物中に、特にこの地名を負うた織物染物のことに說及んでない。端物地としては、德川實紀正保三年の蘭使獻上品にすらた織、慶安四年度のに更多織、承應二年のに、紗羅陀二種と出てをり、通航一覽の方には承應二年分のに、紗羅陀筋繻珍と、絲紗羅詑嶋と、木綿紗羅陀嶋と、サラダ產が擧げてある。寶永元年